

## 猫と村正

「母危篤すぐ歸れ」といふ電報を受取つた私は、身仕度もそこ／＼に、郷里名古屋に歸るべく、東京驛にかけつけて、午後八時四十分發姫路行第二十九號列車に乗りこんだ。この列車は昨今「魔の列車」と呼ばれて盜難その他の犯罪に關する事件が頻々として起り、人々の恐怖の焦點となつて居て、私も頗る氣味が悪かつたけれど、母の突然の病氣が何であるのかわからず、或は母が既に死んだのではなからうかとも思つて氣が氣でなく、この列車が私の利用し得る最初のものだつたので、とりあへず、その三等席に陣取つた譯である。

「魔の列車」とはいへ乗客はすでに東京驛で一ぱいにつまつた。私の席のすぐ前の腰掛は黒い色眼鏡をかけ、麥稈帽をかぶつて、洋服に夏マントを着た四十格好の人によつて占領されたが、その顔が非常に蒼ざめてゐて、いはゞ人相がよくなかつたので、私は時節柄一寸、氣味の悪い思ひをした。然し、靴をぬいで腰掛の上に坐り、車窓にもたれて眼をとちると、いつの間にか人相の悪い人のことなど忘れてしまつて、頭は母のことで一ぱいになつた。

いつもならば、私は列車の響に眠氣を催すのであるが、今夜はなかく眠られさうになかつた。後には、牛込の寓居に残して來た妻子のことや、半分なげやりにして來た會社の仕事のことなどが思ひ出されて、とりとめのない考へにふけつてゐたのである。

梅雨どきのことゝて、國府津を過ぎる頃は、雨がしきりに降り出して、しと／＼と窓を打ち、その音が、私の清瀟ない思ひを一層強めるのであつた。列車内は煙草の煙が一ぱいで、旅客の中には眠つてゐるものもあれば、まだ盛にはしやいでゐるものもあつたが、薄暗い電燈の光に照された陰影の多い人々の顔には、何となく旅の悲愁といつたやうなものが漂つてゐた。さうして私の氣のせるか、人々の顔には「魔の列車」であることを意識して警戒するやうな表情が讀まれた。ふと、私の前の、人相の悪い人に眼をやると、その人は軽い鼾をかいて眠つてゐた。

でも、そのうちに考へ疲れた／＼めか、私はいつの間にかう／＼としてゐた。列車が濱松を過ぎたころであつたと思ふ。車内がにわか騒々しくなつたのに眼をさまして、何事か起きたのかと注意すると、車掌やその他の鐵道従業員があわ／＼しく往來してゐた。私は妙な豫感に襲はれて、私の前の座席を見ると、色眼鏡をかけた人相の悪い人はどこかへ行つたと見えてその場になかつた。で、私の背後にゐた人に何事が起きたのかときくと、今二等車で、乗客が大金を盗まれた／＼め大騒動をしてゐるのだといふことであつた。私は「魔の列車」がその名にそむかなかつたことを知つて全身がぞつとするやうに思つた。

それから私は手洗に行かうと思ひ、何気なく立ち上つて、靴をはかうとすると、私の右の靴が紛失してゐることに氣附いた。私ははつとした。腰掛の下を探しても見えないので、宵の口から想像力の旺盛になつてゐた私には、私の靴の紛失が、何だか、二等車の盗難事件と関係のあるやうに思へた。魔の列車——二等車の盗難——人相の悪い男の不在——私の靴の紛失。かう考へて来ると、私はもうぢつとしてゐられないやうな氣がした。

「おい車掌さん、大變だ。僕の靴が片一方なくなつた！」

私は通りかゝつた車掌に向つて、大聲でかう叫んだ。乗客は一齊に私の方をながめ、中には立ち上る者さへあつた。

車掌は顔を曇らせながら、近づいて来て、先づ私の腰掛の下を捜したが、もとより有らうはずがない。それから私の前においてゐる腰掛の下を捜しにかゝり、暫くの後、立ち上つたときには、その右手に一個の靴がつかまれてゐた。

「ちやんとこゝにあるぢやありませんか。あんなに大袈裟に仰しやるものだから、びつくりしてしまつた」

と、車掌は私を責めるやうにいつた。私は一寸恥かしい思ひをしたが、ふと氣がつくと、車掌のつかんでゐるのは、私のとは少し恰好がちがつて、しかも不思議なことには左の靴であつた。

「車掌さん、それは僕のではないよ。第一僕になくなつた靴は右だのに、それは左の靴ぢやないか」

かういはれて、こんどは車掌が變な表情をして、自分の持つてゐる靴と、私の右の靴とを比較べて見た。

「はてな、これはをかしい、ことによると……」

この時、留守にして居た色眼鏡の人が手巾で手を拭き、歸つて来て、車掌の姿を見るなり怪訝な顔をして立ちどまつた。車掌は早くもその人の足に眼を注ぎ、

「おや、あなたは、兩足とも右の靴をはいてゐるぢやありませんか」といつた。

その人はうつむいてしばらくの間足許をながめてゐるが、はじめて氣のついたやうな表情をしていつた。

「や、これはどうも、ついその……」

「この靴があなたのでせう？」と車掌は手にしてゐた靴をその人の前に差出した。

「いかにもそれが私のです」と、その人は顔を紅くして答へた。

車掌の顔には疑惑の色が浮んだ。こいつ怪しい人間だと思つたのであらう。急に眞面目な態度になつていつた。

「でも、をかしいぢやありませんか、他人の靴をはいて。それに氣がつかぬとは？」

「いや、全く申し譯がありません、何しろ……」  
 「申し譯がないではすみませんよ。かういふ間違ひは、偶然な間違ひとは考へられませぬから」

「で、間違ひにちがひないのだから勘弁して下さいよ。わたしは今手洗に行つて来たゞけです」

「それやね、いつもなら、笑つてすまされませうけれど、何しろ今二等車にある事件が起きたのですから、御面倒でも一寸車掌室に来て下さい」

その人は急に顔を蒼くした。

「それぢや、納得の行くやうにこゝで申し上げよう。實はわたしは、片眼が不自由なんです」

かういつて、その人が色眼鏡を取ると、右の眼のつぶれた跡が悲惨な姿をしてゐたので、私は非常に氣の毒な思ひがした。

然し車掌はなほも得心しなかつた。

「けれど、他人の靴か自分の靴かは足の感しでわかるではありませんか」

「それがその私の左足は義足なんです」

かういつて、その人は、洋袴をまくつて見せようとしたので、車掌は始めて顔を和げ、「もう、それには及びませんよ。いやどうも失禮しました」

から、いゝて車掌は靴を置いて、逃げるやうにして去つた。しかしその人は別に怒つた顔もせず、再び私の前に腰掛けていつた。

「あなたの間違へたのでせうか、大へん失禮しました。何しろ不具ものですから、どうか御ゆるしを……」

「どう致しまして」と、私はあわてゝ制していつた。「さぞ御不自由で御座いませう。とんだ御心配かけまして却て恐縮です」

それから私が手洗をすまして歸つて來ると、その人は棚の上の信玄袋から、梨と小刀を取り出し私にもすゝめた。私はその好意を謝し、内心では、それまでその人の人相のよくないことは疑惑を抱いたことを恥ぢて、遠慮なく、御馳走になつた。母や妻子のことで一ぱいになつてゐた頭に、この時はじめて餘裕を生じ、それと同時に、私はその人に對して一種の興味を感じはじめた。といふのは、私は、いはゞ直感的にその人が何か深い因縁で、不具者になつたやうに思へたからである。

「どちらまで、御越して御座いますか」とその人は私に向つてたづねた。

「母が危篤だといふ電報を受つたので、名古屋まで歸るところです」

「さうですか。それは御心配で御座いますな。いやもう、さういふ時の御心持には十分同情が出来ますよ。私はいま家内の遺骨を携へて家内の郷里の天津まで行くところです」

私はそれをきいて何となくぎくりとした。さうして思はずもその人の顔を見つめた。

「御母さんの御病氣のときに、こんな縁超のわるい御話をしては大へん失禮でしたな」

「いゝえ、私は縁起とか何とかを決して信じません」と私は笑ひながら答へた。

するとその人は急に眞面目な顔つきをして言った。  
「私も以前は、縁起だとか、物の祟りだとかを信じなかつたのですが、かうして家内に死なれたり生れもつかぬ不具者になつたりしますと、やはり、さういふことを信じないではゐられなくなりましてよ」

私はこの言葉をきくと妙な感じに襲はれた。といふのは、平素私は迷信を一切排斥してゐたのであるが、今日母の危篤の電報を受取つてからといふものは、何となく迷信を斥けることが出来ぬやうになつて、實をいふと先刻、この人から、妻の遺骨云々のことをきいたとき、何だか母が死んでしまひさうな氣がしてならなかつたからである。

「奥さんは最近におなくなりになりましたか」と、私はしんみりした氣持になつてたづねた。

「ちやうど五十日前になくなりました」といつてその人は悲しい表情をした。私はこんなことをきかねばよかつたと思ひ、話題をかへるつもりで、

「失禮ですが、あなたは戦争にでも御出になつて、負傷なされたので御座いますか」と、たづねた。

するとその人は更に一層悲しげな表情をしていつた。

「妻のなくなつた同じ日に眼と足に負傷したのですよ。ですから、まだ義足をはき馴れてもをらず、先刻はとんだ失敗をしたのです」

私はその時、その人の悲しみに同情するよりも、私の豫想が當つたやうな氣がして、その人の不具となつた事情がきゝたくてならなかつた。しかしまさか、その話をきかしてくれともいへぬので、そのまゝ口を噤んで窓の方に眼をやつた。

雨はまだ頻に降つてゐて、窓を打つ水滴が碎けては流れた。汽車は私たちの氣持を少しも知らぬ氣に、相變らず單調な音をたてゝ走つた。私が再びその人の方を向くと、ちやうどその時二人の視線が打つかつた。するとその人は、私の心の中を察したと見え、にこりとしながら、

「まだ夜あけまでに間があるやうですから、一つ私の身の上話を御耳に入れませうか」といひ出した。私は心の中で大に喜んで、同意を表すると、その人は次のやうな恐しい物語りをはじめた。

私は日本橋に株式仲買店を持つ辻といふもので御座います。御承知のとほり、株屋などといふものは非常に迷信深いものですが、私は先刻も申しましたとほり、決して迷信などを意にかけませんでした。ところが最近私の身にふりかゝつて來た不幸と災難のために、すつかり私は迷信家

になつてしまひました。さうして、今では、物の祟りだとか縁起だとかを信じない人は、その人が平凡に暮して来て、何の不幸にも逢はない證據を示してゐるやうなものだと信ずるやうになりました。

私がこゝに持つてゐるのは、實は私の後妻の骨で御座います。先妻は一年半ばかり前になくなりましたが、それ以後私の家には不幸が續き、たうとう後妻にも死なれ、私までがかうした不具になつたので御座います。さうして、これらの不幸や災難はみんな先妻の亡靈の祟りだったので。いや、かういふと、あなたは私の迷信を御笑ひになるかも知れませんが、だん／＼御話をすれば御わかり下さるだらうと思ひます。實は先妻は自然な死に方をしたのでなく、自殺して相果てたので御座います。

昔から女の執念は恐しいものだと思ひましたが、かうも極端なものだといふことは、過去四十二年間夢にも思はなかつたので御座います。彼女の自殺の原因はやはり嫉妬に外なりません。私が他に女を拵へたのを憤つて、日本刀で頸をかき切つて死んだのです。私は彼女の家に養子に迎へられたのですが、結婚後二年ほど過ぎると両親が相前後して死に、私たち二人きりの身うちとなりました。私たちの間に子供がありませんでしたが、それが彼女のヒステリーを一層重くならしめた原因だらうと思ひます。元來彼女は、一口にいへば醜婦といつた方がよく、はじめは私は彼女との縁組に不服でしたが、種々の深い事情があつてかうとう結婚こそで御座

います。それが抑もの間違ひのものでした。即ち私が斷然として養子に行きさへせねばよかつたのです。つまり私の意志が薄弱であつたことが、今かうした悲運を齎したといつて差支ありません。仲人は私に向つて先方が容貌が悪くても、ほかに美しい女を圍へばよいではないかといつて私に頻にすゝめました。さうして私は皮肉にも、仲人の言葉を實行してほかに女を圍ふやうになつたのですが、そのために先妻は私とその女をうらんで自殺したので御座います。

容貌のみにくい女は残忍性を持つといふことを、何かの書物で讀んだことがあります。私は私の經驗によつて、その残忍性が死後には一層強くなつてあらはれるといふことを發見しました。私の圍つたのは藝者上りの女でしたが、一たびそのことが先妻の耳にはひりますと、私の家は實に暗澹たる空氣に満たされました。彼女は泣いて私に訴へるばかりでなく、時には噛みついて私を責めるのでありました。その都度店のものが仲裁にはひつてくれましたが、さうしたことが度重なつた末ある夜、私が女の許へ行つて居た留守中に、家に代々傳はる村正の刀で頸部をかき切つて自殺を遂げたので御座います。

この村正の刀といふのは、申すまでもなく、その家に不幸を齎すといふ言ひ傳へがあります。一旦鞘を出ると血を見ずにはをさまらぬといふやうなことも申します。何でも四代前の主人が發狂して同じ刀でその妻を斬つたといふことでしたが、先妻も、やはり發狂して、同じ刀で自分を斬つたので御座います。いや、うっかりすると、私も共に斬られてゐたのかも知れません。佐野

治郎左衛門の芝居を見ますと、「籠釣瓶はよく切れるなあ」といふ科白がありますが、あの刀もたしか村正だつたと思ひます。私の家に傳はる村正も、その籠釣瓶のやうに實によく切れるので御座います。先妻はその村正を右手に持つて、頸部を横に切つたのですが、創は脊椎骨に達するくらゐで、検屍の人もびつくりしました。たつた一刀で、しかも女の力であのやうな創の出来るといふのは、刀がよく切れたからだと推定されました。後に私自身もその村正の切れ味を経験して、いかにもよく切れることをたしかめた譯ですが、私は從來、どんなによく切れる刀でも、これを使用する人の腕が達者でなくては、そんなに見ごとに物を切ることが出来るものでないと思つてゐました。ところが、後にその考への根本的に誤つてゐたことがわかつたのであります。

さて、先妻はその時に恐しい遺言状を残して行つたので御座います。その文句によると、幽霊になつて私の女を取り殺し、並びに私を不具にするか、或は取り殺さねば置かぬといふのであります。果して私たちは、そのとほりの運命に出逢つたので御座います。

尤も、その時は、嫉妬に驅られた女の常套語として、私は少しもそれを氣に懸けませんでした。さうして、先妻の死後半ヶ年といふものは私にも女にも何事も起りませんでした。で、私は身のまはりの不自由を感じて、たうとう、その女を家に引き入れて後妻としたのですが、それはいはゞ不幸を招く發端となつたので御座います。

私の家には、祖母の代から飼ひはじめたといふ三毛の雌猫がをりました。可なり大きな身體を

してゐましたが、この三毛を先妻がわが子のやうに可愛がりました。その可愛がり方は實に常軌を逸してゐたといつてもよい程でした。先妻が自殺してその死骸が発見されたとき、三毛が死體の上に乗つて蹲つてゐたので、店のものがびつくりして追はうとしても、暫くの間はどうしても動かなかつたといふことでした。この三毛が、後妻に少しも馴染まなかつたので御座います。後妻が抱き上げようとしませんが、必ず引掻いて逃げて行きました。私は先妻の生きてゐる時分からあまり三毛を好みませんでした。先妻が死んでから三毛は私に對しても、何かかう一種の敵意を持つてゐるかのやうな風をしました。さうして三毛は時折ちつと立ちどまつては、私たちを凝視するのでしたが、その凝視に逢ふと、私も後妻も肌粟を生じないではゐられませんでした。たうとう後妻はあの猫には先妻の死靈がついてゐるから、どこかへ捨てさせてくれと私に頼みましたので、はじめに私は店のものに牛込の方まで持つて行かせて捨てさせたのでした。二日すぎるとちやんと歸つて来てをりました。いよいよ私たちは氣味を悪がつて、それから随分遠いところまで度々捨てさせたのですが、四日過ぎると必ず歸つて来るのであります。後妻はいつそ毒殺してしまはうかなども申しましたが、何だか、後の祟りがおそろしいやうに思はれたので、その儘毒殺を決行せずに過ぎました。

とかくするうちに、先妻の死後一年あまりを経ました。すると後妻は右の眼がかすんでよく物が見えなくなつたといひ出しました。私は早速眼科醫に見て貰ふやうにすゝめましたが、後妻は

大の△△教信者でして、御祈りして貰へばなほるといつて、醫者へは行かずに近所にあつた△△教支部に通つたのでした。然し眼はだん／＼見えなくなるばかりでしたから、私はしきりに醫師をたづねるやうに主張しましたが、後妻も中々頑固なところがあつて、かへつて意地になつて反對しました。

ある日、後妻が△△教支部から歸つて、私に向つて申しますには、神様にうかゞつて貰つたところ、自分の眼病は先妻の祟りで、三毛に先妻の死靈がのりうつゝてゐるから、三毛のある間は眼病は治らぬ、それゆゑ、これからは三毛のみなくなる御祈りをしてやるとのことだつたと告げるのでありました。私はそんなことが果して出来るかどうかを内心大に疑つてをりました。

ところが、不思議にも、それから間もなく三毛がゐなくなつたのであります。十日経ち二十日経つても歸つて来ませんでした。後妻はこれを知つて大に喜び、いよく神様の不思議な力を信じ、自分の眼病も遠からずなほることゝ樂觀してをりました。

ところが眼病はよくならないばかりか、いよく右の眼は見えなくなつてしまひました。それでも後妻は△△教の力にたよつて醫師を訪ねようとはしませんでした。

ある夜私は可なり遅く歸宅しました。いつも後妻は私より先に寝たことはありませんでしたがその夜は少し気分が悪いといつて床の中にはひつてをりました。さうして、いつも電燈をつけて寝るのでしたが、その夜は眼がちらつくといつて電燈を消してをりました。私は何氣なく、その

寢室をあけますと、妻は私の聲をきいて起き上りましたが、その時私は暗やみの中に猫の眼のやうにぴかりと光るものゝあるのを認めました。

「三毛がゐる！」と私は思はず叫びました。

「ひえーッ？」といつて後妻はとび上つて電燈をつけました。

ところが、その室には三毛の姿が見えませんでした。私たちは思はず顔を見合せましたが、お互ひの顔には、恐怖と安心との混合した表情が漲りました。

「まあ、驚いた！」と後妻は申しました。

「いや、俺の見違ひだつたんだ！勘忍してくれ！」

かういつて私は寢間着に着換へ、彼女を寝かせて電燈を消し、いざ寢ようとする、後妻の枕もとのあたりに前と同じやうなぴかりと光るものを見ました。私はがばとはね起きて、電燈をつけましたが、やつぱり猫はをりません。

「まあ、どうしたといふの？」と、彼女はびつくりしていひました。

「なに、何でもないんだ」と答へた私の聲はたしかに顫へてをりました。

それから私は電燈を消して再び寢につきましたが、やがて私が彼女の方を向くと、再びぴかりとするものが見えました。私ははげしい興奮を辛うじて抑制しながら、徐ろに右手をのばして、その光るものゝ方へ近づけると、私は思はずも彼女の鼻をつかみました。

「何をなさるの？」と、後妻は笑ひながらいひました。私は笑ふどころでなく、なほもその光る物の方へ指をのぼして行きますと、彼女の右の眼の睫毛にさはりました。私はぎよつとして手を引きました。

猫の眼のやうに光るのは、まがひもなく彼女の右の眼でした。

私はその時心臓が胸の中から、抜け出るかと思ふやうな感じをしました。後妻が猫になつた！

猫の祟り！

先妻の執念！

かう考へると私は、もう恐しさに彼女にそのことを告げる元氣がありませんでした。その夜は一晚中考へて寝られませんでした。あくる日になつて、私は斷然彼女には告げないで置かうと決心しました。彼女がもしそれを知つたならば、發狂し兼ねはしなだらうと思つたからです。或は私の錯覺であつたかも知れぬと思ひ、その後、くらやみの中でそれとなく彼女を観察しましたところ、まがひもなく彼女の眼は猫のやうに光りました。

私はその時はじめて、物の祟りといふことを信ずるに至りました。今になつて見れば彼女の眼の光つたのは何も不思議なことではありませんが、しかし、物の祟りを信ずるの念は、もはや動かすことが出来なくなりました。

後妻は何も知らずに△△教に通ひました。然し右眼は遂に明を失つてしまひました。とかくするうちに、彼女の眼は暗やみの中で光らなくなりましたので私は一時内心で喜びましたが、明を恢復することが出来ぬばかりか、だん／＼右の眼が前方に突出して来るやうになり、それと同時に彼女ははげしい頭痛を訴へました。

ある日彼女は突然高熱を發してどつと床につきました。私はもう我慢が出来なくなつて醫師をよぶことにすると、さすがの彼女も同意を表しました。診察に来て下さつたN博士は、彼女を診察し終るなり、私を別室に呼んで、

「はじめ奥さんの右の眼は、猫のやうに暗やみの中で光りはしませぬでしたか？」

と、小聲でたづねました。私はびつくりして答へました。

「さうです」

「あれはグリオームといふ病氣で、網膜に出来る悪性の腫瘍なのです。子供に多いのですが、大人にもたまにあります。猫の眼のやうに光る時分に剔出するとよいのですが、今はもう手遅れです」

「手遅れと申しますと、右の眼が助からぬといふことですか」と私は心配してたづねました。

「いゝえ、残念ながら腫瘍が腦を冒しまして、急性腦膜炎を併發しましたから、とても恢復は望めません」



私は脳天に五寸釘を打込まれたやうに思ひました。地だんだ踏んで後悔してもはや及びませんでした。

その夜から妻は高熱のために譫語をいふやうになりました。

「三毛が来た！」

「三毛が来た！」

から叫び續けて、三日目の午後、彼女は二十七歳を一期として瞑目しました。

たとひ、彼女の右眼の病氣が不思議な原因でないとかわかつて、私は、彼女が先妻の死靈の祟りのために死んだのだとかたく信じた。さうして、私は心の中で、先妻の死靈と、その乗りうつつてゐる三毛とを呪ひました。若し三毛がその時家の中にゐたならば、きつとたゞき殺したにちがひないと思ふほど憎悪の情に驅られました。

私は彼女の死體を八疊の室に運ばせました。この室は縁側がついてゐて前に可なり広い庭を控へ、彼女が生前一ばすきな室であつたからです。私は障子を取り拂つて彼女を庭の方へ向はせ、香を焚きました。香の煙が流れて、庭の新緑の木葉のまはりにたゞよつた有様は、今でも忘れることの出来ぬ悲痛な印象を與へました。

それから私は親戚のものたちと葬式その他の準備の相談をすべく別室に集りました。すると程なく店のものがあつて、私のところへ飛んで来ました。

「旦那大へんです、三毛が庭へ姿を見せましたよ」

これをきくと同時に、私の憤怒の血は一時に逆上しました。私は三毛に復讐するのはこの時だと思ひ、奥の間へ行つて、村正の刀を取り出しました。さうして死人の室の襖をあけますと、驚いたことは三毛は死體の上に、どつしりと蹲まつてをりました。

私はさつと刀を抜きました。三毛は私の殺氣を認めたのか、ぱつと飛び出して、庭の上に走り降りました。私も續いて庭に降りました。その時、三毛は庭の杉の木にすらくとのぼりかけましたので、私は追かけざまやつといつて、三毛に斬りつけました。

果して手ごたへがありました。

はつと思ふ間に、私は左の足と右の眼に燃えるやうな痛さを覺えました。

三毛を斬つたと思ひの外、三毛は逃げてしまつて、直径五寸もあらうと思ふ杉の幹を、斜に眞二つに切り放つてをりました。さうしてその上の方の幹が手前へすべて下に落ちたとき、その尖端が私の左の足を芋刺しにしてをりました。それと同時に、一本の枯枝の端が私の右の眼をつぶりとつき刺してをりました。

こゝまで語つて、色眼鏡の人ははつと一息ついた。汽車は相變らず同じやうな響を立てゝゐたが、私は何だか恐しい世界に引き摺り込まれて行くやうな思ひがした。

「いや、とんだ長話をしましたな」とその人は續けた。「私はそれからすぐ病院にかつぎ込まれ、右の眼はつぶれたぐけですみましたが、左の足が化膿してつひに膝から下を切断するのやむなきに至りました。後妻の葬式は親戚や知人の手で営まれ、私は四十日間の入院の後、義足をつけて歩くことが出来るやうになりました。三毛はその後姿を現さず、永久に行方不明になりましたが、私の不具になつたのも、やはり先妻の祟りだと信じて疑はないのであります」

話しが終つた時、雨はやんで夜は白々と明けかけてゐた。名古屋でその人に別れて、家に駆けつけると、母は脳溢血で重態に陥つてゐたが、四日の後、たうとう一度も意識を恢復しないで死亡した。私は汽車の中のあの恐しい話しが、何となく、母の死の前兆であつたやうな気がしてならないのである。

## 姐已の殺人

八月のある夜、例のごとく私は、松島龍造氏の探偵談を聞くべく、その事務所をたづねた。「暑いではありませんか。とても日中には外出出来ませんから、御迷惑かもしれませんが、かうして夜分に御伺ひしました。……夏の夜には怪談がふさはしいと言はれて居りますから、出来るなら、怪談めいた探偵談を御話し願ひたいと思ひます。」

「さうですねえ」と松島氏は暫らく考へこんで言つた。

「私たちの怪談と稱するものは、怪談らしく見えても、事實は怪談でも何でもないといふのが多いのです。然し、たつた一度、變な殺人事件に出逢つたことがあります。怪談といへば怪談ですが、ちつとも凄くはありません。又、探偵談といへば探偵談ですけれど、別に探偵的興味の深いものでもありません。だから、お話しすれば、きつと失望なさるにちがひないと思ひますが、

兎に角、御望みに従つて、申し上げることに致しませう。」

たしか四月の末だつたと思ひます。T裁判所検事局の市江検事から、ある事件に就て探偵して  
 もらひたいから、御足勞ながら即刻来てくれぬかといふ電話がかゝりました。市江検事とはそれ  
 まだに數回顔を合せたことがあります。かつて検事局から探偵を依頼されたことは一度もな  
 かつたので、どんな事件かと思つて、好奇心に驅られながら、出頭しました。さうして、市江検事  
 に逢つて話をきくと、事件といふのは大たい次のやうでした。

府下S村の閑靜なところに、二人の青年藝術家が、一軒の西洋風のアトリエを建て、同棲して  
 居ました。一人は西川といふ彫刻家で、他の一人は小山といふ畫家です。西川はW大學の法科を  
 出たのですけれど、天才肌の男で、彫刻に異常な天分を示す事が出来ました。炊事のために村の  
 百姓家の婆さんが頼んでありましたが、婆さんは二人の家に寢泊りはしないで、朝十時頃に來  
 て、晩の七時頃に歸つて行くのが例でした。

二人は非常に親密で、まるで兄弟のやうに仲がよいので、二人の交際する藝術家たちの間で  
 は、二人が同性愛に陥つて居るであらうと専ら評判しました。然し二人は、人の噂などに少しも  
 氣にかけないで、おの／＼その道に精進するのです。

ところが、ある朝、雇はれの婆さんが、アトリエに行くと、昨日まで達者であつた畫家の小山

が死んで、彫刻家の西川が、まるで失神したやうな顔をしてその死骸に取りすがつて居ました。  
 婆さんはびつくりして、交番に届け出でました。次で警察の人が出張し、警察醫が死骸を検査す  
 ると、何處にも、何の痕跡もありませんでした。けれど何となく小山の死に疑はしいところがあ  
 ると見えたので、遂に市江検事の活動となつたのです。

市江検事は直に出張して、彫刻家の西川を訊問したのですが、彼はびつたり口を噤んで返答を  
 しませんでした。やむを得ないので死體を解剖に附せようとすると、彫刻用の鑿を振りまはし  
 て、どうしても人々を近づけないから、検事は西川の精神が落つくまで待たうと決心し、警官に  
 見張番をしてもらつて、一先づその場を引上げ、それから、平素西川と小山の交際して居る藝術  
 家たちをたづねて、二人の生活の模様を聞き出さうとしたのです。

その結果、市江検事は西川と小山とが不思議な仲であることを知りました。それはどんなこと  
 かと言ふと、小山はいはゞ心靈研究者で、西川を靈媒として、暇あるごとに靈界の人々と交際し  
 て居たのださうです。はじめは、あまり澤山の心靈を呼び出すことは出来なかつたらしいのです  
 が、後には澤山の世界中の有名な人々の靈とも交際するに至つたといふことでした。中にも彫刻  
 家として名高いイタリアのミケランゼロの靈を度々呼び出すことが出来たさうです。友人達は  
 二人からその話をきいて

「ミケランゼロとは面白い、同性愛の標本ともいふ人だつたからなあ。」

といつて、ひやかしたさうですけれど、二人は至つて眞面目な顔をして、ミケランゼロの靈の活動状態を話したのださうです。ミケランゼロの靈が、靈媒即ち西川に完全にのりうつると、西川は異常な緊張をもつて彫刻を始め、神韻渺茫ともいふべき作品を製する事が出来たのださうです。然しこれはもう半年も前のことで、最近に二人はちつとも姿を見せないのです、どうして居るのか、誰もくはしいことを知つて居るものはなかつたのです。

市江検事はそれ故、小山と西川の最近の心理状態については知ることが出来ず、従つて、小山が病氣のために頓死したのか、それとも、毒をのんで自殺でもしたのか、或は又、誰かに毒殺でもされたのか、少しも見當がつかせませんでした。然し、二人が靈界と交渉を持つて居たといふところから、小山の死が、何かそれに關係して居るやうに思はれるし、又、西川の口をあかせるには、心靈學を利用した方がよいやうに思はれたので、私が催眠術を得意とすることを知つて居る市江検事は、一しよにアトリエに行つて、西川の訊問に立ち合つてほしいと告げたのであります。

私は催眠術の知識だけは、人なみに持つて居るつもりですが、心靈學の知識は至つて覺束ないので、それから、そのことを検事に話して、誰か他の人を選ぶやうにと言ひました。すると検事は、若し、私と共に行つて不成功に終つたならば、別の人に頼むとして、兎に角、一度、一しよに行つてくれと言つたので、私も、多少の好奇心が手傳つて、同行を承諾しました。

検事局から、自動車で凡そ四十分、私たちはS村の美しい丘に到着しました。その邊一帶はいはゞ森林地帯ともいふべく、ところ／＼に赤い屋根の文化住宅が散見する有様は、ちやうどパリに近いフォンテンブローの森を思はせました。フォンテンブローの森といへば、やはり、藝術家たちがたくさん住つて居るところですが、西川、小山の二人の藝術家も、恐らくそれにならつて、この地にアトリエを建てたのであらうと思ひました。

アトリエのまはりには広い庭になつて居りました。アトリエそのものは、さほど美しい建物ではありませんでしたが、老松がぎつしり取り圍んで、いかにも氣持ちのよい雰圍氣をつくつて居りました。庭の上には、アネモネや、チューリップや、ムスカリーや、パンジーなどが咲きみだれて、無風流な見張番の警官の姿が、その場には不馴なものであるとしか思へませんでした。ことに、アトリエの中に、靈界と交際して居る人が住んで居るかと思ふと、老松の枝のうねなどが一種の神秘的な氣分を作つて、ミケランゼロの靈が、そこらあたりに飛びまはつて居るのではないかと、一種の不氣味な戦慄にさへ襲はれたのでした。

検事が先に立つてアトリエの支關に進み、ベルを鳴らすと、蒼い顔をした髪の長い青年が出て來ました。いふ迄もなく彫刻家の西川でした。彼は検事の顔を見るなり、又來たかと言はんばか

りに肩をひそめました。が、検事が私を紹介して  
 「これは松島さんといつて心霊研究者です。」  
 といふと、西川の顔は急に晴れやかになつて、  
 「さあ、おはひりなさい。」

といつて、馴々しい態度で私たちをアトリエの中に案内しました。私は、市江検事が私を心霊研究者にしてしまつたことに、心の中で苦笑を禁ずることが出来ませんでした。心霊研究者と  
 きいて、西川が急に元気づいたことは、何となくうれしい気がしました。  
 案内されたのは、ブロンズの塑像や作りかけの胸像の澤山ならべてある室でして、私たちは取りあへず、そこにあつた籐椅子に腰をかけて西川と對座しました。

「先刻はどうも失禮しました。」

と、西川は意外にもやさしい態度で申しました。彼は昨夜眠らなかつたのか、眼の廻りに黒ずんだ輪が出来て居りました。

「非常に悲しんで居たところへ、皆さんがどや／＼はひつて來られたので、つい腹が立つて、何事をきかれても返答しまいと決心したのです。それに、私が本當のことを言つても、心霊學者を知らぬ人には到底了解出来まいと思つたから、かたく口を噤んだのです。然し心霊研究者が來て下さつたとなれば、質問に答へます。」

「小山さんはいつなくなりましたか。」  
 と検事がたづねました。

「なに、なくなつたものではありません。靈界へ行つただけですよ。」  
 と、彼は、アトリエの天井の一隅に眼をやつて答へました。

「それでは、いつ靈界へ行かれましたか。」

「ゆうべの眞夜中ですよ。」

「どういふ原因で、靈界へ行きましたか。」

「殺されたのです。」

「私たちは思はず顔を見合はせました。」

「え？ 殺されたのですつて？」と私が口を出しました。「誰に殺されたのですか。」

彼は暫らく隣室の方を見つめて居りましたが、

「彼女です、彼女が殺したのです。」と答へました。

「彼女とは誰ですか。」

「……………」

私は少しく氣味が悪くなりました。暫らくの間、會話がとだえてしーんとしたため、戶外で小鳥の鳴く聲がしきりに聞えました。

「すると、小山さんは自然な死に方をなさつたのではないですね？」と検事がたづねました。彼は何思つたか、妙な笑ひを洩しました。

「人間が死ぬに自然も不自然もありませんよ。」

「だつて今、あなたは小山さんが殺されたと仰しやつたではありませんか。」

彼は急に眞面目顔になりました。「そりや、私が以前法律を修めたことがあるので、法律家の前だから、さういふ言葉をつかつただけです。」

「よくわかりました。で、小山さんは、どんな風に殺されなかつたのですか。」

彼はうつむいてぢつと考へました。さうして、

「そのことも話さねばならぬのですか。」と悲しげな顔をしてたづねました。

「お話しにならないければ、小山さんの死體を解剖に附せなければなりません。」

解剖ときいて、彼はふるつと身ふるひをしました。

「それは残酷です。では何もかも御話しします。」

## 三

「私と小山君との仲、即ち内面的の交際がどの程度のものであつたかは、到底他人にはわからぬと思ひます。私には生れつき不思議な能力が具はつて居ました。それは何であるかといふに、

私の靈魂は容易に私の肉體を離れて、靈界の人々と交際し、私の睡眠中には、私の肉體に他人の靈魂が宿り得るのでした。さうして最近私の肉體へは故人となつた世界で有名な人々の靈魂も宿るやうになりました。

小山君は、私のこの性質をよく知つて、反抗することの出来ぬ強い力をもつて、私を眠らせ、色々の人の靈魂を呼んで私の肉體に宿らせました。時には孔子の靈が宿るかと思へば、時にはアレキサンダー大王の靈が宿りました。或は又、ミケランゼロの靈が宿るかと思へば、菅原道實の靈が宿りました。さうしてそれ等の靈は、彼等が生きて居た時のことや、靈界へ去つてからの後の生活状態をつぶさに物語りました。その物語によると、私たちが學校の歴史でおぼえたこと、大へんな隔りのあることを知りました。今の歴史と稱するものはみんな嘘です。ある時代の完全な歴史を編纂しようと思つたならば、その時代の著名な人間や、又は著名ならざる人間の靈魂を呼んで来て、彼等自身に物語らせればよいと思ひます。生きて居るうちは、本人自身でも、自分の過去をはつきり物語ることが出来ませんが、靈魂は寸分の間違ひもなく、過去のあらゆる出来事を物語ることが出来るからです。

それは兎に角、偉大な政治家や藝術家や科學者の靈が私に宿つて、彼等と自由に交際の出来たことは、一面からいへば非常に愉快でありました。どんなむつかしい哲學上の問題でもカントの靈を呼び出せば容易に理解し、又は解決することが出来ました。むつかしい彫刻の際に、ミケラ

ンゼロの靈を引つ張つてくれれば、鑿は自由自在に動いて、思ふとほりの表現を行ふことが出来ました。

かくて私も小山君も、一時は言ふに言へぬ幸福につかつて居ました。それはまつたく他人の想像も及ばぬ大きな幸福でした。ところが、この幸福の時代も、實は長くは續かなかつたのです。即ち、一人の女のために、私たちのこの幸福は滅茶々に破壊され、その結果、つひに小山君が彼女のために殺されてしまつたのです。げに女ほど、人間世界の幸福を奪ふ悪魔はまたとありません。

かう語つて西川は、再び隣室の方に眼をやりました。彼はそれから、私たちの顔をちつと見くらべましたが、私たちが神妙に聞いて居たので、安心したものの、如く話し續けました。

「それまで、私に宿る靈魂は、みんな淡泊な無害なものばかりで、私の意志に反してまで私の肉體を占領しようとは致しませぬでしたが、彼女に限つて、私の肉體を占領しながら、私の意志に反して勝手次第に暴威を逞しくしました。

彼女とは、外ならぬ、股の紉玉の妃であつた姐已です。始め彼女は至つて従順でした。彼女の姿體は、私が今まで見たどの女よりも美しいのでした。單に生きた女ばかりでなく、あらゆる時代の名匠の手になつた繪畫や彫刻にあらはれたどの女よりも強く私の心を惹きました。私は彼女の姿を大理石に彫刻しました。それは今、小山君の死體のある隣室、即ち私たちの寢室に置かれ

てありますが、それを見る何人をもチャームしないでは置きません。彼女はよく語りました。さりして、彼女の残忍性についても、一種の辯解をしました。彼女が人間を憐いたり殺したりする光景を見て喜んだのは、彼女の心が二代も三代も否十代も進んで居て、當時の人間が、まどろっこく、物足らなくて仕方がなかつたから、一人でも多く殺したがよいと思つたためだと申しました。さうして、彼女は二十世紀の現代人ならば、自分の心を満足させてくれるだらうと言ひました。

まつたく、彼女が現代人にあこがれる心は旺盛でした。その證據に彼女は斷髪して居ました。スカートの短い洋装をして居ました。その姿が何ともいへぬチャームングなもので、さうしてまつ先に、すつかりチャームされてしまつたのが小山君でした。小山君は姐已の靈に猛烈に戀をしなければならぬ。すると姐已も小山君に劣らぬ熱情をもつて小山君を戀し始めたのです。これが抑も不幸の始めでした。後には彼女の靈は、小山君が呼び出すのも待たないで、勝手に私の肉體を占領しました。小山君も彼女の姿を見ないでは、生きて居れぬといふ程度になりました。遂には彼女は私の意志にさからつてまで、私の肉體を占領しますし、私が彼女の靈を私の肉體から遠ざけようとすると、小山君は泣き悲しんで、私に嘆願しました。私は實に困つてしまひました。で、仕方がないから、たうとう私は、犠牲になつて、彼女と小山君とのために、まつたく自由な戀を味あはせてやることに致しました。

それから、小山君と姐巳とは二月ばかりも夫婦のやうにして暮しました。夜な夜な、抱擁に接吻に、狂態痴態の極をつくした生活が営まれました。然し、だん／＼時を経るに従つて、それまで殆んど影をひそめて居た私の靈魂は眼をさました。私の心には、製作慾が甦つて來ました。姐巳の姿體を彫刻してから、長い間何一つ製作しなかつた私は、ぢつとして居れないやうな藝術的衝動に驅られました。私はそれ故、姐巳の靈を私の肉體から追ひ出さうとつとめました。ところが、彼女の靈は、冬の川岸にしがみつく根笹の枯葉のやうに、しつ／＼と私にへばりついて居りました。

けれども、たうとうしまひには、彼女を私の肉體から遠ざける事が出來ました。私は私の肉體を取りかへすなり、ほつとした氣持になりました。さうして、久し振りで製作に従事することが出来るのを喜びましたが、その喜びも言はず束の間でした。即ち、小山君が猛烈に憤慨し出したのです。私たちは荒い言葉を取りかはしました。これまで一度も経験したことのない敵意を相互に感じました。さうして時には二人の間にはげしい格闘をさへ起しました。

ある夜、私たちがはげしく争つて居りますと、突然姐巳があらはれました。さうして小山君と二人がかりで、私を征服して、再び姐巳は私の肉體を占領しました。それでも毎晩彼女が私を占領しかける時には、私は全力を盡して抵抗しました。が、彼女の残忍性は日一日強くなり、後には如何なる方法を講じても私の肉體を占領せずには置かなくなりました。彼女の力ばかりでも、

私は征服されさうになるのに、いつも小山君が加勢するのですから、私は敗北せざるを得なかつたのです。かうして私な厭々ながら再び二人のために犠牲的な生活を餘儀なくされましたが、以前の時とちがつて私の心は、隙さへあらば、反抗しようとして居りました。

戀人同士二人にとつても、かやうな生活は不愉快であつたにちがひありません。然しそれと反對に二人の戀は、ますます深みへ落ちて行くやうに思はれました。で、早晩、何事が起きなくてはならぬ情勢になつて居りました。さうしてたうとう昨夜の悲劇が起つたのであります。

昨夜姐巳はいつもの如く、暴力をもつて私の肉體を占領しようとしていました。私は常に似合はぬ強い反抗心をもつて抵抗しました。姐巳と私とのはげしい格闘は眞夜中まで續きました。

ところがいつもならば、小山君が姐巳に加勢するのですが、昨夜にかぎつて、どうし／＼譯か躊躇して居ました。これを見た姐巳は、私との闘争をやめて、突然小山君に、とびかゝつて行きました。次の瞬間二人の間に、世にも恐ろしい格闘が起つたのです。私はこのはじめての光景を見て、暫らくぼんやりして居りましたが、はつと氣づいて、二人をわけやうと思ふと、急に私の肉體が輕くなつたのを感じました。即ち、姐巳の靈は、いつの間にかその姿をかくしたのでした。然し、それと同時に私は私の前に、小山君が死體となつて横たはつて居るのを發見したのでした。

いふ迄もなく小山君の靈は姐巳の靈に連れて行かれたのです。姐巳は私の肉體を占領するの煩に堪へかねて、自由自在に戀愛生活を営むつもりで、小山君の靈を引つ張つて行つてしまつたの



です。

これが小山君が、さびしく死體を殘すに至つた顛末です。即ち普通の言葉でいへば、小山君は姐已のために殺されたのです。私はもう小山君を殺した彼女の姿を見るに堪へません。これから私は彼女の彫像にも終りを告げさせようと思ひます。」

かう言ふが早いか西川は、傍にあつた鐵槌をとつて、隣室に走りこみました。さうして、私たちが止める間もなく、ベッドの傍に置いてあつた大理石像の頭部を微塵に打ちくだき、雪の如き無数の破片が、白いシートに蔽はれた小山の死體の上に飛び散りました。

x

x

x

x

x

「お話といふのはこれだけですわね。」  
と松島氏は續けた。

「小山が果して姐已の靈に殺されたかどうかは、西川の言葉以外に、何の證據もありませんでした。西川は「偏執狂」の病名のもとにS精神病院に收容され、小山の死體は解剖されたのですけれど、暴力を用いた形跡もありませんでした。執刀者のR博士は、多分自己暗示による死であらうと説明されましたが、或はさうだつたのかも知れません。それにしても、姐已が二十世紀に活動するやうでは、お互に油斷がなりませぬねえ。……」

### 刹那の錯誤

岡村は、その細君の自殺によつて、精神に非常な打撃を受けた。その結果所謂「異常」を呈した。たらしかつたが、何しろ、むかしは戀女房だつたので、それはまことに無理もないことであつた。

彼の細君が何故に自殺したのか、別に遺書も發見されなかつたからわからぬけれど、岡村にはその理由が十分に推察された。即ち、細君は、岡村の友人篠田と道ならぬ戀に落ち、嫉妬深い岡村のために發見されて、悔恨のあまり自殺したものであるらしかつた。

岡村の嫉妬深いことは、殆んど病的といつてよい程であつた。若し細君が自殺しなかつたならば、彼は自分の手で細君を殺しかねないくらいであつた。そのむかし戀女房であつただけ、不義を發見した時の彼の怒りは強かつた。彼は細君を憎むと同時に、不義の相手たる篠田を、はかり

しれぬ深さをもつて憎んだ。彼はその不愉快な発見の後、古風な言葉ではあるが、二人を重ねて置いて四つにしたいと希ひ、その機会を覗つて居たけれども、遂に細君に死なれてから、それを永久に失つてしまつた譯である。

その夜細君は寢室の梁の釘に岡村の兵兒帯をかけて縊死して居た。それはちやうど岡村の不在中のことであつて、岡村が歸つて来て見ると、この有様なのに大に驚き、手を觸れて見ると、もはや冷たくなつて居たので、醫師を招く前に警察に届け出たのであつた。

尤も、このことは岡村が検屍官に語つたところであつて、誰も他に目撃したといふものはなかつたから、果して岡村の言葉が眞實か否かはわからぬけれど、検屍の結果、別に怪しむべき點もなかつたので、細君の死は自殺と決定されたのである。

ところが、岡村は細君の變死に逢つてから一種の脅迫觀念に襲はれはじめた。多分それは悲歎のせみだつたかも知れぬ。細君の葬式を済ますなり一室に閉ぢこもつて、頻に、ある一事について考へこむのであつた。

その一事といふのは外でもない。彼の細君の、いはゞ間接の死因となつた篠田を殺してしまはうといふ恐ろしい計畫であつた。彼が何故にそのやうなことを企てたかは、もとより知る由もなかつたが、恐らく、二人を共に殺してしまひたいといふ豫ての欲望を満たさんがためであるらしかつた。實は、細君の自殺した晩、彼が家をあげたのも、篠田を誘きよせるためであつて、たし

かに彼の想像したごとく、篠田は彼の家を訪れたらしかつたが、彼がひそかに歸宅して見ると、意外にも篠田は居らずに細君が自殺して居たので、すつかり計畫が狂つた譯である。従つて、彼が新たに篠田を殺す計畫を立てたのは、當然のことといふべきであつた。

## 二一

彼篠田のやうな卑しむべき人間を殺して、自分もそれがために命を失ふといふことは堪へられないと思つた。で、彼は、何とかして、痕跡を残さぬやうに、換言すれば自分が殺したといふことが探偵たちにわからぬやうに、篠田を殺したいと願ふのであつた。従つて、彼の殺人計畫は容易ならぬ苦心と考慮とを必要とした。

そればかりでなく、彼の殺さうとして居る篠田は、實に狡猾極まる男であつた。實際、その悪智の發達した點に於ては、彼は到庭篠田の敵ではなかつた。彼の細君も、要するに篠田の巧言と奸智のために不倫の汚名を残すに至つたといつてよかつた。だから、岡村が篠田を殺す計畫を立て、だん／＼焦燥を増して行つたのも無理はなかつた。

彼は、先づ如何なる手段をもつて篠田を殺さうかと考へた。細君のやうな繊弱な人間ならば、絞殺して置いて、縊死したやうに見せかけるといつたやうな手段を講じ得ないとも限らぬが、篠田は彼よりも臂力がすぐれて居たので、絞殺は到底不可能のことと思はれた。

そこで次に彼は毒殺はどうであらうかと考へて見た。然し、毒殺をするには、當然篠田に馴れ馴れしく近づいて、共に食事でもとり、ひそかに食物の中へ毒を投じなければならぬが、かうした關係になつた以上、篠田に決して打ち解ける筈がなく、又たとひ首尾よく毒殺を遂げても、死骸が解剖されて死因がわかれば、直ちに嫌疑を受けねばならぬから、毒殺は彼の計畫には不相應なものであつた。

して見ると、もう残つて居る普通的手段といへばピストルか短刀かである。ピストルはその音によつて發覺し易いから、どうやら短刀による刺殺が一ばん適當して居るやうに思はれた。即ち篠田が夜分外出するを待ち、人の居ないところで突然躍りかゝつて、その心臓部を刺し、そのまゝその場から逃げてしまへば、一ばん簡單で、一ばん効果の多い方法であらうと思はれた。

かう考へると岡村は、はじめ、先日來の焦燥の念が静まつた。そこで彼は、かねて秘藏して居た白鞘の短刀を懐にしのばせ、毎夜篠田の家の附近に出かけて篠田の外出するのを待ち受けた。

## 三

ところが、悪賢い篠田は、早くも、岡村が自分を殺す計畫を立て、居ることを感知したのか、夜分は家に引こんで、ちつとも外出しなかつた。時として、岡村は寒い冬の夜を、マントに身を

くるんで、手足が凍えるほどであるのをかまはず、遅くまで見張つて居ることもあつた。かつては夜の外出の上もなく好んだ篠田が、ふつとりと外出しなくなつたのは、どうしても、殺されるのを恐れて居るとしか思はれなかつた。

岡村は又もやだんぐいらくして來た。彼は遂に篠田を殺さなくては、自分が死なねばならぬと思ふほどの苦しさを覺えるに至つた。篠田が生きて居る間は、自分は決して安らかな日を送り得ないと思つた。けれども、篠田は、いくら待つても夜分外出しなかつた。恐らく、そのうちには、篠田も堪へられなくなつて外出するにちがひなからう。篠田が夜のカフェエを好む程度は猫が鼠を好む程度よりも甚だしかつたから、今暫らく辛抱強く待つたならば屹度機會が得られるであらう。とは思つて見ても、岡村のもどかしさは日に／＼まさつて行くのであつた。

いつそ、彼は篠田の家をたづねて、直接篠田に逢はうかとも思つたけれど、それでは罪の發覺を蔽ふ術もないし、又、よく考へて見れば、篠田がすなほに自分に逢つてくれさうにもなかつた。

「どうしたらよからう。どうしたら篠田を殺すことが出来る。」

この問題は、今や、岡村の覺醒時間中、否、時としては睡眠中にまで、彼の腦細胞を刺戟して、彼の心を刻一刻と憂鬱ならしめた。さうして彼は殆んど機械的に、毎夜重たい足を引摺つて、篠田の家を見張るのであつた。

ところが、彼のこの熱心は遂に酬ひられた。ある夜、篠田は遂に外出したのである。が、篠田の家を出たのは、篠田一人ではなかつた。即ち、彼が物蔭に佇んで様子を覗つて居ると、篠田は一人の友人らしい男と一しよに彼の家を出たのである。

彼は覺られぬやうに、出来るだけ二人に接近したが、篠田と連れ立って居る男の顔を見るに及んで、彼は驚きのあまり、危ふく叫び聲を發するところであつた。といふのは、その男は篠田と仇敵の間柄なる浅川であつたからである。

浅川が篠田をにくむ程度は、彼が篠田をにくむ程度の數十倍數百倍であるといつてよかつた。どういふ理由があるのか、それは浅川と篠田のみの知つて居るところであつたが、浅川はいつも篠田を機會があれば殺してやると宣言し、篠田も同じ言葉をもつて浅川に酬ひたほどの仲であつた。その二人がいま打ち連れ立って歩くといふことは、何か重大な理由があるにちがひないと岡村は思つた。

けれども、よく觀察してみると、二人はいかにもなれ／＼しく語り合つて、恰も年來の親友でもあるかのやうに、人通りの多い街をゆるやかな歩調で進んで行つた。

この新しい謎に出逢つて、岡村は、一時自分の使命を忘れ、二人が、どういふ理由で、再びあんなに親しくなつたかを考へて見た。けれども、それは容易に解ける謎ではなかつた。

やがて二人は篠田の行きつけのカフェーにはいつた。岡村はさすがにはいりかねてガラス窓

越しにぬすみ見ながら、彼等の出て来るのを待つて居たが、程なく出て来た二人は、一旦やはり相連れ立って篠田の家にかへり、浅川は入口で篠田と別れて歸つて行つた。

「はてな。」

と、岡村は考へた。

「ことによつたら、狡猾な篠田は、甘言をもつて浅川を釣り寄せ、ひそかにわが身を保護させて居るのではあるまいか。」

この考は果して間違つて居ないらしかつた。といふのは、その後、篠田が外出するときは、必ず浅川が一しよに連れ立つことになつたからである。

## 四

一人でさへ殺しにくいのに、まして二人居るところを殺すことはとても成功しやうにない。

かう思つて岡村は殆んど絶望に近い焦燥を感じた。けれども、篠田を殺さうといふ脅迫觀念は、反對にますます膨脹して行つた。

「やうだ。自分は篠田を殺して自分だけが生き残らうとしたからいけないのだ。篠田を殺して自分も死ねば、何もそんなにいら／＼する必要はないではないか。」

かう決心すると、彼の心の不安は拭ふやうに除き去られた。それと同時に、短刀をもつて篠田

を殺すよりもピストルをもつて殺す方が容易であると思つた。といふのは短刀ならば、篠田のそばへ寄りねばならず、傍へ寄れば浅川に邪魔される憂があるけれど、ピストルならばさうした憂がなく、安全に殺すことが出来るからである。

その代り、ピストルを使用するには熟練を要する。けれども一心になつて練習すれば、譯なく上達し得る筈である。

そこで岡村はピストルを買つた。それはブローニングと稱する便利な自動連發式であつた。彼はこのブローニングをもつて、射撃の練習を始めたが、熱心といふものは恐ろしいもので、僅かに三日の練習で、彼は二間の距離にある、直徑一寸の的を、百發百中射抜くことが出来た。

岡村がピストルを懐に入れて喜び勇み乍ら篠田の家を見張りに行くと、運命といふものは不思議なもので、丁度その夜篠田は例の如く浅川と共に外出するところであつた。

「今夜こそは、彼を殺すことが出来るのだ。」かう思ふと、彼の心臓は高鳴りを覺えた。が、次の瞬間、

「自分も死ぬのだ。」

と考へたとき、突然、暗い氣持が心の隅に起つた。

「いけない、いけない。」と、彼は強ひて力づけた。

「どうせ自分は生きる甲斐のない身體ではないか、篠田を殺して自分も死ぬれば、それで本望で

はないか。」

われとわが身を鼓舞しながら、二人の跡からついて行くと、二人はやはり、いつものカフェーにはいつた。その夜は殊更に寒い風が吹いて、あまり外出する人もなかつた。めか、カフェーの中には篠田と浅川の外に客が居なかつた。

岡村は暫らく立ちどまつてガラス窓越しに様子を覗つて居ると、二人は一ばん奥のテーブルに對座して、女給にコーヒーを命じた。それから女給がコーヒーを持つて行くまでの間、岡村の心は異様に緊張した。やがて演ぜらるべき慘劇の光景を胸に描いて、一種の嘔氣をさへ催すに至つた。

「しつかりしなければいけない。」

決然としてカフェーの中にはいつた岡村は、篠田を目がけて、まつ直ぐにテーブルの間を進みながら、右手にブローニングを差し上げてつか／＼と近寄つた。

と、その時である。篠田は、岡村を見てつと立ち上つたが、同時に嚴肅な顔をして浅川を指し言つてた。

「岡村君、君は僕を殺しに来たのだらう。然し君、君が奥さんを絞殺するのを見たのは、僕でなくて、この浅川君だよ!!」

これを聞いた刹那、はつと理性を失つた岡村、は篠田に向けて居た銃口を浅川に向けるなり、

思はずも引金を引いた。

轟然たる響と共に浅川が悲鳴をあげてたふれると、はじめ岡村は我に返つたが、その時、すでに篠田の姿は見えなくなつて居た。さうして、狡猾な篠田の言葉に、一石二鳥の恐ろしい奸計が含まれて居たといふことを、本當に了解し得ない前に、彼は銃口を自分の胸に向けて再び引金をひいた。

### 眠り薬

—

これは私の懺悔話であります。いはば思ひ出しても、ぞつとする話でして、今少しのことで私は人殺しをしてしまふところでした。若氣の至りとも申しますか、とかく若いときは一本調子に馬車馬式に物事に突き進みやすいものですから、思はぬ災難に出逢ふことがあります。これくらゐの道理は少し反省すればわかることですが、何といひますか、若いときは危険と知りながらも、その危険にわざと近寄りたいやうな心を持つて居るのですから仕方ありません。私が横尾照子嬢と知りあつたのは全く偶然の機會でした。たしか四月下旬、荒川の櫻が散つて日比谷に躑躅が咲かけた頃です。私は友人たちと麴町の藤園男爵邸の夜會に招かれましたが、晚餐後のダンスの席上で、ふと私は二十歳ばかりの世にも美しい女の姿に引きつけられました。「あの、今右から二組目に踊つて居る、眼のまはりの黒いバンプ型の洋装の女は誰だい。」と、

私は私の隣の椅子に腰かけて居た友人に向つてたづねました。

「あれか、あれは横尾仙右衛門氏の令嬢照子さんだよ。」と友人は答へました。

横尾仙右衛門氏といへば、鐵道工夫から出世して巨萬の富を積んだ實業家です。

「あれが問題の女か。たしか新聞で讀んだと思ふが、最近横尾氏がどこからか養女として貰ひ受けたといふことぢやないか。」と、私は何にも知らずに、華族の若様らしい男としきりに踊つて居る彼女の後姿を、好奇の眼をもつて見ながらたづねました。

「さうよ。人の噂によると、養女だか細君だかわからないといふことだ。何しろ仙右衛門氏は六十を越して居るのだから、細君だといつて披露するのも恥かしからうからねえ。」

「今晚は一人で来たのだらうか？」

「いや晩餐の席には仙右衛門氏も居たよ。仙右衛門氏はさすがに、あの年だから、ダンス場へは来て居ないよ。それに素性が素性で、ダンスなどはまさか稽古したことがあるまいからねえ」

「は、は、は、さうかも知れぬ」

間もなく、私も友人も、それぞれ相手を得てダンスを始めました。私はその前年某大學の經濟科を出て、その時某會社につとめて居りましたが、ダンスをはじめてからまだ半年にしかならず、決して仙右衛門氏を笑ふことが出来ませぬでした。それに先刻から漆黒の髪をもつた横尾嬢の妖艶な姿が眼底にへばり附いて、ともすれば、しどろもどろの足なみとなり、恥しさもまじつ

て汗をびつしよりかきました。

いつもならば、甘い氣分に酔ふことの出来るミュージックが、その夜に限つて何となく胸を壓迫するやうな、重くるしい感じを起しましたから、私はただ一人庭に出て柔かい芝生の上をあるきまはりました。十日あまりの月が晴れ渡つた空にかゝつて、遅櫻が、はらくと散りかゝりました。

冷たい晩春の夜の空氣を吸ふとさすがに心が澄んで来て、木立から洩れてくるシャンドリエの光りや、高調に達したワルツの音が、一種言ふに言へぬ、あこがれの情をそゝりました。それまでに私はどんな美しい女を見ても、別に心を動かされなかつたのですが、横尾嬢を見た瞬間から、妙な心持ちになつたのです。いはゞそれが運命といふものなのでせう。或は又戀といふものかも知れません。先方はちつとも知らないのに、自分だけがこんな思ひに悩まされるのはたしかに馬鹿らしいことだ。と、考へても、どうにも致し方ありませんでした。

私は芝生の上を北極熊のやうにあらゆる歩きまはりました。廣い庭園の中には誰一人居りませんでしたが。燈籠や土橋や松の樹などが、艶を消した青色のぼかし寫眞を見るやうに黙々とし

て行く春の氣分を形づくつて居りました。

やがて私は歩き疲れて大きな櫻の樹の下に設けられたベンチに腰をかけました。さうして中天の月をあふぎました。すると、お月様までが、彼女の眼を聯想させる機縁となりました。

私はほつと深いためいきをもらしました。と、その時、うしろの芝生に軽い足音がしましたので驚いてふりかへつて見ると、一人の女がベンチの後に立つて居ました。見るとそれは、外ならぬ横尾照子嬢だつたのです。

## 二

私ははつと思つて立ち上りました。立ち上つたといふよりも飛び上がったといつた方が適當であるかも知れません。

今が今まで心の中にちらついて居たその女が私の目の前に立つて居るのですもの、私は夢ではないかと怪しましました。

月光にくつきり照し出されたその妖艶な顔は、まったく地上のものとは思はれぬ位でした。私はその時、猫の前の鼠といったやうな恥しいうちに、一種の恐怖をさへ感じて、暫らくの間、物をいふことが出来ませんでした。

然し、その次の瞬間、私の心は幾分か冷静になりました。横尾照子嬢は一たい何をしにこゝへ来たのであらうか。彼女もまた、ダンス場の蒸すやうな空気に厭いて、冷たい春の夜風にあたりに来たのだらうか。

私は軽く會釋して、彼女に席を譲らうとしますと、

「伊吹さん、御疲れになつたのではありませんの？」と、彼女は、やさしい聲で言ひました。

私は彼女に名前を呼ばれて、ぎよつとするほど驚きました。彼女は一たい、どうして自分の名を知つて居るのであらうか。私が彼女を見たのは今夜がはじめてである、彼女も恐らく私を今夜はじめて見たのにちがひないであらう。それなのに？

私は何と答へてよいかに迷ひました。と、彼女は、蔽ひかぶせるやうに言ひました。

「お名前を存して居るのを驚きになつて？先刻わたしがダンスをして居たとき、あなたが友達と私の噂をしておいでになることをちやんと知つて居ましたのよ。それで今あなたに一しよにダンスをして頂かうと思つて、随分さがしましたが、お見えにならないから、多分、庭園にでも出ておいでになると思つて出て來ましたわ。ねえ、一しよにダンスをして下さらない。」

「はあ、ありがたう御座います。」

と、われながら、何と答へたかわからぬほど、どきまぎして言ひました。

「まあ、あなたは本當にうぶでいらつしやいますのねえ。」

かう言つて彼女は、いきなり私の手を取つて、一しよにベンチに腰をおろさうとしました。私はすつかり上氣してしまつて、彼女の命ずるがまゝにするより他ありませんでした。

「随分あつかましい女だと思ひになるのでせう。おゆるしなすつてねえ。」

彼の女は私の顔をのぞきこむやうにして言ひました。彼の女の身體からにぢみ出るのかと思は



れる香水のほひが、すっかり私を酔はせてしまひました。

「どうしまして、僕は……」

「ゆるしてやると仰しやいますの？ では、これから交際していただけますか？」

「それは、僕よりお願いしたいところでした。」

「まあ、うれしいこと。」

かう言つて彼女は顔をあげて月をながめました。そばで見る彼女の顔は一そう美しく輝きました。

今から考へて見れば、初対面の男に、かうした馴れ／＼しい態度を示す女には、十ぶん警戒すべきでありますのに、その時には、それがちつとも不自然とも何とも思はれなかつたのです。それはいふまでもなく、その時の私の心に、「戀」といふ弱點があつたからです。

「さつき、ダンス場で、あなたのお姿を見てから、わたし、何といひますか、うはの空でしたわ。」と彼女は幾分かはづかし氣に顔をふせて言ひました。

私はこの言葉をきいて、嬉しさのあまり、自分の心臓の鼓動を耳にしました。

「僕こそ、僕こそ、さうでした。」と、私は顔を赤らせて言ひました。「かうして庭園へ出たのも、それがために、苦しくなつたからです。」

「伊吹さん、それは本當ですか、本當ですか。」と、彼女は顔を私の顔に押しつけんばかりにし

て、のぞきこみながらたづねました。

私がかうなづくくと、彼女は、急に手にして居た手巾を眼にあてました。私はその異様な彼女の動作を見てどうしたのかと呆氣にとられて居りますと、やがて彼女の肩が小刻に揺れて、はげしい呼吸の聲がきこえました。

いふまでもなく彼女はすゝり泣きを始めたのです。

### 三

横尾照子嬢の突然のすゝり泣きを見て、私は少からず狼狽しました。いまだ嘗て妙齡の女に泣かれた経験がないので、まつたく、私はどぎまぎしました。

若し、傍に見て居る人があつたら、定めし私のその時の態度に吹き出してしまつたでありませう。

「どうなさつたのです。どうしたのです。」と私は、のぞきこむやうにしてたづねました。

然し彼の女はそれには答へないで、一しきり、啜り泣きました。私はたゞ呆然として、その姿を見つめました。やはらかい春の月光に照された女の啜り泣きを想像して見て下さい。それが如何に可憐な美しさを持つものであるかは、申すまでもないことと思ひます、やがて、彼の女は泣きやみました。さうして甘い香ひのするハンカチーフを噛みながら

「すみませんでした」と小聲に言ひました。

私は、軽く彼の女の肩に手をかけてたづねました。

「びつくりしましたよ。どうなさつたのですか」

「まことに、お耻かしいところを御目にかけたのねえ。あなたのお言葉をきいて急に悲しくなつたのです」

「どうしてとせう。何か僕の言つたことが御氣に障つたのですか」

「いゝえ、さうぢやないのよ。」と彼女は幾分か高い聲を出してきつぱり言ひました。「あなたがやさしく仰しやつて下さるものですから、つい、日頃おさへて居た涙が出てしまつたのです。」

かういつてから彼女は、まだ涙で光つて居る眼をあげて、更に言葉をつゞけました。「伊吹さん、先刻仰しやつて下さつたことは、本當で御座いますか。私のやうなものでも、御氣にかけて下さいますか。」

「本當ですとも。」と、いつて私はおづ／＼彼女の女の手を握りました。

彼の女は強く握りかへして言ひました。「嬉しいですわ。生れてはじめて幸福を感じたやうな気がしますわ、今迄私は誰にも私の胸の中を打あけたことはありませんけれど、あなただけは、きつと私の心に同情して下さるお方だと思ひますわ。ね、きいて下さる？」

「きゝますとも」

「私は、はたから見れば、幸福な生活をして居るやうですけど、その實、毎日々々それはそれは苦しい思ひで暮して居りますのよ。御承知かも知れませんが。」と、いつて、あたりをながめながら聲を低くしました。「私は、先々月、深い事情があつて、横尾の家に養女として貰はれて來ました。世間の口はうるさいもので、養父があゝして獨身だものですから、私が妾代りにも住みこんだやうにいふさうですが、決してさういふ汚らはしい關係ではありませんの、けれど……」

かう言つて彼女は、深いためいきをつき、暫く芝生の上に眼をおとし、更に語りつゞけました。

「けれど、養父といふのが、それはわからず屋なのです。卑しい身分から出て、自分一代にあつた地位までたゞき上げた人だけに、その半面には恐ろしく冷酷なところがありますのよ。ですから、私は、毎日、それは／＼冷たい人情のうちに暮さねばなりません。第一、養父は私をちつとも自由に外出させてくれません。どこへ出るにも、いはゞ養父の監視つきなのです、ことに養父は、私が、社交場へ出入することを好みませんの。今晚も、藤園男爵の御すゝめでしたから嘗て養父は男爵に色々御恩をいたゞいて居りますので、いはゞ御義理に、澁々出て來ましたやうな譯ですのよ。かうして、あなたと二人で話をして居るところを養父が見ようものならうちへ

かへつてから、どんなに私を虐待するか知れませんか」  
 かう言つて彼女は、悲しさに月をあふぎました。白い顔にただよふ悲哀の影は一層チャイミ  
 ングでありました。私は彼女の心を何といつて慰めてよいかに迷ひました。  
 すると、その時背後に人の近づく足音がきこえましたので、私たち二人は、はじかれたやうに  
 立ち上りました。

「照子！何をして居るのだ」

がさがさした聲を出して、威嚇するやうに近づいたのは、他ならぬ彼女の養父横尾仙右衛門氏  
 でありました。

## 四

私は仙右衛門氏の姿を見て、穴があつたらはいりたいやうな気がしました。たゞもう呆然とし  
 て、化石したやうに、そこに立つ立ちました。が、それと同時に、照子嬢に對する同情の念が、  
 むらむらと起つて來ました。

つい今しがた、彼女は、「あなたと二人で話をして居るところを養父が見ようものなら、うち  
 へかへつてから、どんなに私を虐待するかも知れませんか。」と言ひましたのに、その言葉が消  
 えるか消えぬうちに、彼女は、彼女の豫感した、おそろしい運命に直面したのではありません

か。

仙右衛門氏はつかくつかくと彼女のそばにあゆみ寄りました。

「あれほど言つてきかせてあるのに、お前は性懲りもなく、また人目をしのいで、男とあひま  
 きをして居るのか」

かういつて、仙右衛門氏は彼女の左の腕をむづとつかんで、無理に引ッ張り去らうとしまし  
 た。私は思はずそばに駈よつて、

「もし」と、聲をかけ、辯解の言葉を述べようと思ひました。

が、仙右衛門氏は振向かうともしませぬでした。その時、彼女は、引ッ張られながら、右の腕  
 を後にのばして、私の手をぎゅつと握り「何も云ふな」と合圖をしました。

私は芝生の上にならずに二人の歩いて行くのを、ぢつと見送りました。さうして二人の  
 姿が洋館の中へかくれた後も、根が生へたやうに動きませんでした。

折角のよい機会を、無事に引ッ奪られた私は、いはゞ絶望の淵につき落されたやうなもの  
 でした。恐らく私は再び彼女に逢ふことは出來ないであらう。彼女は今夜きつとはげしく折檻さ  
 れて、今後は一層嚴重に、あの冷酷な、養父から監視されることであらう。

かう思ふと、私の心の中には彼女に對する同情と戀とが、急速にふくらみました。私は遺瀨な  
 い氣持ちになつて、仙右衛門氏にくらしさに憤慨し、思はずも兩の拳をにぎりましたが、その

時、ふと私は、左の掌に、何かを握つて居ることに気がつきました。

私は變な思ひをして、掌をひろげて、眼にちかづけました。見るとそれは緻くちやになつた紙片から發する香氣は、照子嬢の手巾にしみこんで居たそれと同じものでした。

私ははつと思ひました。さうして、それは先刻、彼女が私の手を握る際に、私に握らせて行つたのを、今まで気がつかずに居たのだとわかりました。

胸を躍らせながら、私は、その紙片をひらいて見ました。それは西洋紙の一片でありましたが、その上には、何か鉛筆で走り書きがしてあるやうでした。私は月の光で、それを讀まうとしました。色が薄くてはつきりわかりませぬでした。

思はず私は走り出して、洋館の中にはいり、廊下の電燈の光で、その文字を讀みました。あすの晩十二時に三番町十五番地の裏門へ来て下さい。お讀みになつたら、必ず破つてすて下さい。

三番町十五番地はいふ迄もなく横尾邸であります。名前こそ書いてはありませんが、それが照子嬢の短簡であることは疑ふべくもありません。彼女は、あらかじめ、私に渡さうと思つて置いて置いたのがひありません。

地獄の底で佛に逢つたとはこんな氣持をいふのかと思ふほど、私は幸福を感じました。私はもう、ダンス場へ行くことも、友だちと話すこともいやになりました。この幸福感を他人に傷つけ

られるのが惜かつたからです。で、私はその紙片を破つて捨て大急ぎに身支度をして家に歸つて來ました。

あくる日、私が、どんなに夜になるのを待ちかねたかは、こゝに書くまでもないことと思ひます。

待ちかねた夜はたうとう來ました。私は十時頃家を出て、途中諸方をぶらつきながら三番町に來たのは十一時半頃でした。もうその頃は、十三番地の裏門のある街はぼつたり人通りが絶えて、たゞ中天の月のみが我もの顔に下界を照して居りました。私はびたりと堀に身を寄せて内側に向つて耳を敬てました。

## 五

私は堀に身を寄せてたゞずみながら、言ふに言へぬ不安を感じました。何かから恐ろしい罪惡を犯して居るやうな氣がして、全身の感覚が腫物の出來たときのやうに鋭敏になりました。

幸に人通りがなかつたからよいものゝ、若し誰かゞ近づいたらどうしてよいかとあせりました。ことにそれが警官でもあつたなら……：かう思ふと、じつとして居れぬほどのもどかしさを覺えました。私はこれまで、よく小説で、しのび逢ひの場面を讀んで、當事者の心持ちは如何に喜ばしいものであらうかと、一種の羨望をいただきましたが、どうして、喜ばしいどころ

か、苦しさと恐ろしさで、胸が一ぱいになることを知りました。

この苦しき、この恐ろしさの中に、更に私をして不安ならしめたものは、横尾照子嬢が果して、約束どほり此時間に、私に逢ひに来てくれるかどうかといふ疑問でした。たとひ照子嬢が来る氣でも、仙右衛門氏が嚴重に見張りをして居る場合には、しのび出ることが出来ない、若し今夜逢ふことが出来なかつたら、再び逢ふことの出来る日、いつだかわからない。と思ふと、何となく絶望的な氣持にさへなるのでありました。

多分それは三十分足らずの時間であつたでせう。私には幾時間かと思はれるほどでありました。がふと私は、風に吹かれる木の葉の音のほかに、塀の内側に軽い登音のやうなものを聞ききました。私ははッとしました。

それと同時に、裏門の門をはずす音がして、門の扉が細目にあきました。さうして、照子嬢の月に照された白い顔が無言で私をさしまねきました。

私は磁石に吸ひつけられる鐵片のやうに、彼女の方に行きました。これから、私が何をしたかはつきり覚えて居りませぬが、幾秒の後、私は裏門の内側で照子嬢にかたく抱擁されて居りました。

私は照子嬢の衣服から發する香氣に酔ひながら、世界中で一ばん幸福なものは自分だと思ひました。

「伊吹さん。あなたは嘸大膽な女だと思ひになるでせう。けれど、今まで、抑えに抑えつけて居た感情が、あなたのために一時に爆發したのですもの。怒らないで下さい、ね、ね」  
何が怒るものですか、と、心では呼びながら、私はそれを口に出すことが出来ませぬでした。私はたゞうなづくばかりでした。

やがて照子嬢は、彈かれたやうに身を離しました。

「いけませんわ。私こんなことをして居れませんわ。今、養父の寢息をうかゞつて、そつと抜けて来たのよ。養父は眼ざといから、早く歸らなければ、又叱られますわ。ね、明日の晩十二時に来て下さらない？ うれしいわ、では歸つて下さい。」

私を押し出すやうにして、照子嬢は裏門をしめてしまひました。

私は何だかぼかんとしてしまひました。照子嬢に逢つたら、ゆうべ仙右衛門氏が彼女にどんなことを言つたか、それを聞かうと思つたのですが、そのひまもなく私は門外に追ひ出されてしまひました。

あくる晩、私が前夜よりも一層の緊張をもつて、横尾邸の裏門にしのび寄つたことは言ふまでもありません。さうして、照子嬢が一層の親密をもつて、私をあしらつたことも、これまた讀者諸君の想像されるとほりです。

「女中たちも、みんな養父の味方ですから、ほんとに、困りますわ、どうしたら、ゆつくり、

あなたに御目にかゝれるかしら。」

照子嬢はしみじみ言ひました。

三度、四度、五度、かうしたしのび逢ひが續きました。

逢ふ度毎に私の戀心は加速度をもつて募つて行きました。

「何故二人はゆつくり逢へないでせうか。」

六日目の夜、私は、うらむやうに照子嬢に言ひました。

「本當に、私も悲しいですわ。」と照子嬢は打しほれて言ひました。「それについて私は色々考

へましたが、ちやうどいゝことを思ひつきましたのよ。あなたさへ、斷行して下さる勇氣がある

なら……。」

「何でも僕の出来ることならやります。」

「さうね。……ではお話しませうか。」

私は照子嬢が何を言ひ出すのかと固唾をのんで待ちかまへました。

## 六

照子嬢は小聲で言ひました。

「あなたとゆつくりお逢ひするには、どうしても養父を眠らせなければなりません。然し養父

は眼ざとい性質ですから、眠り薬を用ひるのではありません、私たちの目的を達することが

出来ません。あなたが本當に私を愛して下さつて、私にゆつくり逢ひたいとお思ひになるなら、

養父に眠り薬をのませて下さい。こゝにわたし、その眠り薬を用意して來たのよ」

かう言つて彼女は袂から小さなガラス壺を取り出して、私の手に握らせました。

私はそれを握つた瞬間何となくぎよつとしました。さうして、不審に思つて言ひました。

「眠り薬ならば、あなたがお父さんにおのませになつたらよいではありませんか」

「私で出来ることなら、何もあなたには御願ひ致しません」と、彼女は少しくつんとした口調

で言ひました。「養父はどうやら私が密會して居ることを感附いたらしいのです。だから、こゝ

二三日私の舉動を警戒して私を容易に近づけないのです」

「けれど、僕はなほ更御父さんに近づき難いではありませんか」

「いゝえ、あなたに、家へ來て養父に眠り薬をのませてくれといふのではありませんわ。養父

は明後日の晩また、藤園男爵邸の夜會によばれて居りますが、多分あなたにも招待状がまるつて

居りませう」

「えゝ來て居ます。」

「だからその晩餐會のときに、養父の酒盃の中へ、そつと、その眠り薬を一滴たらしこんで下

さればよいのよ。明後日は養父はどうしても出席しなければならぬ理由があります。けれど、わ

たしは、頭が痛いといつてうちに居残りますわ。先方で養父が眠つてしまへば尙更結構ですが、うちへ歸つてからでもいゝですわ。さうすればあなたとゆつくり逢へるではないの？ね、是非さうして下さいよ。」

この時、庭の一隅から、

「照子！照子！」と呼ぶ太い聲が聞えました。

「あゝ、どうしよう。伊吹さん、養父が來ましたわよ。早くその躑躅の蔭にかくれて下さい。」かう小声で言ひ置いて彼女はむかふへ走つて行きました。さうして、暫らくの後、

「わたし、頭が痛んだので、戸外の空気を吸ひに出たのよ。」と、辯解して居る疝高い聲が、はつきりと私の耳に入りました。

それに對して、仙右衛門氏が何やら言ふ聲が聞えましたけれども、太い聲なのではつきりわかりませんでした。

私は照子嬢から渡された眠り薬の壺をにぎつたまゝ、いまに照子嬢が、仙右衛門氏をなだめて、私のところにかへつて來るだらうと、心待ちにして居りましたところが、いつまで経つても歸つて來ません。私は何となく不安になつて、そのまゝ家へ歸ることが出來ず、出來るならば屋内の様子をうかがつて、照子嬢が恐ろしい責苦に逢つて居はしないかどうかをたしかめて置きたいと思ひました。

そこで私は、躑躅の蔭を出て、用心の爲めに、裏門の門をかけ庭内ふかくしのび入りしました。大小の植木が可なりに密生して居ましたから、臆病な私にとつては至極好都合でありました。

やがて、私が洋館の隣にある日本室の雨戸に近よりますと、驚いたことに、中で、男女の爭ふ聲がきこえました。

いふ迄もなく、それは仙右衛門氏と照子嬢でした。

私ははッとしました。たしかに照子嬢は仙右衛門氏に叱責されて居るにちがひありません。

私は雨戸に耳をつけて、二人の聲をきゝ取らうとしましたが、どうもよくわかりませんでした。

そのうちに、私は仙右衛門氏のある言葉をきいて、ぎくりとしました。

「……、お前はわしを殺すつもりだらう……」

この言葉だけがはつきり私の耳に聞えたのです。それは、或は私の聞きちがひだつたかも知れませんが、とにかく私はその時、思はずも、手に持つて居た眠り薬の壺に眼をそゝいたのであります。

私は何となく恐ろしくなつて、もはや立聞きして居る氣になれませぬでした。私は追ひ出されるやうに植込の中を裏門まで走つて、それから門をばづし門の扉を開いて街へ出ました。横尾家の不用心を思はぬではありませぬでしたが、先刻きいた横尾仙右衛門氏の言葉が私の頭を占領して、他を顧る違がありませんでした。

「……お前はわたしを殺すつもりだらう……」

仙右衛門氏が照子嬢に向つて發したこの言葉はどう考へても冗談であるとは思へなかつたのです。それかといつて照子嬢が、そんな恐ろしいことをたくまうとはどうしても考へられませぬ。たとひどんな深い事情があらうとも、あの美しい照子嬢が……

私は突然街の上に立ちどまつて、手を握つて居た眠り薬の壺を見つめました。その時月は傾いて居ましたが、ガラスの反射光は鋭い刃のやうに私の神経に觸れました。

若しやこの眠り薬が恐ろしい毒薬でありはしないか……

かう思ふと私は、その壺が私の嫌ひな雨蛙にでも化けたやうな氣がして、思はず投げ捨てようといふ衝動にかられましたが、待てよ、さういふことを想像するだけでも戀人に對する罪惡ではないかと思ひかへして、そのまゝ家にかへつたのであります。

然し、私は床へはいつてからも長い間眠ることが出来ませんでした、照子嬢は明後日の藤園男爵邸の晩餐會の席上で、私が仙右衛門氏の酒盃に眠り薬を投ずることを信じて、私との逢瀬を心

待に待つて居るにちがひない。かう思ふと、是非それを決行しなければならぬがそれかといつてやはり、このまゝ何の検査もしないで眠り薬を投ずることは不安な氣がしてなりませんでした。

どうしたらよいであらうと考へて居るうち、ふと私は近頃私立探偵を開業して、化學に造詣の深い雪野恒夫氏のことを思ひ起しました、さうだ、雪野氏に逢つて、この眠り薬を分析してもらへば、安心して仙右衛門の酒盃に投ずることが出来るし、又照子嬢とゆつくり一夜を語りあかすことも出来る。明日は早速雪野探偵を訪問しよう。かう決心したとき、私は漸く眠りに就くことが出来ました。

あくる日の午前、私は眠り薬の壺を携へて、雪野氏をたづねました。雪野氏はまだ四十にならぬ年輩の人ですが、變装にかけては實に巧みなもので、時には八十歳の老人にもなつて、それで少しも他人に發見されぬといふほどの評判が立つて居ります。私は氏のにこく顔に迎へられて、應接室に通されるなり、すぐさま眠り薬を出して、その分析をたのみました。

雪野氏は黙つて壺を取り上げて暫らく見つめて居りましたが、やがて顔をあげて、その鋭い眼で私の顔をみつめました。

私は思はず顔をそむけました。

「伊吹さん」と、雪野氏はりんとした聲で言ひました。

「どうか委しい事情を御話し下さい。さもなければ、これを分析し一あげることは出来ませ



ん

私は、雪野氏の前では、到底何事もかくしとほすことは出来まいと思つて、横尾照子嬢に出逢つた當初からの事情を逐一語りました。

「よく仰しやつて下さいました。では暫くこゝに御待ち下さい」

かういつて、雪野氏は眠り薬の壺をもつて奥の方へ行きました。應接室に待ちながら、私は早く分析の結果を知りたく思つて、ちつとして居れず、遂に立ち上つて室内を歩きまはりました。

凡そ、一時間も過ぎてから、やつと雪野氏が戻つて来ました。

「如何でした？」

「たゞの眠り薬です。これは最新の最も有効な薬ですから、いかに眼ざとい人でも、一滴で十分眠ることが出来ます。安心して御つかひなさい」と雪野氏はにこ／＼しながら言ひました。

私は肩の重荷を下したやうな氣になりました。それと同時に、照子嬢に對してすまぬ思ひになりましたが、これによつて二人がゆつくり語ることが出来るかと思ふと、晩餐會が待ち遠しくなりました。

## 八

藤園男爵邸の晩餐會の時刻が迫るにつれて、私は少からぬ焦燥に襲はれはじめました、果して、うまく、横尾仙右衛門氏の酒盃の中へ、照子嬢から與へられた眠り薬を投ずることが出来るであらうか。……

が、照子嬢はきつと今晚、私が成功して、私と楽しく語れるものと待ち構へて居るだらう。かう思ふと、私はどうしても、不成功に終りたくはなかつたのです。

午後六時半に私が、その夜の計畫を定めて、藤園男爵邸に行きますと、横尾氏はすでに、廣い應接間の隅に、ほかの人たちと一しよに來て居りました。仙右衛門氏はその時白髯白髮の老紳士と熱心に談笑して居りましたので、私が何氣なくその方に近よつて會釋すると、白髯の紳士は、機嫌よく私に挨拶して傍の椅子をすゝめました。

私はその夜、薄い色眼鏡をかけて居りましたから、仙右衛門氏はどうやら、私だといふことに氣がつかかなかつた様子です。尤も、先夜照子嬢と庭園で語つてゐるのを見つけたときにも、月夜であつたとはいへ、仙右衛門氏は私を認める餘裕などはなかつただらうと思ひましたから、かくは大膽に近よつたのです。

すると仙右衛門氏も、非常に愛想よく私に話かけました。それは全く氣味の悪いくらゐでした。間もなく私たち三人は親密になつてしまひました。

私は案じるよりも生むが安いといふ諺をはじめて體驗しました。家を出るまではどうして仙

右衛門氏に近よるかゞ大問題でありましたが、この問題は容易に解決されてしまひました。ところが、調子のよいときは不思議なもので、愈々晚餐會の席につくときになると、白髯白髮の紳士は、是非椅子を隣合せにするやうに言ひました。私は叫びたくなるほど嬉しく思ひました。この老紳士は、横尾氏の懇意にして居られる村瀬といふ醫者だといふことでしたが、白髮に似ず、若々しい元氣な様子が見えて居りました。

遂に私たちは、横尾氏を中央にして、三人並ました。何といふ幸運でせう。この上はたゞ、ポケットに入れて居る眠り薬を、横尾氏の酒盃に投ずればよい譯ですが、これもこの調子ではきつとうまく成功するにちがひないと思ひました。

然し私は食事中、氣が氣であります。食事の最中に眠られでもしたら、少し事が面倒になるやうな氣がしましたので、なるべく食事の終り頃に事を行はうと決心しました。私のかねの計畫では自分の酒盃の中へ、眠り薬を滴らして、それをひそかに、横尾氏の酒盃とすり替へるつもりだつたのです。

いよく食事も終りに近づきました。私はひそかに酒盃を取つて無事に眠り薬を滴らしました。さうして、横尾氏の方へ押しやり、横尾氏が、村瀬氏と熱心に話して居るひまに、巧にすりかへてしまひました。

その時、私は村瀬氏にギロリと睨まれたやうな氣がしましたので、つと思ひましたが、横尾氏

は別に氣づいて居る様子も見えませんでした。

私は横尾氏が早く酒盃をとりあげてくれよばよいがと思ひましたけれど、どうした譯かさつぱり手にしませんでした。愈々食事がすんでしまつて一二の人が席を立ちかける頃となりました。それを見て私はもう駄目かと思ひました。九仞の功も一簣に缺けるとはこのことかと失望しました。

然う、私の失望は長く續きませんでした。仙右衛門氏は席を立つ拍子に酒盃をとりあげて、ぐつと一息にのみ下したのです。

私も村瀬氏も立ち上りました。

ところが！

仙右衛門氏は、一二歩動くなり、

「うーん」といふ唸り聲を出して、あつといふ間に床の上に俯向けにたふれました。

私はぎよつとしました。あまりのことに私は呆然としました。村瀬氏はかけよつて、仙右衛門氏を抱き起さうとしました。人々は何事が起きたかと、走つて來て取りかこみました。仙右衛門氏ははげしく痙攣を起しました。さうして再びぐつたりとなりました。

「大變です。横尾さんは毒殺されました」

村瀬氏のこの叫びをきくなり私は氣が遠くなるやうに思ひました。

「横尾さんが毒殺された」といふ白髯の醫師村瀬氏の叫びをきいた時は、たゞもう恐ろしさに、頭がふら／＼しましたけれども、次の瞬間、私の理性は、わづかながら私の心の中にかみ上つて來ました。

私立探偵雪野恒夫氏は、たしかに單純な眠り薬だと言つたではないか。雪野氏に鑑定してもらつてから、誰にも摺かへられた覚えはないから、自分が先刻、横尾氏の酒盃の中へ投じたのは、決して人を殺すやうな毒ではない筈だ。が、それとも雪野氏の鑑定が誤つて居たであらうか。

私は合點が行かぬので、村瀬氏のそばにより、

「横尾さんは、本當に毒殺されたのですか。」とたづねました。

村瀬氏は横尾仙右衛門を抱いて居りましたが、悲しさうにうなづきながら、仙右衛門氏の險眼を開いて見て言ひました。

「疑ふ餘地のないほど明瞭なアトロピン中毒です。」

私はアトロピンがどれ程の猛毒であるかを知りませんでした。若しさうとすれば、どうして、化學に造詣の深い雪野探偵が見誤つたであらうか。私はもしや、横尾氏が誰か他の人に毒殺されたのではないかとも思つて見ました。

やがて、横尾氏の身體は別室に運ばれました。村瀬氏は私だけを殘して人々を立ち去らせました。さうして言ひました。

「伊吹さん、あなたは、何の爲めに、横尾さんを毒殺しましたか。」

私はぎよつとしました。暫くの間、發すべき言葉を知りませんでした。どうして、村瀬氏はそれを知つて居るであらうか、それとも單なる想像をもつて言つて居るのであらうか。

「何、何を仰しやるのです。僕は僕はそんなにとちつとも知りません」と、私は聲を顫はせて言ひました。

「御かくしになつても駄目です。晚餐の卓上で、あなたは御自分の酒盃の中へ、ポケットから、何か薬のやうなものを御たらしになりました。さうして横尾さんの酒盃とたくみに摺かへなされたことを私は見て居りました。私はあなたが、何か單なる悪戯をなさるつもりだと思つて黙つて居りましたが、こんな恐ろしい計畫だと知つたなら、横尾さんに忠告するのでしたに、まことに残念なことをしました。」

私のその時の心持は何にたとへてよいかわかりませんでした。私は到底生きてゐる氣がしませんでした。いつそ自分も毒薬をのんで死なうと、咄嗟の間に決心して、ポケットに手を入れると、村瀬氏は早くもそれとさつて、私の手を強く押へて言ひました。

「事情も話さないで、自殺するのは卑怯ではありませんか」

いはれて私はなるほど思ひました。そこでこれまでの事情をすつかり話しました。村瀬氏は私の語り終るを待つて言ひました。

「それならば、あなたには罪はない。むしろ令嬢を責むべきですが、それともあなたが途中で摺りかへたかも知れぬし、又雪野探偵が摺替てあなたに毒を渡したかも知れません。何しろ、死骸を横尾家に運んで、令嬢に逢つて事情を聞きませう。」

「もうとても、恢復は望めませんか。」

「駄目です。アトロピンのやうな猛毒は、手の下しようがありません。」

皆さん、たとひ知らぬこととはいひながら、人を殺したときの感情がどんなに苦しく恐ろしいものかを察して下さい。そのときはまつたく、自分の身體が自分のものではないやうな気がしました。

やがて、私たちは、晩餐會に出席した人々の悲しい顔に送られて自動車に乗つて、横尾家に向ひました。法律上の罪人である私の胸には、もはや、戀も女もありませんでした。が私は照子嬢が、私を待つてゐる姿を想像して暗い氣持ちとなりました。恐らく照子嬢もあの眠り薬が猛毒であることを知らないだらうから、どんなに驚くかと心配に堪へませんでした。

やがて自動車がつくなり令嬢はむかへに出ました。私は思はず彼女のそばに駈よりました。すると照子嬢はさも驚いたといふ風をして身を引きながら云ひました。

「あなたはどなたです？」

「僕です、伊吹です！」

「伊吹？わたしそんな方知りません……」

## 十

「何をいふのです、照子さん僕です、僕がわかりませんか。今夜あなたは僕を待つて居て下さる筈だつたではありませんか」

かう言つて私は照子嬢の手を取らうとしました。

「ま、この人は！」と、照子嬢は私の手を拂つて、怒つた顔で言ひました。「何といふづうん、しい人でせう……」

この時、白髯の醫師村瀬氏が近よりました。

「まあ、村瀬さんではありませんか。」と照子嬢は、村瀬氏にすがるやうに言ひました。

「夜分にたい何の御用で御座いますか。」

「お父さんが、藤園男爵邸の晩餐會の席上で毒殺されなされたのです。」

「え、つ？」と、照子嬢は二三歩後退りして、さもく驚いたといふやうな舉動をして言ひました。

「そ、それは本當ですか。誰が、誰が養父を毒殺しましたか？」

「こゝに居られる伊吹さんです」

「ちがひます」と私は思はず大聲で叫びました。「ね、照子さん、僕はあなたから貰つた眠り薬を約束通り、御父さんのグラスの中へ入れたのです。僕は念のために昨日、雪野探偵をたづねて分析してもらつたら、無害の眠り薬にちがひないといふことだったので、安心して入れたのですさうしたらそれは以外にもアトロピンとか言ふ毒だつたのです」

私が話して居る間に照子嬢の顔色は突然土色に變りました。

「村瀬さん、一たいこの伊吹さんといふ人は何をする人ですか？」と照子嬢は聲を顫はせてたづねました。

「えー？」と村瀬氏はびつくりして言ひました。「それではあなたは全くこの人を御存しないのですか」

私はあまりのことに一種の眩暈を感じ、辯解しようと思つても、言葉が咽喉につかへて出せぬでした。

「知りません。一度も見たことのない人です、時に養父の死骸はどこにありますか。」と、照子嬢は、息をはづませて言ひました。

「今自動車で一しよに來ました。さあ、伊吹さん手傳つて下さい。」

村瀬氏は、かう言つて私の手を引つ張りましたので、私はまるで機械のやうに無意識に動きま

した。程なく、仙右衛門氏の死骸は、應接室に運び入れられ、ソファの上に仰向にねかさ

れた。照子嬢は仙右衛門氏の死骸にとりすがつて泣き悲しみました。

「養父はもう本當に生きかへらないでせうか。」と照子嬢は、暫くの後、涙に濡た顔をあげて村瀬氏にたづねました。

村瀬氏は悲しさに首を横にふりました。

「残念ながらも駄目です。」

「あゝどうせう！」

かう言つて照子嬢は仙右衛門氏の胸に、わが頭をなげかけて言ひました。

「お父さん！あなたは何故死んだのです？誰に殺されたのです？お父さん、お父さん、もう一度、もう一度生きかへつて下さい。ね、もう一度生きかへつて下さい」

その時、皆さん、世にも不思議なことが起つたのです。

「よし、生きかへつてやる！」

といふ言葉が聞えたかと思ふと、仙右衛門氏の死體はむつくりとソファの上に起き上りま

した。

「ひやッ！」といつて照子嬢が、とび上りながら、後にたふれかゝらうとしますと、村瀬氏は、左の手で照子嬢をしかとつかまへました。さうして、あつといふ間に右の手で、白色の鬘と白色の付け髻をとると、それは私立探偵雪野恒夫氏その人の顔でありました。

「照子さん！いや、横尾の奥さん、あなたの計畫は見事に失敗に終わりましたよ。」  
雪野探偵の聲が、凜としてひびき渡りました。

皆さん私はもはや多くを語る必要はないと思ひます。照子嬢は横尾氏がやむを得ぬ事情のもとに貰つた夫人でありました。夫人は横尾氏を毒殺してその財産を奪はうと企て、私の心を擲にして、その毒殺の手先をつとめさせようとなりました。雪野探偵は、私が鑑定を乞ひに行つたとき、直にこれがアトロピンであることを知り、照子嬢の計畫を見抜いて横尾氏に告げ横尾氏の友人なる村瀬醫師に扮装して、みごとに照子嬢の計畫の裏をかいたのです。雪野探偵は、アトロピンを水にかへて私に渡したので、横尾氏は毒をのまずにたゞのんだ風を装つただけなのでした。このことがあつてから、私は決してダンス場へ行かぬことにしました。

## 癡人の復讐

異常な怪奇と戦慄とを求めめるために組織された「殺人倶楽部」の例會で、今夜は主として「殺人方法」が話題となつた。

會員は男子十三人。名は「殺人倶楽部」でも、殺人を實行するのではなくて、殺人に關する自分の經驗(若しあれば)話したり、センセーショナルな殺人事件に關する意見を交換したりするのが、この倶楽部の主なる目的である。

「絶対に處罰されない殺人の最も理想的な方法は何でせうか？」と會員Aが言ふと、

「それは殺さうと思ふ人間に自殺させることだと思ひます」と會員Bは即座に答へた。

「然し、自殺するやうな事情を作ることは非常に困難でせう」とA。

「困難ですけれど、何事に依らず腕次第だと思ひます」とB。

「さうです、さうです」と、その時、中央のテーブルに置かれた古風な洋燈の灯がかすかに揺れたほどの大聲で、隅の方から叫んだものがあるので、會員は一齊にその方をながめた。それは

年に似合はず頭のつるりと禿げた眼科醫で、彼は勢ひ自分の言葉を裏書きするやうな話をしなければならなくなつた。

で、眼科醫は小咳を一つして、コーヒのカップを傾け、ぽつり／＼語り始めた。

私は今から十五年程前、T醫學専門學校の眼科教室に助手を勤めたことがあります。自分で自分のことを言ふのも變ですが、生來、頭腦はそんなに悪いとは思ひませんが、至つて學動が鈍く手先が不器用ですから、小學校時代には「のろま」中學校時代には「愚圖」といふ月並な綽名を貰ひました。然し私は、寧ろ病的といつてよい程復讐心の強い性質でしたから、人が私を「のろま」とか「愚圖」とか言ひますと、必ずそのものに對して復讐することを忘れなかつたのです。復讐と言つても侮辱を受けたその場で拳を振り上げたり、荒い言葉を使つたりするのではなく、その時は黙つて、寧ろにや／＼笑つて置いて、それから一日か二日、時には一週間、或は一ヶ月、いや、どうかすると一年もかゝつて適當なチャンスを見つけ、最も小氣味よい方法で復讐を遂げるのが常でした。これから御話するのもその一例であります。

T醫學専門學校を卒業すると、私はすぐ眼科教室にはひりました。學校を卒業しても、相も變らぬ「のろま」でしたから、性急な主任のS教諭は私の遣り方を見て、他の助手や看護婦の前をも憚からず stumpf, Dum, Paul などと私を罵りました。いづれも「鈍い」とか「馬鹿」と

か「どぢ」とかを意味する獨逸語の形容詞なんです。私は心に復讐を期し乍らも、例のごとく唯々黙々として働きましたので、後にはS教諭は私を叱ることに一種の興味を覺えたらしく、日に／＼猛烈にこれ等の言葉を浴せかけました。然しS教諭は、責任感の極めて強い人で、助手の失敗は自分が責任を持たねばならぬと常に語つて居たほどですから、私を罵り乍らも、一方に於て私を指導することをおろそかにしませんでした。従つて私の腕も相當進歩はしましたが、私の動作は依然として緩慢でしたから、教諭の嘲罵はますます／＼その度を増して行きました。

S教諭の私に對するこの態度は、自然他の助手連中や、看護婦にも傳染して、彼等も私を「癡人」扱ひにしてしまひました。後には入院患者までが私を馬鹿にしました。私は、やはり黙々として、心の中で「今に見ろ」といふ覺悟で暮しましたが、復讐すべき人間があまりに多くなつてしまひには誰を槍玉にあげてよいか迷ふやうになりました。それ故私は、なるべく早くチャンスを見つけて最も激烈な手段で、凡ての敵に對する復讐心を一時に満足せしむるやうな計畫を建てるべく心がけるに至りました。

さうしたところへ、ある日一人の若い女患者が入院しました。彼女は某劇場の女優で、非常にヒステリックな面長の美人でした。半年程前から右の顔面が痛み、時々、悪心嘔吐に悩んだが、最近に至つて右眼の視力が衰へ、ことに二三日前から、右眼が激烈に痛み出して、同時に視力が減退したので外來診察所を訪ねたのでした。そこで「緑内障」の疑ありとして、入院治療

を勧められ私がその受持となつたのであります。

諸君は御承知かも知れませんが、緑内障にかゝつた眼は、外見上は健康な眼と區別することが出来ません。この病は俗に「石そこひ」と申しまして、眼球の内壓の亢進によるのですから、眼球は硬くなりますが、眼底の検査をして、視神経が眼球を貫いて居る乳頭と稱する部分が陥凹して居るのを見なければ、客觀的に診断を下すことが出来ません。然し診断は比較的容易につきますけれど、内壓の亢進する原因はまだ明かにされて居らないのです。日本でも、西洋でも、むかしこの病は「不治」と見做され、天刑病の一種として醫治の範圍外に置かれました。近頃では、初期の緑内障ならば、手術その他の方法で、ある程度まで治療することが出来ますが、重症ならば勿論失明の外はありません。ことに疼痛が甚だしいためにそれを除くには、眼球を剔出すること、即ち俗な言葉でいへば眼球をくり抜いて取ることが最上の方法とされて居ります。なほ又、炎症性の緑内障ですと、片眼に起つた緑内障は交換性眼炎と稱して、間もなく健眼に移りますから、健眼を助けるための應急手段として、患眼の剔出を行ふことになつて居ります。従つて緑内障の手術には、眼球剔出法が、最も屢ば應用されるのであります。

さて、私は、外來診察所から廻されて來た件の女患者に病室を與へ、附添の看護婦を選定して後視力検査を行ひ、次に眼底検査を行ふために彼女を暗室に連れて行きました。暗室は文字通り、四方の壁を眞黒に塗つて蜘蛛の巣ほどの光線を透さぬやうに作られた室ですから、馴れた私

たちがはひつても息づまるやうに感じます。況やヒステリックな女にとつては堪へられぬほどのいら／＼した氣持を起させたゞらうと思ひます。私は瓦斯ランプに火を點じて檢眼鏡を取り出し、患者と差向ひで、その兩眼を検査致しましたところが、例の通り私の検査が至つて手遅いで、彼女は三叉神経痛の發作も加はつたと見え、猛烈に顔をしかめました。私はそれにも拘らざ泰然自若として檢眼して居ましたら、遂に我慢がしきれなくなつたと見えて、「まあ、随分の

ろいですこと」と、かん高い聲で申しました。この一言は甚だしく私の胸にこたへました。そして彼女の傲慢な態度を見て、これまで感じたことのないほど深い復讐の念に燃えました。前にも申しましたとおり、私の復讐は、いつも一定の時日を経て、チャンスを待つて行はれるのでした。その時ばかりは前例を破つて、思はずも傍に置かれてあつた散瞳薬の瓶を取り上げ、患者の兩眼に、二三滴づつ、アトロピンを點したのであります。通常眼底を検査するには、便宜をはかるため散瞳薬によつて瞳孔を散大せしめることになつて居りますが、アトロピンは眼球の内壓を高める性質があるので、これを緑内障にかゝつた眼に點することは絶対に禁じられて居るのであります。然し、その時、一つは眼底が見にくゝていらいらしたのと、今一つには患者の言葉がひどく胸にこたへたので、私は敢てその禁を犯しました。アトロピン點眼の後、更に私が彼女の眼に檢眼鏡をかざしますと、彼女は又もや「そんなことで眼底がわかりますか」と、毒づきました。私は眼のくらむ程かつと逆上しましたが



「今に見ろ」と心の中で呟いて、何も言はずに検眼を終りました。視力検査の結果は、まがひもなく、縁内障の可なり進んだ時期のものでしたが、別に眼球剔出法を施さないでも、他の小手術でなほるだらうと思ひましたので、そのことをS教諭に告げて置きました。

ところが、私の豫想は全くはづれたのです。その夜はちやうど私の當直番でしたが、夜半に看護婦があわただしく起しに來ましたので、駈けつけて見ると、彼女はベットのの上に、のた打ちまはつて、悲鳴をあげ乍ら苦しんで居ました。私は直ちに病氣が重つたことを察しました。或はアトロピンを點眼したのがその原因となつたかも知れません。はつと思ふと同時に、心の底から痛快の念がむらくと湧き出ました、取りあはず鎮痛劑としてモルヒネを注射して置きました。が、あくる日、S教諭が診察すると右眼の視力は全然なくなつてしまひ、左の方がかすかな痛みがあつて、視力に變りないけれど、至急に右眼を剔出しなければ兩眼の明を失ふと患者に宣告したのであります。さうしてその時S教諭は患者の目の前で、これ程の容體になるのを何故昨日告げなかつたかと、例の如くをStumpf, Dumm を繰返して私を責めました。

S教諭が患眼剔出を宣告したとき、私は彼女が一眼をくり抜かれると思つて痛快の念で息づまる程でしたが、S教諭のこの態度は、その痛快の念を打消してしまふほど大きなショックを私に與へました。その時こそは、S教諭に對してはかり知れぬ程の憎悪を感じました。私は顫ふる身體を無理に押へつけて、ちつと辛抱しながら、S教諭に對して復讐するのは、この時だと思ひま

した。美貌を誇り、それを賣り物として居る女優が一眼をくり抜かれることは彼女にとつては死よりもつらいにちがひない。若し、私の點眼したアトロピンが直接の原因となつたとしたならば、私は立派な復讐を遂げたことになる。と、かう考へて見ても私はどうもそれだけでは満足出來なかつたのです。彼女に對してもつとく深刻な復讐を遂げ、その上教諭に對しても思ふ存分復讐したいと思ひました。それにはこの又とないチャンスを利用するに限ると私は考へたのであります。

患者が眼球剔出ときいて如何にそれに反對したかは諸君の想像に任せます。然し、S教諭は捨て、置けば兩眼を失ふといふこと、巧みに義眼を嵌めれば、普通の眼と殆ど見分けがつかぬことなどを懇々説諭して、なほその言葉を證據立てるために、義眼を入れた患者を數人、患者の前に連れて來て示したので、やつと患者は納得するに至りました。

女子の眼球剔出の手術は、通常全身麻酔で行ふことになつて居ります。私は即ち、その麻酔を利用して、S教諭に對する復讐を遂げようと決心しました。御承知の通り、全身麻酔にはクロ、フォルムとエーテルの混合液が使用されますが、私はそれをクロ、フォルムだけにしたならば、ヒステリックな患者はことによると手術中に死ぬかも知れぬと思ひました。助手の失敗は教諭の失敗でありますから、責任感の強いS教諭は、ことによると引責辭職をするか、或は自役をも仕兼ねないだらうと考へたのです。諸君！ 諸君は定めし「なるほど癡人にふさはしい計畫だな」

と心の中で笑はれることせう。然し何事もチャンスによつてきまるのですから、これによつて、意外に満足な結果を得ないとも限らぬと私は思ひました。

さて、患者が承諾をすると、私は時を移さず手術の準備を致しました。眼科の手術は外科の手術とちがつて極めて簡単です。いつも教諭と助手と看護婦の三人で行はれます。S教諭は腕の達者な人ですから、碌に手も洗はないで手術をする癖です。私は先づ患者を手術臺に仰向きに横はらせ、側面に立つて麻酔薬をかけました。無論、クロ、フォルムだけを用いました。マスクの上から大量に滴らしますと、患者は間もなく深い麻酔に陥つたので、看護婦に命じて隣室の教諭を呼ばせ、その間に私は一方の眼をガーゼで蔽ひ、手術を受ける方の眼をさらけ出して教諭を待ちました。

やがてS教諭は患者の頭部の後ろに立つて手術刀を握りました。いつも手術中には、私に向つて必ず、例の獨逸語の罵言を浴せかけますが、その日は、私がクロ、フォルムの方に氣を取られて居て、餘計に愚圖々々しましたので、一層はげしく罵りました。罵り乍らも教諭は鮮かに眼球を剔出して、手早く手術を終つて去りました。くり抜かれて、ガーゼの上に置かれた眼は健眼と變りなく何となく私を睨んで居るやうでしたから、一瞬間ぎよツと致しました。で、私はピンセットにはさみ、いち早く看護婦の差出した、固定液入りの瓶にボンと投じて持ち去らせ、それから縛帯にとりかゝりました。通常一眼を剔出して、健眼に對する刺戟を避けるために、兩眼を

縛帯し、二日後にはじめて健眼をさらけ出すことになつて居りますので、私は、患者の眼の前から後頭部にかけて房々とした黒髪を包んで、ぐる／＼縛帯を致しました。それが済むと、まだ麻酔から覺めぬ患者を病室に運び去らせて跡片附を致しましたが、私は豫期した結果の起らなかつたことに、非常な失望を感じました。諸君は私の計畫がやつぱり癡人の計畫に終つたと思はれるのでせうが、その時私はまだまだ一縷の望を持つて居たのです。といふのは、彼女の殘された健眼もことによると、緑内障に冒されるかも知れぬと期待して居たからであります。

果して、私の期待したことが起りました。患者は手術後、程なく無事に麻酔から覺めて、元氣を恢復し、その日は別に變つたことはなかつたですが、翌日から左眼に痛みを覺えると言ひ出したのであります。剔出した右の眼のあとが痛むのは當然ですが、左の眼の痛むのは緑内障が起りかけたのだらうと考へて、私は心の中で、うれしさうに、チャンスだ、チャンスだと叫びました。

然し、S教諭に對する復讐は？ 諸君、若し、左の眼も緑内障にかゝつたならば、もう一度眼球剔出の手術があるべき筈です。私は其處に希望をつなぎました。何事もチャンスですよ、諸君！

愈よ三日目になつて縛帯を取ることになりました。私はその日をどんなに待つたことか、縛帯を取り除いて若し残つた眼が見えないやうだつたら、それこそ立派な緑内障の證據で、患者に對

する復讐心が一層満足させられるばかりでなく、教諭に對する復讐のチャンスも得られる譯ですもの。

その朝、私はT教諭に向つて、患者の健眼が痛み出した旨を告げました。すると、教諭は顔を曇らせて、

「またやられたのかな」と言ひましたが、その日は何となく沈んだ顔をして居たので、私を罵りませんでした。

やがて私は他の助手や看護婦たちと共に、教諭に従つて患者の室に行きました。患者は以外に元気で、早く繃帯を取つてくれとせがみました。私は患者をベッドの上に取り直らせ、亢奮のために顫ふる手をもつて、繃帯を外しにかゝりました。

「繃帯を取つてから、少しの間はまばゆいですよ」とS教諭は患者に注意しました。

さて、繃帯を取り終ると、申す迄もなく剔出した方の眼にはヨードフォームガーゼが詰められてありまして、美しい容貌も慘澹たるものでした。患者は、さらけ出された方の眼でチツと前方を見つめ一つ二つ瞬きをして何思つたかにつこり笑つて言ひました。「S先生冗談なすつてはいけません。早く暗室から出して下さい」

この意外な言葉をきいて、並居る一同は、はつとして顔を見合せました。恐しい豫感のために誰一人口をききません。私は心の中で慄よ私のチャンスが来たなと思ひ、どうした譯かぞつとし

ました。患者は果して眼が見えなかつたのです。

すると患者は首を傾け、その白い兩手を徐々に上げ、軽く水泳ぎするときのやうな動作をして、頬から眼の方へ持つて行きましたが、その時、世にも恐しい悲鳴をあげました。

「あつ……わつ……先生……先生……右、と左を間違へて、見える方の眼をくり抜きましたねッ……」

O眼科醫はこゝで暫く言葉を切つた。室内には一種の鬼氣が漲つた。

諸君、實に、いや、實は、患者の患眼はそのまゝになつて、健眼がくり抜かれて居たのであります……この恐しい誤謬がもとで、責任感の強いS教諭は、二日の後自殺しましたよ……諸君、S教諭の誤謬は、もはや御察しのことと思ふが、復讐心にもゆる私の極めて簡単なトリックの結果でした。即ち患者に麻酔をかけた後、看護婦が教諭を呼びに行つた留守の間に、患眼にガーゼをかぶせて、健眼をさらけ出して置いたのに過ぎません。これが私の所謂チャンスです。とうです諸君、一石にして二鳥、癡人としては先づ上出来な復讐ではありませんか。

## 姪術魔

## プロローグ

麻酔から覚めると、女は、ベッドの上にもつくり上體を起して、暫らくの間、怪訝さうにあたりを見まはした。無意識の世界から意識の世界に移つたときの空虚な心が、その眼の色にあらはれて、ガラス窓からはひつて来る光線に、まぶしさうにまたまぶしさうながら、女は麻酔前の意識の閾に踏み返らうとした。

その時さつと診察室の扉があいた。さうして、醫師が威勢よくはひつて來た。その姿を見るなり、女は、慌てゝ、亂れた前を掻き合せながら、

「ま、先生、いつの間に、あの診察臺から、此處へ移りましたでせう。」と、兩頬に急に紅みを帯ばせながらたづねた。

醫師はにつこり笑つて言つた。

「たうとう、お氣がつかまりましたね。ほんの少しばかり嗅ぎ藥を用ゐただけですのに、それが、馬鹿によくきいて、手術が済んでも、なかく目をおさましにならなかつたものだから、診察臺では、窮屈だらうと思つて、そつとベッドの方へ移してあげました。然し、この嗅ぎ藥は、ほかの麻酔藥とちがつて、さめ際には、嘔氣も頭痛も起らない筈ですが、如何です、御氣分は？」

「はア、御蔭さまで。」かう言つて女は、その透きとほるやうに白い右腕をもつて、鬢のほつれ毛を掻き上げ、靜かにベッドから降りて、立ち上らうとした。けれども、まだ腰の神經が、十分、麻痺から恢復しなかつたと見えて、ふらくとよろめきながら、思はずベッドに腰かけた。人好きのする丸ぼちやの顔が、寢起きに見るやうな、重たさうな臉のために、却つて、その美しさに一種の凄味を加へるのであつた。

「暫らく、そこで靜かにしていらいつしやい。」と、醫師は、兩手を出して、押へつける眞似をして言つた。

「あの、もう、何時で御座いませうか。」と、女は、怖れるやうにして、醫師の顔をのぞき上げながらたづねた。

醫師は懷中時計を出した。「五時十五分です。」

「まあ」と女は目をむいた。「では、私もう一時間も覺えなしになつて居たので御座いませうか。」と、急に心配さうな表情をした。さうして、何やら言ひ迷つてゐるやうであつたが、やが

て決心したやうに言つた。「それで、如何で御座いませう、手術の結果は？」  
 「なに、手術といふべき程のものではありませんでした。ほんの少し搔抓しただけで済みまし  
 た。もう二三度行れば十分です。大した痛みはない筈ですが？」  
 「はア」といつて、女は、下腹部にその感覚を集めるやうな表情をして言つた。「今のところ何  
 とも御座いませぬ。それで、何で御座いませうか、先生のお考へでは、私に子供の出来る見込み  
 は御座いませうか。」  
 「無論ありますとも。」

「先刻もお話しましたとほり、主人はもうあきらめて居りますけれども、私はどうしても子供  
 がほしいので御座います。で、かうして、主人に内證に、御診察を受けに来て、折角、先生に手  
 術をして頂いたのですから、何とか妊娠いたしたいと思ひますが、これで幾分、私も心強くなり  
 ました。」

言ひながら、女は立ち上つて、歸り支度をした。二十五六の、藝者あがりと見えるやうな、そ  
 れで居て、どこかにうぶなところのある容姿を、醫師は、見とれるやうにながめ入つた。  
 「どうも、御邪魔で御座いました。」

しとやかに會釋して、診察室を出て行く女を、醫師は扉のところまで送り出しながら、「二三  
 日過ぎたら、間違ひなく御いでなさい。」

と、聲をかけてにやりと、悪魔のやうな笑ひをもらした。三月末の、窓からはひつて来る夕  
 暮の弱い光線の中で、その笑ひは、むしろ、悪魔をも、ぞつとせしめずには置かねものであつ  
 た。

## その一

婦人科醫黒瀬小太郎が、叔父を殺さうと決心してから、もう半年あまりも過ぎた。叔父は七十  
 を越して居るのに、その頑固な氣象と相俟ちて、その身體も頑健に出来て居ると見え、容易に死  
 にさうに思はれなかつた。それだのに叔父の死ぬのをあてにして借りた金は、恐ろしい勢をも  
 つて殖えて行つたのである。

叔父が死ねば、たつた一人の身内である彼が、當然叔父の財産を相続すべき筈であつた。債權  
 者たちも、それをよく知つて居て、彼に金を貸したのであつて、別にそれほどはげしく催促はし  
 なかつたけれど、高利によつてふえて行く借金は、彼の恐怖の種となり、もつて生れた彼の悪人  
 たる素質が作用して、彼の叔父殺害の決心を生ぜしめたのである。

けれども、人間を殺害するに際して、如何に冷靜なものでも、その決心は容易に出来ても、そ  
 れを實行するのは頗る困難である。もとより、殺害行爲そのものは、さほどの苦心も努力も要し  
 ない。然し、人を殺せば、自分も死ななければならぬ。死なないうまでも、囹圄の人となつて一生

涯を棒に振らねばならぬ。叔父はもう、年が年であつて、それほどこの世の中に必要な人間ではないけれど、その必要のない人間を殺しても、法律は決して容赦をしない。だから、ある目的をもつて人を殺さうとするには、豫め、法律の制裁からのがれる工夫を凝さなければならぬ。そこに多大の苦心を要し、従つて、殺人の實行が困難となるわけである。

黒瀬小太郎は、醫學を修めただけに、犯跡によつて、いかに犯人が発見され易いものであるかをよく知つて居た。死體が他殺であると決定されたならば、もはや犯人は早晚発見されるものであらねばならぬ。犯人の発見されなかつた殺人事件は、昔から稀ではないが、それはむしろ例外に屬すべきものであつて、そのやうな例外を頼みにして事を行ふのは、この上もない危険である。だから、発見されないやうに人を殺すには、どうしても、死體が他殺であると決定されぬやうに殺さねばならない。即ち、醫師が鑑定した結果、自然な死に方であるか、又は自殺したと判断するやうに仕向けなければならぬのである。

人を殺して、自殺したやうに見せかける方法は、多くの殺人者に、屢應用せられたところである。さうして、その方法は、多くの場合、殺人者の失敗に歸した。それほど、その方法は陳腐でもあり、又困難でもあるのだ。従つて、被害者に自殺を装はしめることは、やはり危険であるといはねばならない。

そこで、人を殺して法律の網をくぐる最も有効な方法は、被害者が、自然な死に方即ち病氣によつて死んだことを見せかけることである。小太郎は、最初に毒殺について考へて見た。いかにも、ある場合には、毒死のやうに見えるけれども、それは、たえず自分が、犠牲者のそばに附いて居て、診察をする醫師に、中毒であるといふことを感附かじめないやうにせねばならぬ。若し死因に疑はしいところがあつて、死體が解剖に附せられた場合には、毒は直ちに発見されてしまふ。

小太郎は久しく叔父の家に出入りしないのであるから、突然叔父をたづねて毒を與へることは、ピストルや刃物によつて叔父を殺すと同一である。若し叔父が心臟病にでも罹つて居れば、何か叔父の心にショックを與へるやうな方法を取つて、心臟麻痺を起させることが出来ないとは限らぬけれど、叔父はあのとほり達者であるし、あれだけの年齢まで、あの健康を保ち得るのは、心臟の強い證據であるから、到底そのやうな手段はとり得ないのである。

かうして彼は色々考へたあげく、叔父を眞實の病氣に罹らせて死なせることに決心した。彼は、叔父が、今までこれといふ大病に罹つたことを聞かなかつた。だから叔父を傳染病に罹らせなければ、叔父の死ぬプロバビリチーは多いと思つた。傳染病に罹らせるには、傳染病を起す細菌があればよい。細菌を手に入れることは、醫師である彼にとつて極めて容易なことである。で、彼は、チブス菌をもつて叔父を殺すことに決心したのである。

同じ傳染病のうちでも、ペストやコレラは特種な時期にしか起らないから、若しペスト菌、コ

レラ菌をもつて叔父を殺したならば、その發生の経路を調べられる處があるけれども、チブスに到るところに發生しつゝあるから、毫も疑はれることがない。

その上、チブス菌は、人體内に入つてから、一定の時日の後でなくては病氣を起さない。即ち、通常二週間又は三週間の後でなくては、熱が起らないのである。この點が、毒を用ふるよりも遙かに安全である。毒ならば、服用して幾時間かの後には必ず症状があらはれるから、當然疑ひを招き易いけれども、たとひ叔父と一しよに物をたべても、チブス菌を叔父の食物に投じた場合には、二週間後に發病するやら三週間後に發病するやらわからぬので、疑はれる危険は毫もない。

そこで、たゞ残る問題は如何にして叔父と會ひ、如何にして叔父の食物の中にチブス菌を投ずるかといふことである。叔父に覺られないやうに毒を與へる最も確實な方法は、チブス菌をまぜた食べ物を自分も叔父もたべることである。それならば叔父に決して覺られる筈はない。

けれども、チブス菌は叔父同様に攝取すれば、自分もチブスに罹る危険がある。だから、自分だけは、チブス菌を食べても決してチブスに罹らないやうにしなければならぬ。それには、チブス菌で作つたワクチンをもつて、自分の身體を免疫すればよい。即ち、度々繰返してチブス・ワクチンを注射すれば、もはやチブス菌をのみ込んでもチブスには罹らない。

かう考へて小太郎は、自からチブス菌を培養してワクチンを作り、それをもつて、わが身體を

免疫したのである。

だから、小太郎が、叔父を殺さうと決心してから、自分の身體を免疫するまでに、相當の時日を費さねばならなかつた。

ところが、免疫は出來上つても、叔父に接する機會はなかなか來なかつた。久しく逢はなかつた叔父のところへ突然出かけて行つたとして、叔父はなか／＼氣をゆるさないであらう。叔父は雇ひの老婆と二人きりで暮して居るから、うっかりしたことをすれば、老婆に氣附かれる虞がある。で、小太郎は適當の機會の來るのを待たねばならなかつた。さうして、いつの間にか彼は、殺害の決心をしてから半年ばかりを過したのである。

## その二

然しながら、彼の殺害の實行を延引せしめたものは、以上の理由ばかりではなかつた。實は、その他に、もう一つ大きな理由があつたのである。

その理由を物語るために、作者は「プロローグ」に、彼の診察室に於けるある日の出來事を寫したのであるが、その時の女を、不思議にも彼は忘れ得なかつたのである。

想像力の發達した讀者諸君は、彼が、叔父を殺すやうな惡魔的計畫をする人物であることか、彼がその時診察室に於て如何なることを行つたかを、容易に推定されるであらう。彼は子を

求めようとして、彼に診察を受けた女に、手術をするといふ口實で、麻酔劑を嗅がせ、許すべからざる罪惡を行つたのである。

そもく彼の婦人科醫となつた動機そのものが、すでに不純なものであつた。元來、彼が醫學を志したのにも不純な動機によつたといへば言ひ得るのであるが、兎に角、彼は、彼の卑しき獸性を満足させんがために、婦人科を専攻することにしたのである。

彼は女を頭から馬鹿にしてゐた。女は性慾の對象に過ぎぬものだと思つた。貞操とか戀愛とか、さうしたもののは、彼にとつては、道ばたの木片にも等しかつた。さうして、彼のこの惡魔的な考へは、麻酔劑のために、粘土の塊のやうに力なく彼の前に端はつて、彼の自由に任せる女の姿を見る度毎に、益々深められて行くと同時に、いよく彼の罪惡を繰返す誘因となつたのである。

實際彼は、今まで、機會あるごとに、この恐ろしい犯罪を行つて來たのである。さうして、遂には、西洋中世の暗黒時代に子を求めんとして神殿に參籠する女たちを、神の御名によつて子を授けた神主たちのやうに、その行爲に對して何の後悔をも感じないに至つた。

かくて彼の診察室は神殿となり、彼は神主となつた。たゞ神殿に於ては、深夜の暗黒に神がさらくと歩み寄つて、子を授ける術を施したまふのに、彼の診察室では、白晝の光の中で、惡魔がその毒牙をふるつて、子を授けるの術を行つた。

彼は自分の施術した女に對して、少しも心を動かさなかつた。もとくその獸性の満足を目ざしたのであるから、それは彼にとつて全く路傍の人に等しかつた。ところが、どうした譯か、彼が三月の末に取り扱つた女に對してだけは、不思議な愛着を感じはじめたのである。

もとより、彼女は美しかつた。けれども、これまでの女で彼女よりも美しいものは幾人もあつた。又、彼女はやさしかつた。けれども、やさしい女は前に幾人もあつた。それだのにあの二十五六の丸顔の女だけが、不思議にも彼の心を深くかき亂したのは何故であらうか。それは、彼が、別れ際に「二三日過ぎておいでなさい」と言つたにも拘はらず、それつきり遂に姿を見せなかつたためであらうか。いままでの女の多くは、恐ろしい汚辱を受けるとは少しも知らずに、彼の命ずるまゝに彼の診察室をたづねて來た。けれども中には、一度きりしか來ないものもあつた。さうしてその女に對して、彼は、何の執着も持たなかつたのに、あの女に限つて、目を経るに連れて、焦燥を感じたの何故であらうか。

「もう一度、あの女に逢ひたい。」

かうした望みが、彼の心の中で一日一日ふくらんで行つたのである。

世に、己が職權を利用して惡事を行ふほどにくむべきことはない。ことに彼に弄ばれた女は、少しも身に汚辱を受けたことを知らないものであるから、その罪は一層大きい。だから、たとひ法律の網を巧みにのがれても、遂には何等かの形に於て罰を受けるに至るものである。かやう



な場合、むかしの人は「阿漕が浦に引く網の」度重なることをもつて、發覺の理由としたけれども、それよりむしろ運命の命ずるところといった方が至當であらう。さうして、わが黒瀬小太郎が「彼女」に執着を感じるに至つたのも、むしろ、「運命」をもつて説明するのが、至當であるかも知れない。といふのは、彼は彼女によつて、いはゞ致命的な制裁を受けるに至つたからである。

彼は診療簿によつて、彼女の名が「土屋弘子」であることと、その住所がS區R町十二番地であることを知つて、わざわざ訪ねて行つたけれども、R町には十二といふ番地が存在しないばかりか、土屋といふ姓の家は、そのあたりに一軒もなかつた。恐らく、彼女は彼女があの日診療所で語つたごとく、その主人に内證で来たため、その住所も姓名も、出鱈目のものを用ゐたのであらう。

それにしても、彼は主人のある女を捜して如何しようといふのであるか。それはもとより彼自身にもはつきりした心がわからなかつた。たゞもう、無暗に逢つて見たかつたのである。もう一度彼女の豐滿な肉體を我ものにしたかつたのである。

はじめ彼は彼女が少くとも半月か一月の後には、もう一度彼の診療所をたづねるであらうと豫期して居た。ところが一月経つても二月たつても、彼は再び彼女を見る事が出来なかつた。それかといつて、彼は彼女を何處に捜してよいかわからなかつた。まさか、廣い市中を戸別に調べ

ることも出来ない。それかといつて、人の出さかる街を歩いて、偶然彼女と逢ふ機會を得るのは、尙更望みのないことである。

かうして彼は日ごとに苛々しさを増した。彼が、彼女に「手術」を施したのは、彼がその叔父を殺さうとして、自體の免疫に取りかゝつて一月ほど経つて後のことであるが、一時は、彼女のことで心が一ぱいになつて居たため、叔父を殺さうとする心が押へ附けられたかのやうであつた。けれども、彼女を診療してから四ヶ月餘を経た今日、もはや彼女に逢ふ望みが殆んど無いときますると、彼の焦燥は、やがて、猛然として、叔父殺害の心を興らせるに至つたのである。

もう彼は、叔父に逢ふ機會をたゞぼんやり待つて居ることが出来ないやうな氣がした。彼女に逢ひ得ないといふ絶望の心は、叔父を憎む心を倍加した。だから、彼は、如何にしたらば、叔父と會談して、叔父と食事を共にする機會を作り得るかを考へはじめたのである。

ところが、その機會は、思はずも早く作ることが出来た。それは彼自身が工夫した結果ではなくて、いはゞ「運命」の興へてくれたものであつた。といふのは、久し振りに、全く久し振りに、叔父から手紙が来て、来る八月×日は、七十二の誕生日に相當するから、お前を招待して心ばかりの祝宴を開きたいといふ通知を受取つた故である。

## その三

これ迄、叔父は一度も誕生祝などを催さなかつた。又、たとひ祝ひ事があつても滅多に彼をよばなかつた。それなのに、今、叔父が誕生日の祝をして、而も彼を招くといふのは、どうしたことであらう。彼はどう考へて見ても、叔父の心の變化を説明すべき理由を見出すことが出来なかつた。だから彼は、ただ叔父の死ぬべき時節が来たのであると思ひ、叔父は何も知らずに、かの夏虫のやうに、飛んで火に入る哀れな運命に見舞はれたのであると思つた。

彼はこの招待状を受取るなり、新たにチブス菌を培養し、それでワクチンを作つて、念のため注射した。さうして、當日までに強い毒性を有するチブス菌を培養し、當日になつて、叔父の大好物なる葛饅頭を買ひ、その一つ一つの餡の中へ黴菌を注射して持つて行くことにしたのである。先方へ行つて、その饅頭を雇の老婆に渡すと、老婆はそれを菓子器に盛つて出す。それを叔父と二人で、食べれば少しも叔父に悪計を氣づかれずに、チブス菌をのませることが出来るわけである。

彼は、恐ろしい土産を携へて叔父の家の門をくゞつた。玄關へ出迎へたのは、見知りの老婆であつた。彼は直ちに叔父の居間に案内された。

その日は妙に蒸暑くて、彼の内心は何となく苛々した。彼はつとめて平靜な態度を装つて、久しぶりに叔父と對座した。

「やあ、よく来てくれたなあ、さあ、暑いから、らくにしてくれ。」

いかにも機嫌よく老人は彼を迎へたが、その顔は少しく瘦れて居て、恢復期患者のそののやうであつた。

「まことに久しく御無沙汰を致しました。時に、叔父さんは、どこか悪かつたのではありませんか。」

「うむ、さすがはお医者をして居るだけに、よく當つたなあ、實は先月、病氣をしたんだ。」

「それはいけませんでした。ちつとも知らなかつたものですから、御見舞にも來ず、失禮しました。」

「なに、態と知らせなかつたのだよ。然しまあ御蔭でもと通りの元氣になつた。」

「結構でした。」といひながら小太郎は、持つて來た包みを開いた。「然しそれでは、叔父さんの好物の葛饅頭も、召し上つて頂けぬかも知れませぬねえ。」と、心もち聲を顫はせた。

「それは有難う。いや、大によばれるよ。」

かう言つて、叔父は彼の方へ手を差出しながら、竹の皮の包を受取り、それをひらいて手づかみで食べた。

彼はさすがにはツとして、急に物言ふことが出来なかつた。彼はいよく叔父が死ぬべき運命に見舞はれたことを知つたのである。

老人は、口を動かしながら言つた。

「俺は、お前も知つて居るとほり、昔から食べ物には無頓着だつた。それが、先達から事情あつて、食べ物に氣をつけるやうになつたら、却つて病氣に罹つたよ。いや、まつたくつまらぬ目にあつてしまつた。」

「病氣は何でしたか？」

「なに大した病氣ではなかつたが、俺にとつては一生一度の大病だつたよ。」

「え？」と、彼の全身は緊張した。

「醫者はパラチブスだと言つたよ。」

彼は思はず、大聲を發しようとしたが、危ふくふん張つた。彼は眼の前がまつくらになる氣がした。といふのは、彼の折角の計畫が、叔父のこの言葉によつて微塵に碎かれたのだからである。パラチブスに罹つたものは、チブスに罹ることが稀である。たとひ罹つても多くは生命を失はない。

叔父は彼の顔色の變つたのも知らず語り續けた。「先月の始めから三週間ほど床に就いたよ。然し御蔭でもう何でも食べられるやうになつた。」

何故、もつと早く殺害を實行しなかつたか。と、彼の心の後悔の念がむら／＼と起つた。「彼女」さへ彼の心を迷はさなかつたら、と、思へば、今は、呪はしい彼女であつた。

叔父は快活に續けた。「俺が病氣前に食物に氣をつけるやうになつたのは、急にこの世に執着

が出来たからだよ。お前に話すと笑はれるかも知れぬが、實はこの年になつても浮いた氣がやまづ、三年ばかり前に、妾を置いたのだよ。世間の口がうるさいものだから、ほかのところへ圍つて置いたのだが、その女が妙にやさしい氣性で、この春から、たうとう妊娠したのだよ。」

「エッ？」と、彼は思はず大きな眼をむいた。彼の頭はその時、海鼠腸のやうに亂れた。「驚くのも無理はない。何しろ、俺は昔から一度も子にめぐまれなかつたのだが、これで俺にも財産を譲るあとつぎが出来た譯だ。だから生れた子に對しても長生きをしてやらねばならぬと思つて、身體を大切にしかけたのだよ。ところが、あべこべに、大病に罹つてしまつた。けれどまあ御蔭で助かつたから、今日は、病氣の全快祝と、あとつぎの出来た御祝をかねて、誕生祝をしようと思つて、一人しかない身内のお前に来て貰つたのだ。」

彼の全身は、山湖に立つ漣のやうにふるえて居た。殺害の計畫が失敗に歸したばかりでなく、あてにして居た叔父の財産さへも、今、眼の前で消し飛んでしまつた。彼は發狂しさうであつた。ぱつと叔父にとびかゝつて、その咽喉を力任せに絞めたいやうな衝動に驅られた。

然し、叔父は反對に、ます／＼愉快げに語つた。「さういふ譯だから俺が病氣になつたとき、女をこちらへ呼んで介抱させたのだ。それから、女を入籍させて、正妻にしたのだよ。だから、今ではづつとこの家に同棲させて居るのだが、何とかして無事に産み落させたいものだと思ふ。それにしても不思議なのはこの年になつて、よく子が出来たものだと思ふよ。何しろ、俺はもう

子の無いものとあきらめ切つて居たのだからなあ。お前はこの方面の御醫者をして居るが、かういふことは、世の中にたまにはあるものなのかい？」  
 かう聞かれても小太郎はにわかには返答することが出来ず、ただ痙攣的に引きつったやうな笑ひをもらすだけであつた。

そのとき、彼の後ろにあたる隣室に足音がしたかと思ふと、叔父は急に笑顔をつくつてその方を見て言つた。

「おゝ、お前来たか。これが俺の一人きりしかない甥だ。小太郎、今お前に話した家内だ。逢つてやつてくれ。」

小太郎は、鉛のやうに重たくなつた首を振り向けて見た。

その瞬間、彼は腦貧血を起して、眩暈を感じ、思はず身體を後ろに反らせて疊の上にあやふく兩手をついて支へた。

其處にはちやうど鬨のむかふに、彼が今日まで寤寐に忘れず捜し求めた彼女、即ち彼に子を授けられた「土屋弘子」が無邪氣な笑顔を作つて立つて居た。

## 邂逅

覆面の盗賊は苦もなく、振ぢふせられて、この家の主人の寢衣姿の前に、力なくうづくまつた。すでに背中に無理にあはされた皺だらけの骨々した手が、よほどの高齡を思はせたが、やがて主人が、その覆面の布片を取り除くと、果してよぼくの白髪頭と瘦こけた老顔とがあらはれた。さうして右の眼の下にある一錢銅貨大の黒い痣が、少しくその人相を險惡ならしめた。

「どうぞ御ゆるしを願ひます。」

電燈の光を、まぶしさうに避けるやうにして、老人はその頸筋の皺のやうな細い聲を出してかう嘆願した。

金持ちによくあるタイプの、でつぶり肥つた主人は、さすがに息づかひあらく、老人の嘆願の言葉にかまはず、寢衣の帯を解いて、老人を引摺りながら傍の柱にしばりつけようとした。

「どうぞ、御許し下さいませ。」と、老人は少しも抵抗しないで、神妙にうつむき乍ら、主人が身體に帯をまく間言ひ續けた。「これからはきつと改心致しますから、どうぞ今回は御見逃しを願ひます。私はもう七十を越して居りますから、いつそ刑務所で暮した方が樂で御座います。が、私には三十年前に別れた一人の子供が御座います。それに逢ふまでは死にたくありません。まだ刑務所へ行きたくありません。實のところ今までは一度も人さまの家へ盗みにはいつたことは御座いませんでしたが、二三日どうにも法がつかず、ふとした出来心でたうとう、こんな間違つたことを仕出来ました。もう二度とかやうな恥かしいことは致しません。たとひ飢ゑ死んでも正直な道をとほつてまゐります。どうぞ一生の御願ひで御座います。わが子に逢ふまで御助けを願ひます。」

その聲にはたしかに誠の色があらはれて居た。又、その言ふことも恐らく眞實であらう。かう思ふと主人は何となく一種のあはれさを催したが、また忽ち冷靜な理性が甦へつた。さうだ、どんな盜賊でも捕へられればたとひ内心でどう思つても、表面には只管改心の狀を示して憫を乞ふであらう。今迄金錢を乞ひに来る者の言葉に釣ひこまれて同情し、あとで裏切られて腹を立てた例は數へ切れぬほど澤山ある。たとひ老衰した盜賊であつても、うっかりその言葉を信用してはならない。かう思ふと、却つて一層の面憎さを覺えるのであつた。

「おい／＼」と、主人は隣室の方に向つて大聲で呶鳴つた。「誰か、早く警察へ電話をかけてく

れ。」

その言葉が終るか終らぬ時、靜かに襖があいて夫人がはいつて來た。四十前後のどことなくしつかりした顔附をした彼女は、盜賊と顔を見合わせるなり、驚いてその場につつ立つたが、すぐさま氣を取りなほして言つた。

「あなた一寸。」

かう言つて、右手で良人をさしまねいた。

「何だ？ 電話はもうかけたか？」

「かけます。かけますからちよつと次の間へ來て下さい。」

その言葉が侵すべからざる調子を帯びて居たので、主人は盜賊をしぼつた帯の結び目を檢めて夫人の意に従つた。

次の間へ來るなり夫人は小聲で言つた。

「あなた、あの老人をゆるしてやつて下さいませんか。」

主人はこの意外な申出に、思はず妻の顔をながめたが、

「いやいかん。」ときつぱり答へた。

「わたくしの御願ひで御座います。どうぞ見のがしてやつて下さい。」

「何故そんなことをいふ？」

「あなた、あの老人を警察へつき出すと、あとで、この家へ迷惑がかかります。」

「ええ？」

夫人は一層聲を低めた。「あの老人は、實はわたしの……父で御座います。」

「何？」

「びつくりなさるのも無理はありません。あれはたしかに、三十年前行方不明になつた父で御座います。普通ならば逢つてもわかりませんが、あの右の眼の下に痣が、はつきり記憶に残つて居ります。先刻あの老人が三十年前に別れたわが子に逢ひたいと言つたのを立聞き、今痣を見て、私はぎよつとしました。此ま、警察の手に渡つて、取り調べが進んだら、私との關係があるかみへ出ないにも限りません。さうなるとこの家の名折れになります。折角便りない身を救ひ上げて頂いた私が、御恩を仇でかへすやうな事になつては申譯がありません。普通の時だつたらなつかしい御父さんと名乗りたいところですが、かりそめにも罪を犯した人を父とは呼べません。父はこのまゝ永久にわが子に逢へなくなる譯ですが、それだけは、今夜の行爲に對するむくい御座います。家内の父がかうした悪人であることがわかつては、嘸かし無念で御座いませうが、それだけは御勘辨下さつて、どうか老人をゆるしてやつて下さいませ。」

先刻から、運命の皮肉を痛感して、頭の熱して居た主人はこのときやつと考をまとめた。「けれど、このまゝ逃がしてやつても、又餘所へはいつて警察へあげられたら、やつぱり同じこ

とではないか。」

「鼻眞目か、恐らく二度とはやりますまいけれど、迷惑のかゝるのを知つて、警察へつき出すのは心苦しう御座います。」

「お前の勝手にするがよい。」

主人は太息をついて、最後にかう言つた。

二

樹木が死んで居るかと思はれる街の上を、老人は泥酔した人のやうに、ひよろ／＼歩いて行つた。星の多い秋の夜空から冷たい空氣が沈んで来て、老人の骨の髄まで沁み渡つたが、心の中は人の情けの温かさをつく／＼感じて居た。

然し、たとひ夫人の情で一旦は釋放されたとはいへ、明日から、どうして暮してよいかを思ふと、暗い氣持にならざるを得なかつた。捜して居るわが子に何時逢へるか知れぬばかりでなく、實はその生死さへもわからぬではないか。かう思ふと、あのまゝ警察へ突き出されて刑務所へ送られて居た方が、遙かに幸福だつたかも知れぬ。

「惜しいことをした。」

かう呟いて、ふと我に返ると、後ろから人の駆けて来る音が耳にはいつた。

「何者だらう？」

振り向くと同時にむかうから聲がかゝつた。

「もし、一寸待つて下さい。」

老人はぎくりとした。「へ？ 私で御座いますか。」

見ると、一人の青年が立ちどまつて、息をはづませながら、懐の中から紙包を取り出した。

「あの、このお金を、お母さんからお前さんに渡してくれといふことです。」

かう言つて、青年がその紙包を老人に渡さうとすると、老人は一寸躊躇して相手の顔を見つめたが、すぐさま事情を悟つた。

「へ？ それでは私がいま御邪魔した御宅からで御座いますか、そんなことをして頂いては、どうもはや。いや、ゆるして頂いてさへゐるに、これはどうも。然し折角で御座いますから頂戴して置きます。」

かう言つて、紙包を受取るなり、老人はそれを幾度も押し頂いた。

青年は、老人が盗みにはいつた家の一人息子で、某高等学校の生徒であつた。彼は先刻父母の會話を偷みきいて、何となく一種のロマンチックな気分になつて居たが、母に内意をふくめられて、紙包を老人に渡して来いといはれたときは、母の心づくしをうれしく思ひ、自分の祖父を見るといふ好奇心も手傳つて一生懸命に後を追つて走つて来た。然し、眼の前に恐縮して居るみす

ぼらしい老人を見ると、今迄のロマンチックな心は去つて反對に、同情の心がむらくと起り、「おぢいさん！」と叫んで慰めてやりたいやうな氣がした。けれども「これを渡したら、何にも言はずにすぐ歸つておいで。」といった母の誠めの言葉はあやふく、その衝動を遮つた。

で、そのまゝ歸らうとしたが、そのときふと一つの誘惑を感じた。

「お前さん、わが子をたづねるといふことだが、本當ですか。」

「はい。」と考人は正直さうにうなづいた。

「その娘は何といふ名ですか。」

「へ？」と、老人はためらつた。青年は母の名をきくだらうと思つて緊張したが、老人の答は意外であつた。

「あの私には娘はありません、搜して居るのは一人きりの伴で御座います。」

どうして走り出す氣になつたか、自分にもわからなかつたが、氣がついて見ると青年はわが家の前に來て居た。さうしてすべてが母の慈悲心と機智によつて作られた芝居であることを知つて、涙ぐましいほどの感激を覺えた。

# 二十年后

「どうぞごちらへ。」

客の松山氏を案内しながら、主人の杉田氏は言った。

「こゝは大へん涼しい風がはひりますな。」

「はは、山の上で御座いますから。」

「どうも、今晚は色々御馳走様で御座いました。」と、松山氏は、ヴェランダに据ゑられた椅子に腰をおろして、巻煙草に火をつけた。

「いや、何も御座いませんで、誠に御恥かしいことでした。でもまあ、かうしてお近づきになつて頂いたことは何より嬉しく存じます。」と、緑色のシエードで蔽つた臺附電燈の置かれたテーブルを隔て、客と對座しながら、杉田氏は満足さうには、笑んだ。

「日中でしたら、この見はらしは、一層よろしいで御座いませう。」

「左様で御座います。F市全體が眼下に横はり、その先にI灣が擴がつて居りまして、晴天には遙か彼方のY島の噴煙も見られます。夜でも御覽のとほり町の灯影がべつたり播かれて、生き物の眼のやうに明滅して居るのは、美しいといふよりも、何かかう、神秘的な感じのするもので御座います。」

「仰せのとほりで御座います。夜の街は、いえ、夜それ自身が、神秘的なもので御座います。」

「人間の現在を畫にたとへますならば、過去は夜にたとふべきで御座いますまいか。」と、主人の杉田氏は客の顔をのぞきこむやうにして言つた。

「左様で御座います。」と、松山氏は、何となく寂しさうな笑ひをもらした。「夜が神秘であるやうに、人間の過去も神秘なものです。」

「同じ街に住んで居り、同じく實業界に顔出して居ましても、つひ、かけちがつて御目にかゝる機會もなく、やつと二月前に親炙を得、今日私の拙ない招待に快く御いで下さつたことはまことに感謝に堪へません。それについて、今、人間の過去の話が出ましたので、かねて一度承りたいと思つて居たことですが、あなたが、松山製鋼所を經營され、鋼鐵王として世の尊敬を受けられるに至るまでには、いふに言へぬ御苦心と御努力をなさいましたことで御座いませうな？」



「いえ、もうどうも。」と何故か松山氏は氣乗のしない返事をした。  
 「自分のことを申すも烏滸がましいのですが、私も、現在のSF電氣鐵道株式會社社長になるまでには随分難儀を致しました。」

「さうで御座いますとせうとも。」

「死ぬやうな思ひをしたことも御座います。」と、杉田氏は、特に力をこめて、自分のこの言葉が相手にどう響くかを、さぐるやうな眼附で言つた。

が、松山氏は、何かわき事を考へて居るかのやうに、物うくらなづくだけであつた。

「ですから、あなたも、きつと幾多の波瀾曲折を経て今日を築かれたことと思ひます。誠に失禮なことを申して相済みませんが、あなたは右の拇指が御座いません。きつと私は、何か機械にでもはさまれなかつたのではないかと想像致すので御座います。」

「これですか。これは小さい時分に腹に噛まれてな、醫者が切斷してくれたので御座います。」

「何でしたら、一つ過去の御話を御聞かせ願ひたいもので御座います。」

「さうで御座いますな。」と、松山氏は時計を出して、「おや、もう八時で御座いますな。實は今晩まだこれから一寸餘所へ……」

「まあ、まあ、御よろしいでは御座いませんか。折角はじめて来て頂いたのですから、出来る

ことなら、夜更しでもして、ゆつくり御話を承り度いと思ひます。」

「いや、折角の御厚志ですから、私ももつと御邪魔致し度いので御座いますが、何しろ、固い約束がありますから。」

「でも、せめて、十時半か十一時まで。」

「その十一時に、あるところへ行かねばならぬので御座います。」

「左様で御座いますか。それはどうも致し方が御座いません。ではいづれ又、近いうちにゆつくり御目にかゝることに致しませう。」

「誠に御丁寧な御振舞ひに預りまして恐縮致しました。おや、だいぶ風が強くなりましたな。」  
 から言つて立ち上つた松山氏に従つて、

「左様。だいぶ空が暗くなりました。ことによると一雨來るかも知れません。」と、同じく天氣を氣づかひながら、杉田氏は、客の退出を告げるべく、テーブルの上のベルを押した。

## 一一

それから二時間ほどの後、鋼鐵王の松山氏は、F市を隔つる約一里ほどの海岸の斷崖の上に立つて居た。が、その服装は、先刻、杉田氏方でのそれとは全然ちがひ、垢のついた紺がすりに、破れた黒の兵兒帯をしめた、世にも見すばらしい姿であつた。

が、その見すばらしい姿を誰も怪しむものゝないほど、その附近は寂しかった。晝間でも滅多に人の来ないところであるから、夜分にはなほ更人影は見えなかつた。海は暗かつた。今にも降りさうな空模様だつたので、I 灣一帶が混沌たる有様だつた、たゞ、その斷崖が海に面して居る端から數間控へたところに、單線の電車道があつて、電柱について居るほの暗い灯が、あたりの空気をかすかに照し出して居たけれど、むろん、その明りは斷崖まで届かなかつた。その電車道こそは杉田氏の經營にかゝる S F 電気鐵道なのである。一般にこのあたりは波が荒かつたが、今夜は風が強いために、斷崖に打つかる水の音は一層すさまじかつた。高さは三丈に餘つたが浪のしぶきは雨の如く降りそゞいで、夏の夜とはいへ、涼しさを通り越した。海面には一艘の船も見えず、晝間はよく飛ぶ海鳥も、夜は何處に居るのか聲さへしなかつた。

「おや、降りだしたかな。」

異様な姿をした松山氏は、かう呟いて、斷崖に生へて居る太い松の木根元に腰をおろし、海面に見入りながら巻煙草をふかしはじめた。とその時、後方を電車が走り過ぎたので松山氏は腕にはめた夜光時計を見た。

「十度十時だ。まだ一時間ある。少し来やうが早かつた。こんど同じ方向へ行く電車の通る時が、約束の時刻だけれど果してあの人は来るか知らん。」

かう言ひながら、松山氏は過去の追憶にふけつた。

ちやうど二十年前の今月今夜のことである。松山氏はある女に失戀して、世をはかなみ、この斷崖から投身自殺しようとした。今から思へば馬鹿らしいことではあるが、その馬鹿らしいことが、冷靜を缺いて居た當時の心には、決して馬鹿らしくはなかつた。彼女を他人に奪はれては、もはやこの世に生きる望みはなかつた。で、自殺の場所として選んだのがこの斷崖であつた。その頃はまだ電車道が引けて居なかつたし、今夜のやうに雨模様だつたので、今夜よりも一層暗く、又、風も今夜よりは一層強く、波の音も一層はゞしかつた。その時、着て居た紺がすりと締めて居た兵児帯とが、今現に松山氏によつて纏はれて居るものなのである。

「裏切つた女に思ひ知らせてやらう。」

かう思つて、斷崖に近づくと、ふと、松山氏は、自分より先に、この斷崖を訪問して居る者のあることに氣附いた。闇の中でよくはわからぬが、どうやら自分と同じ年輩の男らしかつた。はツと思つて様子をうかがふと、やがてその先客は、何やら呟いた後、ひらりと身を前方に躍らせた。

「危ない！」

思はず大聲に叫んで、松山氏は辛うじて男を引きとどめた。

「離して下さい。」と男は言つた。

「いやいけません。あなたは身投げをするのでせう。先づその理由をきかせて下さい。」

「理由は言へません。」

「理由を聞かねば離しません。」

「失戀です。失戀したのです。」

「え？」と、松山氏は思はず手を離したが、その聲があまりに大きかったので、今度は、相手の男が不審さうにたづねた。

「どうなさつたのです？」

「私にはあなたの身投げをとめる資格がありません。」

「それはまた何故ですか。」

「わたしも、失戀のために、今夜こゝから身投げをしようと思つて來たのです。」

いつの間にか二人は崑頭に腰を下して、身の上を語り合つた。闇いからお互の顔は少しもわからなかつたけれど、同じやうな境遇にあることが二人を親密にした。

「女は誰でもさうした薄情なものですかねえ。私の戀した女ばかりがさうだと思つたのは誤りでした。あなたの話をきいて、わたしはもう自殺の決心を翻しました。」と、先來の男は言つた。

「いや、わたしもはじめて夢のさめた心地がします。死ぬのは厭になりました。これからは死ん

だつもりで働きます。」と、松山氏も興奮して言つた。

「さうです。お互に心を入れ替へて働かうではありませんか。」

やがて松山氏は提言した。

「どうです。眞劍になつて働けば、きつと相當な人間になれるでせう。今後二十年間努力して、お互に自分の運命を開拓しようではありませんか。で、こゝで御約束したいのは、二人がどこでのやうな運命に出逢つて居ても、生命さへあつたならば、滿二十年後の今月今夜、この時刻……さうです。今はもう十一時でせう。十一時にこゝで逢ふことにしようぢやありませんか。」

「賛成です。」

「顔もよくわからず、まだ姓名も名乗り合はなかつたのが却つて面白いと思ひます。二十年後に逢ふことを思へば、お互にはげみがつきます。」

「それは本當によい思ひ付きです。生命さへあれば、たとひ病氣中でも、私は人に運ばれて、こゝへやつて來ます。」

「たゞ、その時の證據に、わたしの兵兒帶の端をちぎつて、二つに割り、これをお互に保存して示し合ふことに致しませう。」と、松山氏は、證據の品を作つた。

「たしかに受取りました。さうして、今日のこと決して第三者に口外しないことに致しませ

う。」

それから二人は握手して、そのまゝ別れてしまつたのである。顔も知らねば名も知らないで。

三

この珍らしい約束によつて、松山氏は、今この崑頭にあらはれたのである。自殺を思ひとゞまつてから二十年、その二十年間の苦心は並大抵のものではなかつた。松山氏はその時着て居た紺がすりと兵兒帶とを記念に残して自己鞭撻の道具とした。さうしていはゞその御蔭で今日の富を作つたのである。だからその記念の品を纏つて約束の男に逢ひに来たのである。

「あの人は果して生きて居るであらうか。二十年間にどんな境遇に變化しただらう。今日の約束を覚えて居るであらうか。」

松山氏は過去の追憶から覺めて何となく心がいら／＼して來た。すでに今晚杉田氏に招かれて色々御馳走になり、杉田氏から親切な言葉をかけられた時から、十一時の約束を思ふと、胸が躍つて、ともすれば心が上の空であつた。

「生きて居たらきつと來るだらう。顔も名も知らないけれど、十一時迄にあらはれて兵兒帶の片布を示す人がそれだ。」  
突然電車の音がしたので、松山氏は立ち上つた。

「何だ反對の方向から來た電車か。」と、夜光時計をながめ、「まだ三十分ある。雨が少し降り募つて來たやうだ。こんな位ならば、近所まで自動車を連れて來て置けばよかつた。十一時まで待つて來ないやうだつたら、すぐ歸らう。」

ちつとして居ては、少し寒いので、散歩しながら待つて居ようと、袂に手をやつて、煙草を取り出すと、その時、むかふから幽霊のやうに歩いて來る人影を認めた。はッとして思はず崑蔭に身を潜め、息を凝して様子をかゞふと、影はだん／＼こちらへ近寄つたので、扱は、約束の人が來たかと、俄かに動悸を高めて眼を剝いたが、意外にもその人影は二つであることがわかつた。

「これはおかしい。」

よく見れば、男と女とである。

二人は無言のまゝ斷崖の端まで行つた。

「お蔭。」

「あい。」

「これがこの世の見納めだ。」

「あい。」

「足の下には、樂な世界がある。」

「あい。」  
「お前を道連れにするのは……濟まない。」  
「……………」

「なあ。」

「いゝえ。」

「それにしても俺は恨むよ。あの……………」

「何度言つても及ばぬこと、もう黙つて死にませう。」

「おう、さうだ。」

男女が飛び込む仕度をしたので、松山氏は飛鳥の如く躍り出して、男の帯をつかみ、無理に引摺りながら、電車道まで来た。

「誰だ、何をする！」といふ男の怒聲。

「あれつ。」といつて従いて走る女の悲鳴。

「まよの落つきたまへ。」と、松山氏は喘ぎながら言つた。「君たちは死ぬつもりだらう。死ぬには深い事情もあらうが、事情によつては相談に乗らうぢやないか。」

僅かな電燈の光りで顔はよくわからぬけれど、男は松山氏の見すばらしい服装を見て、軽蔑した口調で言つた。

「さういふ手前は誰だ。何故、俺達夫婦の死ぬのをとめた。」

「扱は夫婦だつたか。俺も二十年前にこゝで死なうとしたが、急に心を穢して、死んだつもりで働いたのだよ。」

「その働く口がなくなつたのだ。」

「エ？ それでは解雇されたか。」

「さうよ。半月前に松山製鋼所を解雇されたんだ。」

松山氏は驚くと同時に、急に親しみを感した。

「君、俺の顔に見覚えはないか。」

男は顔を近づけたが、

「知らない。」

「よく見給へ。」

「わからない。」

「俺に松山だ。製鋼所の主だ。」

意外な言葉に男は眼を見張つたが、

「ちがふく。松山はこんな服装をして居ない。」

「これには事情があるのだ。落つてよく見給へ。」

男はもう一度見直した。

「やッ、松山だ！ お蔭、これが恨み重なる松山だ。」  
 大声に叫んだかと思ふと。男は鐵拳をふり上げた。

「待て！ 誤解するな！」

松山氏は不意の襲来に辛うじてかう言つたが、次の瞬間頭部に一撃を受けて、どたりと電車線路上にたふれた。男はひざまづいた。

「しまつた！ 殺した。お蔭、松山を殺してしまつた。もう生きて居れん。あゝ、あゝ。」  
 かう叫んだかと思ふと、ばたく断崖の端に駆けて行つた。

先刻から、あまりに意外な出来事に、無言のまま、呆然として傍に立つて居た女房は、この時、  
 「ま、まつて！」といつて後を追ひかけた。

半分の後、二人は断崖から姿を消した。

線路上には、氣絶した松山氏の身體が横はつた。若し二三分の間に息を吹き返さなければ、松山氏も二人と運命を共にしなければならぬ。而も、都合の悪いことには、其處がカーブになつて居て、たとひ電車の運轉手が松山氏を見つけてブレーキをかけても、到底轢殺は免れなかつた。

突然雨の中をゴーツといふ音が聞えた。

あはや松山氏は……

ところが、どういふ運のよいことか、電車は松山氏の身體から數尺離れたところどまつた。運轉手は降りてあたりを見まはしたが、やがて松山氏の姿を見るなり、驚いてかつぎ上げ、電車にのせて再び去つた。

#### 四

ふと松山氏が氣附くと、自分は電車の中のクッションに、運轉手服の男に介抱されて居ることがわかつた。

「お、お氣がつかしましたか。」と、運轉手は、うれしさうに言つて抱き起し、傍のブランデーをコップに注いでのませた。松山氏は聞き覚えのある聲だとは思つたが、まだ眼がぼんやりして居ると、あかりが暗かつたので、よくわからなかつた。

「こゝはどこですか。」

「SF電氣鐵道の終點M驛です。」

「どうも色々御世話様になりました。御蔭で命拾ひをしました。時に二人はどうしましたか。心中の夫婦は？」

「え？ 心中の夫婦？」

「わたしが氣絶して居た。あの斷崖から飛び込まうとしたのです。」  
 「あなたを御たすけした時には、誰もあたりに居りませぬでした。」

「早く人を遣つて、しらべさせて下さい。」

運轉手は立ち上つて出て行つたが、程なく歸つて來た。

「松山さん。私です。御わかりになりませんか。」

言はれて松山氏は、ちつと運轉手の顔をながめて居たが、

「お、あなたは杉田さん。どうしてそんな姿に？」 S F 電氣鐵道株式會社社長杉田氏はにつこり笑つて、ポケットに手をやつた。

「この布片に見覚えがありませんか。」

「お、それではあなたが二十年前の……」

「御約束通りの時間にあそこへ参り、はからずも氣絶中のあなたを御助け致しました。」

松山氏は、あまりのことに暫らく言葉が咽喉につかへた。

「あの時、斷崖で御別れしてから、私は電車の運轉手になりました。それから二十年間、色々苦しい目に逢つてやつと今日の地位を築きました。その記念として運轉手服を保存し、今夜はそれを着て御約束を果さうと思ひました。實は二月前から御交際を願ふやうになつて、若しやあなたが、あの時の人ではないかと思ひましたので今日御招きして、それとなく御様子をおうかゞ

ひ、都合によつては十一時まで御いでを願つて、私の家で約束を果さうかと思ひましたが、第三者に口外せぬといふ約束をかたく御守りになつて御歸りになりましたので、私も斷崖へ行く決心を致しました。かねて、うちの電車が十一時に斷崖を通過することを知りましたので、昔取つた杵柄で、自分で運轉して約束の場所へまゐり、電車をとめてあなたを御捜した譯で御座います。若しさうでなくば、あなたは電車に轢き殺されておいでになつたかも知れません、いやもう、危ないところで御座いました。」

松山氏は、杉田氏の語るのを満足さうにきいて居たが、

「それにしても、二十年前に御目にかゝつた時は、暗くてよく御顔がわかりませんでしたのにどうしてあなたは、私を覚えておいでになつたので御座いますか。」

「そのことですか。斷崖で御別れするときには握手致しましたでせう。その時あなたに拇指のな

いことを知つたので御座います。」  
 言はれて松山氏は右手を出した。が、その時、ふと解雇された職工夫婦のことを思つて、その頬笑みの中に一沫の陰影が漂つた。

### 得意な容疑者

「犯人はその最も得意な時に自己を裏切るものである」  
 福原検事は口癖のやうにかう言ふのであつた。犯人は恐ろしからせて白状させようとするもの時には有効な方法であるけれど、冷血性な犯人は恐怖を興へたぐらゐではビクともしないものであるから、そのやうな犯人に出逢つた場合には、どうしても犯人を得意がらせなくてはならぬ。といふのが福原検事の持論なのである。

が、福原検事がその道の人々から尊敬されて居るのは、かゝる持論の所有者であるといふことよりも、むしろ、心理的探偵法の研究者であることである、心理的探偵法といふのは、もと米國のハーヴァード大學の教授であつたミュンスターベルグ博士が大成した一種の探偵方法であつて、容疑者の取調べに當り、一定の形式に従つてその心理を検査し、犯人であるか否かを判定することである。これには色々の方法があるけれど、福原検事が最も好んで行ふのは、容疑者に向つて、犯行の現場を記述した文章を読み聞かせ、それを再び語らせる方法である。例へば現場の

机の上に白い花瓶があつて、それに百合の花が挿してあつたとする。訊問者はそれをわざと書き違へて、「紅い花瓶に桔梗の花」が挿してあつたと言つて読みきかせる。單にそれだけならば、容疑者に言はせても間違はぬけれども、現場の長い記述の中の一部として書いてあるのであるから、若し容疑者が眞犯人であるならば、現場を目撃してその印象が深く脳裡に刻まれて居るために口述の際、うっかり、「白い花瓶に百合の花」が挿してあつたと答へ、いはば間接に自分の罪を白状するわけである。

福原検事はつまりこの「現場誤記」的心理探偵法が得意であつたのである。さうしてこれま  
 で、この方法を應用することによつて多くの犯罪者を恐れ入らせて來た。もとより、心理的探偵法ばかりでなく、同時に色々な臨機應變的な方法を講じて成功したのであるが、福原検事に取扱はれる容疑者は必ず一度は、心理探偵法を試みられるのであつた、  
 さて、話變つて、こゝに屋島といふ貧乏な大學生があつた。彼はドストイェフスキーの「罪と罰」を読んで、忽ち、ある高利貸を殺す決心をした。屋島は小さい時分から、世の辛酸を嘗めつくして來たために、その先天的の冷血性が近ごろ一層透きとほつて來た。彼が七兵衛と名ける「無情」といふ評判の高い高利貸を殺す決心をしたのは、別に個人的に怨恨がある譯でもなく、また債務關係のあるためでもなかつた。まつたく「罪と罰」の影響を蒙つたに外ならない。が、一たん決心すると、いはばそれが脅迫觀念となつて、目的を果すまでは、苦しめてくならない。



なつた。

もとより屋島は生命を惜んだ。人一倍彼は「生」に執着があつた。だから彼は七兵衛を殺すにしても、自分の生命を犠牲にする氣は毫もなかつた。といつて殺人の嫌疑を他人に向けるやうな手段を講ずるのではなく、ただ自分が殺したといふ證據を残さぬやうにすればよいと思つたのである。

それについては彼は十分に自信があつた。尤もこれまで人を殺した経験はなかつたけれど、自分の冷血性をよく知つて居る彼は、中學生の時分から好んで讀んだ探偵小説の知識を應用すれば、證據を残さずに殺人を遂行するぐらゐ何でもないことだと思つた。

でも、さすがに實行の段になると、色々の豫期しない困難が起つた。七兵衛を道に要して殺すのが一ばん安全ではあるけれど、思はぬ邪魔が発生しないとも限らず、従つて咄嗟にそれに對應策を講ぜねばならぬことになるので、若し計畫どほりに遂行しようと思つたならば、どうしても七兵衛をその自宅に於て殺すより他はないと思つた。

それには七兵衛の家をたづね、七兵衛に逢ひ、さうしてその内部の模様を十分觀察した方が却つて得策であると思つた。で、彼はある日適當な口實を設けて巧みに七兵衛に逢ひ、而も家内の様子を十分さぐつて來たのである。

それから、凡そ二週間、如何に安全に七兵衛の家に忍び入り得るか、如何にして現場に證據を残

さずに七兵衛を殺し得るかを研究して、もう大丈夫といふ自信が出來たとき、ある夜まつたく計畫したとほりに七兵衛を殺して來たのである。

それから數日の間、屋島は到つて冷静に暮すことが出來た。新聞に書かれてある推定犯人の記事を読んで、ひそかに微笑をもらさざるを得なかつた。けれども七日目に、検事局から呼出しを受けたときは、さすがに幾分か興奮せざるを得なかつた。「さうだ、何でもないんだ。自分があの二週間に七兵衛をたづねたので、検事は参考のために自分を呼出したに過ぎないんだ」

かう考へると彼は再び冷静になつて、何の恐れもなく検事局へ出頭することが出來た。

果して、豫期したとほりであつた。が、七兵衛殺しを擔任して居るのが福原検事であると思つたとき、屋島は、警戒せねばならぬと思つた。けれどもその日は福原検事の質問に何の淀みもなく答へることが出來て無事に歸されたのであつた。検事の質問の要點は、何故に突然七兵衛を訪ねたかといふのであつたが、それはかねて用意して置いたとほりに説明して、福原検事を納得せしむることが出來た。

けれども、直感とでも言はうか、福原検事が、どうやら彼に多少の疑をいだいて居るらしいことを屋島は見逃さなかつた。

「きつと、もう一度呼出して、例の心理探偵法を應用するのだらう。よし、それならばこちらにも對應策がある」

かう考へて、彼は又もやいつもの冷静に立ちかへることが出来た。すると、三日目の朝、検事局から呼出しがあつた。

「いよいよ心理検査だな。なに、恐れることがあるものか」

福原検事は、屋島に向つて、至つてやさしい態度で、辯解するやうに言つた。

「あなたを容疑者扱ひにしては濟まんが、犯人が皆目わからないで、事件が迷宮に入らうとしてゐる今日、やむを得ず一應、心理検査を行はせて頂きます」

「どうぞ」屋島は簡単に答へた。

検事は机の抽斗から、一枚の紙片を取り出した。

「これが、七兵衛の殺された現場の記述です。これを読みあげますから、よく聞いて居て下さい。……犯人は縁側から、障子をあけて八畳の座敷にはひつた。天井から垂れ下つた電燈の笠は緑色のカットグラスで、五燭光の球が光つて居た。七兵衛は蝶の模様のついた更紗の蒲團を着て、床の間の方を枕にして眠つて居た。犯人は膝行して枕元に近づいたが、ちやうどその場にあつた煙草盆を左手をもつてわきへ動かし、それから……」

屋島は聞いて居ながら心の中で、笑を禁じ得なかつた。彼は隣りの部屋から襖をあけてはひつたのである。電燈の笠は緑色のカットグラスではなく乳色であつた。又、蒲團は蝶の模様ではなく蜻蛉の模様であつた。たゞ膝行しながら枕元の煙草盆を左手で動かしたのは事實である。

彼は微笑しながらも、検事の觀察推定の鋭いことに驚嘆せざるを得なかつた。さうして「わな」の伏せ方の巧妙なことにも感心した。けれども、要するに、「子供だまし」である。こんなトリックに引つかゝつてたまるものか。

かう思つて彼は謹聴した。検事の記述は更に進行して、愈々殺人行爲のところになつた。それは全く事實どほりであつた。まるで検事がどこかの隅からのぞいて居たのではあるまいかと思はれるほど真に迫つて居た。

さすがに、屋島は當夜の光景を思ひ出して、一種の鬼氣に似たものを感じた。

「だが」と屋島は考へた。眞實が述べられてあれば却つて口述の際に都合がよいではないか」

検事は読み終つてたづねた。

「どうです、わかりましたか」

屋島は一寸返答に迷つた。

「もう一度読みませうか」

その時屋島は考へた。讀んでもらつたよりも、一度書いたものを見せてもらつた方がはつきりと記憶に残る筈である。

「一度それを私に讀ませて下さいませんか」

検事は屋島の顔をぢろりと眺め、暫らく躊躇して居たが、

「御見せしては、心理検査の効果がうすいですけれど……」  
 から言つて、彼はその紙片を屋島に渡した。

「いよ／＼、こつちのものだ」屋島は心で凱歌を奏しながら貪るやうに讀んだ。

それから二十分の後、屋島は讀んだ文句を陳述した。

それは一字一句も間違つて居ないといつてもよいほどであつた。

「實に見事です」と福原検事は言つた。が、「もう歸つてもよい」とは言はなかつた。彼は立ち上つて隣室へ行つたが暫らくしてから歸つて來た。

「實は」と検事は嚴かに言つた。「あなたに心理検査をしたのは他の目的があつたのです。あなたのやうな頭のよい人には心理検査は何の役にも立ちません。實は先刻あなたがあの紙片を貸してくれと言はれたとき、こちらの目的は達したのであります。あなたが言はれなくてもこちらから御渡ししようと思つて居たのです。あなたはあの紙質が特別なものであつたことに氣づかなかつたのですか。あれは指紋をとるに最も適した紙です。今、別室で薬液に浸してありますから、もう暫らく過ぎると、あなたの左手の指紋がはつきりあらはれます。その指紋と、現場の煙草盆に残つて居る指紋とを比較すれば、犯人が誰であるか決定されるわけです」

検事の言葉をきいた屋島は、この恐ろしいトリックにたしかに顔の蒼ざめるのを覺えた。が、ふと理性をとりもどすなり、むら／＼と得意の念が起つた。馬鹿な、そんな用心はとうにしてあ

るんだ。

「は、／＼」と彼は笑つて大聲で言つた。「ちやんとゴムの手袋をはめてやつたんですよ。煙草盆に指紋の残る筈がない……」

はツと氣附いたが最早遅かつた。

「犯人はその最も得意な時に自己を裏切るものである」

数日の後、福原検事は、屋島の例をあげて平素の持論を同僚に語つた。

## 懷疑狂時代

一

都踊だの、嵐山の櫻だの、ドロイイングルームで、歐米人の噂にのぼつてゐる四月はじめのあの夜、西京ホテルを歩き出て、月光を浴びながら、K町通りに向つて行く長髪白面の青年がある。

彼は出入口の廻轉扉を通過する時、五六歳の小兒のやるやうに、しかし、決して戯れではなく、三回も無意味にぐるぐるまはつた。さうして後、玄關に客待ちをしてゐた自動車の運轉手の微笑を尻目にかけ、ツンとした顔をして、わざと強く靴を踏みならした。

二三步行くと、彼は突然立止つて、高い建物を見上げた。

「あの一番上から三つ目のあかるい窓から今に自分の足許に、どさりと人間が落ちてくるかも知れない。それは西洋人だらうか、日本人だらうか、白髪の老翁であらうか、妙齡の美人であら

うか。落ちた瞬間猿のやうな悲鳴をあげるだらうか、狼のやうに沈黙してゐるだらうか。即死するだらうか、負傷するだけであらうか。頭が柘榴のやうに割れるか、足が胡瓜のやうに折れるか、血が瀧のやうに流れるか、それとも出血が少しもないか。その時、自分はホテルのオフィスへ急報すべきか、或は知らぬ顔して逃げ出すべきか。逃げたために告發されるやうなことはなからうか。さうして裁判の結果死刑の宣告……」

ぶるつと身を慄はせた青年は、無意識にあらはれた疑問癖に舌打ちして、鼠色の夏外套のポケットに両手を突こみながら、われとわが身を鞭撻するやうに喧騒な電車通りに出た。

青年の名を鹿星幣助といふ。彼は先刻ホテルの五階の居間で、外出の用意をするため、靴下をはき替しようとしたが、右の靴下を先にはくべきか、左を先にすべきか、それを決するまでに十分ほどかゝつた、漸く身支度を終へ、扉を鎖して廊下に出たが、二三步離れると、扉が自然に開いたやうな気がしたので、また戻つて、鍵をまはした。同じ動作を四回繰返した後、やつと安心してエレヴェーターで降り、オフィスに鍵を預けてさて廻轉扉の前まで来ると、例のごとく一種の不安が胸にこみ上げた。

「果して無事におもてに出られるであらうか。」

から思ふと、彼は半回まはつたゞけでは満足出来なかつたのである。毎度のことであるから下足番はもはや笑はなかつた。

幣助は東京のある富豪の相續人であるが、去年の夏、父を失つてから、高度の神経衰弱にかゝつた。そのため、懷疑狂的強迫觀念に襲はれ、M大學を一年休學することにして、家庭で靜養にとめたが、最近遽に憂鬱になり、ある日、母に向つて、

「お母さん、すみません。この二三日、僕は變な觀念になやまされ通しです。思ひ切つていひますが、どういふ理由か、お母さんを殺したくなるのです。このまゝにして置いたら最大不幸が起ります。どこへでもよいから僕を監禁して下さい。」

母が驚いて、神経病學の泰寸、勝浦博士に相談すると、

「強迫觀念がまた一つ殖えたのです。生活環境をかへさへすればよろしい。舊式な醫者は、山又は海へ轉地療養をすすめますが、私は反對です。」

さうして、勝浦博士の處方したのが西京ホテルだったのである。

一ヶ月ほどのホテル生活にも、母を殺さうとする強迫觀念は去らなかつたが、こゝ數日來、衝動の回數が激減した。といふのは、先夜三條通りのカフェーで、幣助は、然ある不思議な男に逢ひ、その男の珍しい談話に、毎夜出かけずにをれぬほどの興味を感じたからである。

が、このことは、はからずも幣助をして、世にも奇怪な冒険を経験せしめる發端となつたのである。

## 二

幣助は電車通りを南に向つて足早に歩いた。

三條通り烏丸東に入るカフェー・ミニヨン。これが彼の行先である。

舊都の月。春の夜風、數年前ならば、無暗に嬉しい景趣にも、幣助はもはや何の感興も覺えなかつた。月の光。それは地球の衛星の痘痕面に太陽熱をすつかり吸ひとられた光の亡靈ではないか。春の風。それは細菌の胞子と炭酸ガスと馬糞の粉末とを包含する空氣の渦ではないか。かう考へると幣助は、光の亡靈が皮膚の隙孔からダム／＼彈のやうに通過する思ひがした。汚染空氣の渦が毒ガスのやうに呼吸器に迫るを覺えた。で、いよ／＼その歩調を早めたのである。

ふと氣がつくと、足の下が妙にふか／＼して、赤ん坊の腦髓を踏みつけたやうな氣がした。幣助は突然立ち止まり、右足を揚げて靴の底を見た。然し裏革には何も附着してゐなかつた。幣助はそこで試験的に右足を舗石に叩き下した。するとこんどは亡父の焼け残つた齒骨を踏躡つたらしかつたので、驚いて再び足を揚げた。

「いけない／＼。また例の癖が出たのだ。」かう呟くと、恥かしくなり、いつもはシヨウウインドウの硝子に、左の拵指紋を押してある癖が、今宵はそこに輝く窒素球から顔をかくすため、帽子の鐙を引きさげて、頻繁な人通りの間を縫ふやうに進んだ。

「あの人はもう來てるだらうか。」代議士のやうに奇聲を發する電車自動車の交錯を離れて、一刻も早く不思議な男に逢ひたくなつた。二三日前の晩幣助がふとカフェー・ミニヨンに入ると、間もなく一人の男が彼のテーブルに來て馴々しく話しかけた。海底のごとくうす暗い空氣の中で、はつきり顔はわからぬが、四十を越した年輩の、片眼鏡をかけ、口髭を生やした紳士だつた。卵色に泡吹くカクテルの洋盃を前に、紳士は極めて雄辯だつた。その談話はモダン・ボーイを喜ばせる獵奇的なものでなかつたが、偶然にも、神經衰弱者の氣持を解し、近代人の神經異常を説いて極めてロジカルだつた。憂鬱な幣助はそれが無上に喜ばしかつた。自分の心を、姐の上に乗せて解剖される。幣助はそれを有難いと思つた。かくて彼は、毎夜同じ時刻に、善男子が名僧の説法をきくに行くやうに、變な「道場」に通ふことになつたのである。

いまで外出に多少の恐怖をさへ抱いた幣助は、かくて、外出せねば不安を感じるに至つた。やはり病氣のためかも知れない。けれど、幸に、母を殺したいといふ衝動は隅に追ひやられた。

母を殺す！ 何といふ恐ろしい觀念だらう。父が死んで高度の憂鬱性にかゝつた自分は、もし母が死ねば悲歎のあまり必ず自殺するであらう。それなのに、あの、自分を最も愛してくれる、さうして自分の最も愛する母を殺したくなるとは？ とでもわからない。けれども、宿命的な觀念だつた。勝浦博士の處方によるホテル療養も、とてもこの觀念を除けさうになかつた。自分は

もう永久に母に逢へぬかも知れぬ。逢はぬ方がよい。

いつの間にか彼は目的の場所に來てゐた。肝臓色の、がつしりした扉の中央に、白色のローマ字でカフェー・ミニヨンと刻まれてゐた。彼はその時胸鳴りがしたので暫く立ちどまり、さうして盗人のやうに前後を見まはした。

と、向うからあるいて來た一人の婦人。それが母そっくりだつたので、はッとして目を睜ると全く別人であつた。然し幣助は婦人の後姿をぢつと見送つた。途端に彼は肩を叩かれた。

「來ましたね。」

聲かけられて振向けば、他ならぬ片眼鏡の紳士である。

## 三

船室に擬したサルーンに、客は七八人。蓄音器からは、ジャズが送つてゐた。

カフェー・ミニヨンの夜霧のやうな空氣の中を、片眼鏡の紳士は幣助の先にあるいて、いつもの隅のテーブルに腰を下した。

「やつぱり、あなたはコーヒーですか。」

幣助はうなづくと、紳士は女給に何やら小聲で注文して、葉巻に火をつけた。

「酒も煙草ものまぬとは寂しいですね。」紳士は、紫色の煙を吐いた。「煙草と酒は無理にで

ものむべきものです。學説は變るものですよ、カメレオンのやうにね。ニコチンは免疫體の發生を促す作用があるから、インフルエンザなどの流行時には缺くべからざるもの、アルコールは劣悪な生殖細胞を淘汰するから、優良健全な國民をつくるには、最良の手段です。酒と煙草が有害だといふのは常識、常識は中等學校入學試験委員にまかせておくがよろしい、はゝゝゝは。」

紳士は笑つたが、幣助は笑はなかつた。この紳士はそもく何ものであらう。醫學者か、心理學者か、幣助はまだ紳士の名をさへきかなかつたが、もとより尋ねる勇氣はなかつた。たしかに奇妙な存在だとは思ひながら、まさか後に殺人の手引をする怪人とは氣づかず、その赭みがかつた口髭を、眼に据ゑてながめた。

「あなたは憂鬱ですね。」紳士は顔を近づけた。「現代人はみんな憂鬱です。快活に見えるのは快活を擬ふに過ぎないのです。欲望に富んで意志に乏しいから、實行力がありません。そこに懷疑と恐怖とが発生します。」

そのとき女給の運んだ琥珀色の酒を、紳士はうまさうに一口すゝつた。幣助はコーヒーを、すぐには手にしなかつた。

「現代人の意志は干菓子ひまわりのやうに脆く、象皮のやうに麻痺してゐます。太陽の黒點の影響か、後期印象派のせるか。精神分析學者ならば、リビドに持つて行くだらうが原因は何でもよろしい、事實は、」と一段聲をひくめ、「御覽なさい。カフェーの客の顔色を。頬はひからびる、眼は

にごる。げに、懷疑と恐怖以外の何ものでもありませんよ。」

幣助は徐ろに首をねぢむけて、向うの客をぬすみ見た。學生か會社員か、年若い彼等の顔に、生活に疲れた色が明かに讀まれた。

「懷疑と恐怖、現代人にとつては重苦しい負擔です。ところが彼等は却つてそれに陶醉しようとしてます。コーヒー一杯で二時間三時間甚だしきは五時間カフェーの椅子によりかゝる者があります。彼等はコーヒーを口へ持つて行くだけの意志がないのです。しかもそこに彼等の樂みがあるのです。」

幣助はそつと手を出してコーヒーをすゝつた。「意志が麻痺すると、ほかの意志に支配され易くなります、自分の欲することは行ひ得ないで、欲せぬことを行ひます。それゆゑ、現代犯罪の大部分は「思はずも」行はれるのです。新聞で犯罪の記事を讀む、讀んで同じ犯罪を行ふ。これを模倣だといひますが、實は無意識に行ふのです。つまり、犯罪の動機がないのです、理由がないのです。だから、理由を求めるのが間違つてゐます、動機をさがすのがいけないのです。」

幣助は息詰る思ひをした。

「かくて、現代人には、突飛な衝動が起つて來ます。やつてならぬことをやつて見たくなるのです。人を殺すことを極端に恐れながら、人を殺したくなるのです。」

かういつて紳士は、首をすくめて意味ありげに幣助を見つめ、急に聲を落して續けた。  
「あなたは人を殺したいと思つたことはありませんか。例へばあなたの最も愛する戀人とか、  
または、母親を……？」

## 四

この質問に幣助はぎくりとした。焮衝の部位に觸られた氣がして、冷たいものが背筋を走つた。紳士は何故こんなことをいひだしたか。自分が母を殺したい衝動に惱まされてゐることを知つて故意に訊いたのか、又は偶然か。一瞬間耳の底がじいんと鳴つて、いよく返答することが出来なかつた。

「いや尋ねるまでもありません。よくわかつてゐます。誰でも殺人の衝動は起るのです。たゞ頻繁に起るか、比較的稀に起るかの違ひです。いづれも無意識に起るのです。さうしてこれは時代の罪です。個人の罪ではありません。……」

「このやうな強迫観念の起つた時、これまでの醫者は遮二無二抑へつけようとしたものです。けれどもそれは誤りです。その人間の心の奥から發生したものを、その個體を滅しないで刈り取ることは不可能です。換言すれば強迫観念を除くには、その人を殺すより外はありません。」  
紳士は、唇を歪めてにやりと笑つた。幣助は今に退引ならぬ陥し穿に曳き摺りこまれさうな

氣がした。紳士は何の目的で、こんな怖ろしいことをいふのだらう。それを、死ぬほど訊きたかつたけれど、不思議にも舌筋が動作を拒んだ。

「だからです。」と、紳士はのしかゝるやうに、その観念の命ずるまゝに従へばよいのです。あの行爲を遂げたく思つたら、潔く行ふのです。人を殺したくなつたら、人を殺せばよいのです……ひゝ。」

その瞬間幣助は紳士の額に突然二本の角が生えたやうに思つた。はツとして眼を睜るとそれは二條の葉巻の煙だつた。が、幣助はカフェーの、夢に似た空氣の色を見て、自分は今幻の世界に住んでゐるのではないかと思つた。正體の知れぬ紳士は、わが心の奥に巣くつて、機あるごとに自分を惱まし、やつと二三日遠退いてゐた悪魔的観念を、たしかに喚けようとしてゐるではないか。今の悪魔的な笑ひ、少くとも悪魔的の響きを伴つた笑ひ聲は現實のものとは思へなかつた。けれども、エポナイト盤を離れて、耳の中に割こむサクソホーンの音は、夢であるにはあまりにも非ロマンチックな波形をもつてゐた。現實であるとする、この紳士は如何なる陰謀を懷いてゐるか。先日來の罪のない話は、實に自分を釣る一種の餌であつたのか。今や、紳士ははじめその毒牙をむき出したのか。あゝ、この紳士は、無形の網をひろげて蜘蛛のやうに自分を擱にしてしまつたのだ。さうして自分を傀儡として、何事かを遂行しようとしてゐるのだ。

かう考へると、一刻も早く怪紳士から離れたく思つた。けれども蜘蛛の網にかゝつた昆蟲の、



もがけばもがく程不利に陥る運命を、幣助はひしとわが身に感じた。感じると同時に、全身の筋肉は、鰻のやうに硬ばつた。

「顔色を變へましたね。」紳士はあきらかにサデスチックな態度でいつた。「然し、あなたの心を私はちやんと知つてゐますよ。あなたはある人を殺したい衝動に悩んでゐます。おやりなさい。まづ容易なところからはじめなさい。世の中には、死にたいと思ひながら、意志の痲痺したために死に得ない人間が澤山あるのです。それを殺すのですよ。……さあ、これから一緒に人殺しに出かけませう。」

紳士が立ち上らうとすると、幣助はテーブル越しにすがりついた。まさに絶體絶命である。「ま、待つて下さい。」

今夜はじめて搾り出した幣助の言葉にびくともせず、紳士はあはれな神経衰弱者を尻目にかけて、

「ふゝゝゝ、もう駄目ですよ。あなたは完全に私の意志の俘虜です！」

## 五

それから幾分かの後、幣助は片眼鏡の紳士に附添はれ、自動車でいづくとも知れず走つてゐる自分を見出した。

如何にカフェーを連出されたか、如何に自動車に乗せられたか、はつきり思ひ出せぬほど、幣助の受けたショックは大きかつた。漸く心臓の鼓動が正調に復すると、幣助ははじめて殺人を行ふべく急ぎつゝあることを意識した。

殺人！ 思つただけでも骨髄まで慄へることを、家常茶飯のごとく勧める怪紳士は、果して健康な精神の所有者であらうか。もしや自分は一狂人の係蹄にかゝつたのではあるまいか。かう考へて振向くと、紳士はクツションに身を埋め、頬をてらく光らせつゝ、眼を軽くつぶつてゐた。この、憎らしい程落つた態度に幣助はまたもや不安を感じはじめた。

ふと、幣助は自動車の硝子が悉く、黒い漆やうのもので塗つてあることに氣づいた。客席と運轉手席とを境する硝子も同じく黒く塗りつぶされ、外景は勿論、運轉手の姿をさへ見ることが出来なかつた。いふまでもなくこの自動車は特別仕立て、怪紳士の行動はすべて計畫的だつたのである。かう推定すると、不安が募つたばかりでなく、密封の箱に閉ぢこめられたやうな、或は棺に入れて生理めにされたやうな氣がし出して、遂には呼吸困難に苦しむ肺患者のやうに、せいゝ咽喉を鳴らした。

「心配なく、酸素は十分あります。」

突然紳士の聲が走つた。それをきくと幣助は猫の前の鼠だつた。

「まだ相當時間がかゝるけれど、窒息は起りません。」紳士はやをら身を起した。四邊には市中

の喧騒がなく、田舎道を通るのか、自動車は踊るやうに揺れた。「こゝでちよつと、行先のことを話して置ませう。唐突では、まごつくといけませんからね。先刻カフェで話したやうに、死にたいと思ひながら自殺し得ない人間がこの世に土砂のごとく存在します。かゝる輩を掻き集める場所、そこへこれから行くのです。如何にして掻き集めるか、それは秘持に屬するが、そこにはまた當然殺人的衝動に惱む人間も集まつてゐます。前者を甲類とし、後者を乙類とし、乙類のものが甲類のものを殺して、両者が満足する譯で、兩善俱樂部と名づけられてあります。乙類の中には、たまに幾人も殺したい者がありますが、大抵は、一人が一人を殺せば満足するから乙類即ち殺人的衝動に惱む者が拂底で、しかも蒐集に困難です。私は乙類蒐集を擔任し、相當の經驗を積みましたから、近頃は好成績をあげてゐます。」

紳士は、今夜もこの通り一人発見したぞといはんばかりに満足げな微笑をもらした。その微笑は却つて幣助の血液を寒からしめた。一二年前ならば、或はかゝる話にも好奇心をそゝられたかも知れぬが、今はもう息苦しさがあるばかりであつた。

「さて、一たい何のために兩善俱樂部が設立されたかを御訊きになりたいでせう。一口にいへば、人助けですよ。社會奉仕ですよ。犯罪豫防、人口調節、等、等。たゞ殘念なことに兩善俱樂部の存在を公表することが出来ません。もしこれを國家事業とするならば、ローマの全盛期にもまさる黄金時代を現出するだらうが、ファツシヨでさへまだ行つてをりません。して見ると……」

「おや、丁度俱樂部へ着いたやうです。」

「何分、祕密な場所にあるのですから、規則として俱樂部に出入する際は、眼かくしをするこゝになつてゐます。」

ポケットから、黒い布を取り出すが早い、あつといふ間もなく紳士は幣助の顔に巻きつけた。

## 六

幣助はもうすつかり諦めた氣持になつて、眼かくしをされたまゝ、片眼鏡の紳士に手を引かれて、ある建物をくゞつた。それが洋風の建築であることは、足の觸感でわかつた。二三度階段らしいものに躓いて、遂に一間に案内され、眼かくしを取り外された。

部屋は應接室らしく、中央に乳色の笠をもつた電球が垂れてゐた。ファニーニチュアは相當金のかゝつたものらしく、幣助はすゝめられるまゝに、テーブルの傍の椅子に腰掛けた。

「會長に紹介しますから、暫く待つてゐて下さい。」

怪紳士が出て行くと、幣助は恐るゝ部屋を見まはした。窓には紅色のシェードが下されて、おもてを見得ないが、どこかに人聲のする外妙に静かであるのは、市中と思はれなかつた。壁も

悉く紅色で、常ならば愉快な心地を誘はれるかも知れぬが、今は自分の運命がどうなることかと、気が氣でなかつた。

兩善俱樂部！それはまったく信じ得ない存在であつた。兩善とはいふものゝそれはまさしく殺人の別名ではないか。如何に世の中に懷疑狂が多いとはいへ、如何に「合理的」な計畫のもとに組織されたものとはいへ、なほ又、如何に巧に祕密が守られてゐるとはいへ、人間屠殺場が、京都或は京都附近に設けられてあるとは、考へ得ないことであつた。

自分は何といふ馬鹿であつたらう。あの怪紳士は、自分の神経衰弱を利用して、何かある大きな悪戯を行ふつもりかも知れない。かう考へると紳士のこれまでの態度に、どこか諧謔的なところがあつたやうにも思はれ、幣助は、はじめ、あかるい氣持になることが出来た。

ところが、このあかるい氣持も會長に逢ふにおよんで、微塵に打ち砕かれてしまつた。會長は怪紳士の案内で入つて来たが、見ると毬栗頭で、顔一ぱいに髯を生やし、兩眼を準のやうに光らせた様は、かつて西洋の本で見たことのある屠牛場の猶太人そつくりであつた。幣助の身體は、ガスを失つた風船玉のやうに縮こまらうとした。

會長は矢庭に幣助の手をぎゅつと鷲掴みにして、骨の鳴るほどゆすぶつた。握手の禮であるらしい、

「兩善俱樂部に入會して下さつたことを感謝します。」と、髯武者は嚴に宣言した。「會員は

俱樂部の規則を嚴守する義務があります。」それから片眼鏡にむかひ、聊かやさしい口調になつて、「君、今夜は珍しくも鍛冶用の金槌で殺して欲しいといふ甲類會員があつてね、久しぶりに壯快な監督が出来るよ、……おや、この人も乙類會員の常として、少し氣力が挫けてゐるやうだね、控室でブランデーを振舞つてくれたまへ。」

幣助は觀念した。彼は怪紳士に導かれるまゝに、機械の如く動いて廊下に出た。ホテルに似た構造で、奥の方に人々のさんざめく音がきこえたが、紳士は數歩先の左側の扉をあけて入つた。中はカフェー・ミニヨンのやうに薄暗く、中央には食堂に見るやうな大テーブルが置かれ、それを圍んで四人の男が、おの／＼酒盃を前に、黙りこくつてうつむき加減に着座してゐた。彼等はみな幣助と同じ年輩であつたが、挨拶するどころか、眼をあげて見るのさへ物ういらしく、赤い酒はどれも手がつけてなかつた。

紳士は幣助に椅子をすゝめ、カップボードから、洋盃を取り出し、ブランデーを注いだ。「あなたは酒が嫌ひでしたね。けれども俱樂部の規則ですから。」

かういつて紳士は出て行つた。幣助はそこで何をするのかきく氣にもならなかつた。彼はおづおづ先客四人の顔を見較べたが、みな頬がこけて、憂鬱そのものであつた。恐らく自分と同じ乙類會員だらう。さう思つてふと氣がつくと、隣の青年がしく／＼泣き出した。

隣の青年は、暫く啜り泣きを續けたが、あとの三人は振向きもせず、申し合せたやうに黙つてゐたので、幣助は堪へかねて尋ねた。

「何が悲しいのですか。」

青年は口重に答へた。「私の殺人慾はまだ満足されないのです。すると會長はいくらでも甲類會員を供給するといつてくれました。考へても下さい。普通ならば一人殺すも容易でないのに、兩善俱樂部の會員になつたればこそです。この幸福を思ふと感泣せざるを得ないのです。」

青年は涙を拭つて幣助を熟視した。

「あなたはそのためにこゝへ来たではないのですか。」

「何がでもです。あなたはやりたくてならぬでせう。けれどもいざとなれば困ると思つてそんなことをいふのでせう。然し、心配は無用です、一度、殺人の現場を見れば、自分もやりたくてたまらなくなります。それが乙類會員の特徴だと、あの片眼鏡の紳士はいひますが、如何にもその通りです。こゝにゐられる三人の方に訊いて御覽なさい。いづれも實際を目撃して勇氣を生じ

今夜の實行を腕を鳴らして待つてゐられるのです。たゞ、お互に、その欲望を満すまでは憂鬱です。」

突然、隅で電鈴がけたましく鳴つたので、幣助はびくつとした。

と、向う側にゐた男がやをら立ち上つて部屋を去つた。

「あの人はこれから實行に行くのです。」と感泣青年は説明した。「電鈴を合圖に順々に出かけるのです。」この時奥の部屋のさんざめきが洩れて來た。「あの騒ぎは甲類會員です。私たちの憂鬱に反して彼等は快活の絶頂にあります。自殺を企てゝも決行し得ないのを俱樂部入會によつて宿望を果し得るのですから、自ら歡聲が湧くのです。中にはあまりに喜んで、巫山戯半分に死に臨むものがあるので、會長が監督して、眞摯に死ぬやう介錯するのです。會長の容貌には鬼氣が漂つてゐますから、大抵のものはその一喝で肅然とします。然しさすがの會長も片眼鏡の紳士には一步を譲つてゐます。」

「一たい會長の名は何といふのです。片眼鏡の紳士は何ものですか。」

「俱樂部では會長はじめ會員に至るまで、姓名職業は一切尋ね又は語らぬ規則です。」

再び電鈴が鳴つた。

「おゝ、もうはや濟んだのか。」と青年は呟いて立ち上つた。「こんどはいよいよ私の番です。今晚私は鍛冶用の鐵槌をつかひます。規則として使用器具は、甲類會員の希望によることになつ

てゐます。多分あなたは、私のやる現場を目撃なさることです。かういつて、青年は急ぎ足で出て行つた。幣助は残つた二人の先客をチラと見較べたが、彼等は塑像のやうに動かなかつた。それが一層幣助を不安にして、遂には、自動車で経験したとき窒息感に襲はれた。と、その時扉があいて、片眼鏡の紳士が入つて来た。「どうです、少しは氣が落ちつきましたか、それではこれから、規則に従つて、現場を見に行きませう。」

紳士は幣助を引張つて再び廊下に出で、すぐさま右手に折れて、やがて黒い幕の垂れさがつた部屋に入つた。藥劑のほひがかすかにした。そこは文字通りに眞つ暗で、今にも何かに突當たりさうだつたが、紳士は幣助の手を引いて、つか／＼と奥へ歩いた。

二人は立ちどまつた。その時幕をすべらすやうな音がして、突然幣助の胸の高さに三寸四方ぐらゐの小窓があいた。硝子越しにさす光線は幣助の衣服を白く切り抜いた。

「こゝからのぞくのです。」  
紳士は小聲でいつた。

## 八

「しつかり、しつかり、まだこれからあなたは取りかゝらねばなりません。」

四圍の棚に、藥品の罐がぎつしり並んだ一室で、鹿星幣助が、興奮劑を嗅がされながら片眼鏡の怪紳士に介抱されてゐる自分を見出したのは、かの方形の小窓から、人間屠殺場をのぞいた數分の後であつた。

暗闇の中で、厭だといふのを無理に腰を屈めさせられ、やむなく覗き窓に眼を近づけた時、幣助は先づ隣室の廣大なるに驚いた。一見たとへば武術の大道場かと思はれ、床には藍色の絨氈を敷きつめ、壁も悉く藍色で、多分天井にアーケ燈がついてゐるのだらう、部屋全體は、眞晝のやうにあかるかつた。

その廣大な部屋の中心に、ポツンと一脚黄色の肱掛椅子が据ゑられ、年齢四十五六の法衣のごとき白服を纏つた禿頭の男が腰掛けてゐた。横向き加減で顔はよくわからなかつたが、幣助はそれが兩善俱樂部の甲類會員、即ちやがて殺さるべき人であると直感した。白衣の男は興奮の模様もなく、まるで人形のやうに動かなかつたが、瞬きするのは、たしかに生きてゐる證據である。突然、幣助の視野に入つた人影がある。ほかならぬ髯武者會長の嚴めしき姿であつた。會長は多分、覗き窓のある側の壁に近く立つてゐたのだらう、椅子の男の二間ほど前まで進み寄ると、ぴたりと立ちどまつて、ポケットから呼び子笛を取出した。

「ピリ、！」といふ音を幣助はたしかにきいたやうに思つた。と、白衣の男の眞正面の方向から牧師のガウンに似た黒服を纏つた男が長柄の鐵槌を捧げてあるいて来た。よく見るとさつき控室

で感泣した青年である。

あのぴか／＼の禿頭を、あのかち／＼の鐵槌で……ぱツと毆るのか……と、想像する間もなく、黒衣の青年は、颯と鐵槌を振り上げ、つ、つ、つ、と椅子をめぐけて走り寄つた。まさに振下されんとした時。たしか、部屋全體が暗くなつたと思ふが、それともわが眼が眩んだのであらうか、幣助は腦貧血の發作に襲はれて、事件の結末を見届けずに、藥品室に抱きこまれたのである。

紳士は幣助の顔をのぞきこむやうに、

「あなたが殺すべき甲類會員は珍しくも婦人です。彼女はモルヒネを注射して殺してくれと希望しました。規則として毒殺の際には、あらかじめ兎で效力をためし、萬全を期することになつてゐます。死に損じは會長の名譽にかゝはるからです。で、モルヒネ溶液はすでにこの通り用意してあります。效力試験は私がやります。」

紳士は隅の籠から白色の兎を取り出し、固定器にしばりつけた。そして實驗臺上の無色の液を注射器に取り、

「私は今〇、一立方センチメートル取りました。これだけ注射すると、兎は確實に死にます。」紳士は實驗動物の胸部の皮下に鮮かに猛毒を送つた。

「いまに兎は冷くなります。するとこの溶液を五立方センチメートル即ち五十倍注射すればた

しかに人間を殺し得ます。で、これから別に注射器へそれだけ取り取ります。よく見て下さい。……

さあ、これをあなたは、向うの部屋に死を待ちこがれてゐる婦人に注射するのです。」

幣助の躊躇を見て紳士は續けた。「どうしたのです。乙類會員は、みな、一度この現場を見ると、やりたくてたまらなくなるのだが、あなたは變です。愚圖々々すると會長の一喝を浴びますよ。……仕方がない、注射器は私が持たう。……それ、御覽なさい、兎はもう死にました。」

固定器からはづされると、白色の實驗動物は水飴のやうにぐつたりした。突然、扉があいた。

「まだ用意が出来ぬのか。」

唝鳴りこんだ會長の眼は猛獸の如く光つた。

## 九

「注射して——エ、注射して。早く、早く！」

甲高い女の聲が室外に洩れきこえた。

會 長と怪紳士に挟まれて室内に入ると、幣助はそこに、異様な光景を見た。

前の藍色の大廣間と反對に、何もかも白色づくめの、至つて狭い部屋の中央にシングル・ベッドが置かれて、その上に白衣の女が、鉢巻をされ、手足を縛りつけられてゐた。

「注射して——エ、早く！」  
 彼女は三人の姿を見て、狂人のやうにもがきながら、聲を限りに歎願した。  
 「どうです。こんなに希望してゐるのです。捨ておけば飛び出して来て注射を求めるので、やむを得ず縛つたのです。あの通り左の腕を持ち上げてゐます。早くあそこへ注射してやりなさい。」

いひながら怪紳士はモルヒネを盛つた注射器を幣助に差つけた。が、何として手出しが出来よう。

女は頻りに催促した。

俄然、會長の手が幣助の腕をむずと握んだかと思ふと、幣助は木の葉の如くひらくとベッドのそばに引摺り寄せられた。會長は、さも面倒なといはんばかりに、片眼鏡の紳士から注射器を受取り、女の左の上膊にふんりと針を刺した。

「手をお貸し！」

あつといふ間もなく幣助の右手は、致死量のモルヒネを女の皮下に注いでゐた。

忽ち女は化石したやうに靜まつた。幣助はびつしより汗をかいた。

「骨を折らせたよ。」

かうつぶやいて會長が去つたあとから、幣助は片眼鏡の紳士に支へられて死の部屋を出た。紳

士は幣助を俱して、再び藥品室に入った。

「たうとうやりましたね。胸がすつとしたでせう。女も満足です。たしかにもう死んでゐます。

「これは案外容易な業でせう？」

幣助は脳髓が腐るかと思つた。今や彼は疲労の極に達して、口きくことも出来ねば、眼をあいてゐることさへ難くなつた。

「時にあなたにきゝますが。」

暫くの沈黙の後、突然紳士が口調をあらためたので幣助は眼を睜つた。「あなたはあなたが今殺して来た女の顔をよく見ましたか。」

いはれて幣助はぎよつとした。無雑作な鉢巻のために女の顔がはつきり見えなかつたからである。幣助の胸に一團の疑惑が發生した。

「見なかつたでせう。して見ると、あなたは、もしや……もしや……とんでもない人を殺したのではなかつたでせうか。たとへばです。たとへばあなたの最も愛する人、あなたの最も愛する肉親の人を……」

幣助は椅子から飛び上がった。猛烈な不安が早瀬のやうに押し寄せた。彼は紳士の顔を穴のあくほど凝視した。

紳士も立ち上つた。「見てゐらつしやい。もう一度今の部屋に入つて、殺された女を見てゐら

つしやい。身内の人ではないかどうかをたしかめて來なさい。もとくあなたも身内の人を殺したがつてゐましたから。」

幣助は無形の繩で手繰り寄せられるやうに白い部屋に入った。そこには鉢巻をされ、縛られたまゝの女の死骸がまばゆく横たはつてゐた。

幣助は不思議にも恐怖を忘れてつか／＼とあゆみ寄り、顔に垂れた鉢巻の布片を除いた。

おゝ！そこには、そこにはまさしく、一ヶ月前に別れて來て、東京にゐる筈の母が、今はもう氷のごとく冷たくなつて……。

二度ならず三度、三度ならず四度、幣助は死體の顔をあらためた。夢でなくまぼろしでなく悲しくも、その死が……彼の最も恐れた事實が、嚴然としてあらはれた。

「あ——つ。」

幣助は全身がとろけるやうに覺えて、その場にくづ折れた。

## 十

ふと幣助が目覺めると、ベッドの純白のかけ布に、朝日らしい光線が硝子窓から、さしこんでゐた。彼はむくりと起きて、あたりを見まはしたが誰もゐなかつた。満開の櫻を點綴する田舎の風景が、窓越に眼に入つた。

幣助は考へた。彼の頭は、昨年の夏以來經驗したことのないほど軽く覺え、同時に空腹を感じた。が、その時突然記憶に甦つた夜前の恐ろしい經驗は彼の心を占領した。

カフェー・ミニヨンの怪紳士——兩善俱樂部——殺人現場の目撃——モルヒネ注射——母の死體——彼ははつとして色を失つたが、果してこれ等が現實の出來事か、或は全然夢なのか、にわかに判断がつかかなかつた。けれどだんだん考へて行くうちに、すべてが事實なることを認めねばならなかつた。

母の死！何たる意外な、何たる恐ろしいことであらう。然し幣助は、それを冷靜に迎へ得るだけの餘裕が、心に生じたことを知つて、不思議に感じた。さういへば今までの脅迫觀念が影をひそめ、父の死以前の精神状態にかへつた氣がする。これはまさに奇蹟的な變化といはねばならぬ。けれど、けれど、果してあの時自分は母を殺したであらうか。かう考へると、幣助の心に新たに健全な疑問が頭を擡げた。彼は先づ自分がいま何處にゐるかを確かめようとした。

突然、罪があいて、五十前後の容貌魁偉な紳士が入つて來た。

「お、勝浦博士！」

幣助は思はず叫んでベッドを離れようとした。

幣助は西京ホテルを處方した東都の神經病學泰斗はつか／＼と歩みよつて、「靜かに、そのまゝに。氣分は如何です。」



幣助はそれどころでなかつた。

「どうして先生は？ 一たいこゝは何處です。」

「嵯峨ですよ。オリエンタル・キネマ會社撮影所附屬の寄宿舎です。」

幣助は、臆げながら事情がわかつて來た。さては兩善俱樂部といふのは……

「先生、私はたしかに母の死體を見たやうに思ひますが？」

博士は暫く幣助の顔を見つめて、

「さうです、お母さんは逝去されました。」

「え、え、それは？、それでは私が母を殺しましたか。」

博士は返答の代りに、扉の方に向つて、大聲に「鷺山君！」と呼んだ。聲に應じては入つて來

た人を見るなり幣助ははツとした。片眼鏡の紳士！

「鹿星さん、京都のK大學精神科教授鷺山博士を紹介いたします。」

怪紳士、いな、鷺山教授はにつこり笑つて近づいた。「どうも昨夜はいろく失禮しました。

すべては勝浦博士の計畫に従つたのです。兩善俱樂部の會長は附鬘をした教室の助手、會員たち

は皆オリエンタル・キネマ會社專屬の俳優諸君、藍色の部屋は撮影室、その他は現像室薬品室な

ど、白い部屋の女は精神科のモルヒネ中毒患者を借りて來たもので、彼女は致死量の毒にたへ、

數時間注射しないとあのとほり狂暴になるのです。」

「それでは、その患者と、母の死體をすり替へたのですか。何のために私はあの恐ろしい冒険を、餘儀なくされましたか。」

「それは私が説明します。」と勝浦博士。「實は先日あなたのお留守中にお母さんが、インフル

エンザ肺炎で逝去されました。病革まつた時、私を招き、幣助は父の死が原因である難病を起し

たから、今又妾の死をきけば自殺するかも知れぬ。鹿星家が斷絶してはならぬから、如何なる方

法を講じてども幣助の自殺せぬやう妾の死を告げてくれとの頼みでした。そこで私は母上を殺し

たといふあなたの強迫觀念を治療し、同時に母上の死を告げようと、一石二鳥の計畫したので

す。母上の骸を氷詰にして西京に移し、鷺山教授に謀つて萬事奔走してもらひました。その結果

幸に目的を達し、あなたは高度の神經衰弱から解放されました。たゞ母上の死は愁傷の至りで

す。」

幣助は答へに迷つた。と、鷺山教授は片眼鏡をはづして、「これが、勝浦博士考案にかゝる、

神經衰弱の刺戟療法です。」

白痴の智慧

魚釣り

塚原俊夫君が、魚釣りを好むことは、これまでまだ一度も皆さんに紹介しませんでした。俊夫君は、嘗て動物學を修めたとき、ことに魚類の解剖と生理とに興味を持ちまして、それと同時に魚釣りも大好きになつたのであります。近頃では、むつかしい事件を依頼されると、わざわざ魚釣りに出かけて考へをまとめることもありましたが、多くの場合は、半日か一日を面白く遊んで頭腦を休めるために、魚釣りに出かけるのでした。

魚釣りの場所は、言ふ迄もなく東京の郊外ですが、これといふ定まつた所へは行きませんでした。時としては二里も三里も離れたところへ行くことがありまして、いつの場合にも私がその御供を仰せつかつたことは申すまでもありません。私も小さい時分から魚釣りが好きですから、いつも喜んで御供をしました。

ある日、私たちは、久し振りに、東京府下××村の方面へ鮒釣りに出かけました。それは柿の實が漸く色づきかけた十月半ばの、小春日和ともいふべき暖かい日でした。私たちは午後の陽光を浴びながら、釣竿を擔いで色々の話に笑ひ興じ、元氣のよい歩調で野道を歩いて行きました。すると先方から一人の巡査が佩劍を光らせ、今一人洋服を著た紳士と連立つてこちらへ歩いて來ました。が、洋服の紳士は私たちを見るなり、にこりと笑つて、

「やあ、俊夫君ぢやないか？」と言ひました。見るとそれは「P叔父さん」即ち警視廳の小田刑事です。

「これや、よい所で逢つた」と小田さんは立ちどまつて言葉を續けました。

「實は、今日これから君のところを訪ねようと思つたんだ」かういつて傍の巡査を顧みて、何やら小聲で相談し、更に俊夫君に向つて言ひました。

「實はこの村に殺人事件が起つて、有力な犯人と目星をつけて居た男を逮捕して見ると、それがどうやら犯人ではなさうなので、みんなが困つてしまつたんだ。君一つ働いてくれないか？」

俊夫君は魚釣りに來たことなど、すつかり忘れてしまつたと見え、言下に「よろしい」と返事をしましたので、小田さん達は道を引返し、私たちを案内してやがて四人は村の駐在所へ參りました。小田さんは連立つて居た駐在所詰めの巡査は、俊夫君に向つて次の如き事件の顛末を語りま

した。

この村には山田留吉といふ生れ乍らの白痴があるのださうです。留吉は今年十五歳ですけれども其智慧は三歳の小兒にも劣て居ります。然し神様は、彼に智慧を與へる事を惜みたまう代りに、彼の五官器のうちのあるものを、普通の人間よりも遙かに鋭敏ならしめたまうたのであります。即ち留吉の眼は猫よりも鋭く、又その鼻は犬よりも敏いのであります。その上彼は筋肉にも頗る恵まれて居りまして、一口にいへば、狸々のやうに強かつたのであります。彼は人間の話す言葉を解することが出来ぬと同時に、人間の使ふ言葉を話すことが出来ませんでした。従つて彼は、顔や形こそ人間ですけれど、その性質はむしろ動物に近いといつた方が早わかりであります。

村の人はそれ故、彼を指して「人間の猫」だといひました。東京に近い地方であり乍ら、村の人たちは可なり迷信深く、彼の生れたのは、彼の祖父が猫を殺した祟りだと解釋しました。實際、彼は鼠こそ捕りませんでした。魚の姿を見ると、その魚が誰の手にあつても、すぐ飛びかゝつて行つて奪ひ取り、生のまゝ、むしゃく／＼食べるのでした。たま／＼、彼の家の前を、魚を携へて通るものがあると、それを嗅ぎつけて、家の中から走り出し、あつといふ間に盗つて行くので、村の人々は、魚釣りの歸りなどには決して彼の家の附近をとほりませんでした。なほ又、彼

は二三日魚を食べないと、たとひ雪の降る日と雖も、川の中へ飛び込んで、巧みに魚を捕へて來ては貪り喰べました。

魚を携へて近寄らぬ限り、留吉は決して村人に害を加へませんでしたし、又、別に性の悪い、たづらもしませんでしたから、村人は、どちらかといふと、彼の薄運に同情して居りますが、さりとして誰一人彼を可愛がるものはありません。然し乍ら彼は、村人に可愛がられない代りに、その母親によつてこの上もなく可愛がられました。彼の父は彼の七歳の時病死しましたので、母親は一人子の留吉を杖とも柱とも思ひましたが、留吉は母親の強烈な慈愛をも、まるで感じないかのやうに暮しました。

「わたしが死んだら、留吉はどうなるだらう。決してわたしは留吉より先へ死んではならぬ」といふのが、ことし四十五歳になる母親お豊の平素の願望でありました。家は相當の財産もあつて、女中や作男は置きませんでした。村の人に田を作らせて取る年貢米は母子二人の生活を支へるに十分でありましたから、瓦葺の小じんまりした家に、二人は比較的平和な日を送つて居たのであります。

ところが、母親お豊の平素の願望は、今より二週間ほど前、彼女の非業の死によつて微塵に碎かれました。即ちあるの夜、彼女の家に何ものかゞしのび入つて、彼女を絞殺して去つたから

であります。

最初、變事を發見したのは、市さんといふ村の遊び人でした。市さんは長らく東京に居ましたが、最近郷里へ歸つてぶら／＼遊んで居るのでした。東京で何をして居たのか誰も知りませんが、自分ではある呉服屋の番頭をつとめて居たところ、最近少し呼吸器を害したから、静養を歸つて居るのだと申して居るさうです。然し、一見したところでは呼吸器の悪さうな顔もして居ないさうで、天氣さへよければ、朝早くから魚釣りに出かけることにして居たのです。

その朝、例の如く市さんが、釣竿をかついで、留吉の家のそばをとほりますと、いつもその時間には開いて居る筈の雨戸が、その日に限つてしまつて居りましたので、不審に思つて、裏の方へまはつて見ますと、裏口の戸があいて居たので、暗い中をのぞきこむやうに頭を差し入れますと、魚籠のにはひを嗅ぎつけたと見えて、留吉が中から走り出して來ました。留吉は妙な唸り聲を出して魚籠の蓋をあけましたが、空であつたから、がっかりした様子でした。然し、市さんは留吉の様子は何となく變に思はれたので、奥の間へはひつて行くと、表の雨戸の隙間から來る光線で、母親お豊が、蒲團から身體を半分ほど乗り出し、頸に手拭を巻かれて横つて居るのが見えました。手を觸つて見ると、最早冷たくなつて居たので、アツと驚いて走り出し、取り敢へず村の駐在所に急を報じたのです。

直ちに電話で、この駐在所の管轄されて居るB署に急が報せられると、B署から、探偵と警察醫とが駆けつけました。取り調べの結果、お豊は前夜十一時頃、絞殺されたもので、お豊の寢室にあつた箆の抽斗が一つ残らず開けたまんまになり、その内容が攪き亂されて居るところを見ると、殺害の動機は窃盜であると察せられました。お豊の家は四間から成つて居て、お豊は佛壇の置いてある座敷を寢室として居ましたが、その隣の納戸には、留吉の寢床が敷かれてありました。頸に巻きつけられて絞殺に使用された手拭の他には、これといふ犯人の手がゝりはなく、家の周囲を見ても、近ごろ一かう雨が降らぬので足跡などを發見することが出來ませんでした。又、その後に行はれた屍體解剖の結果も、絞殺といふことを確めることが出來たばかりで、何の手がゝりをも與へませんでした。

ところが、幸ひにも、たつた一つの手がゝりである手拭が、村人の證言によつてこの村の無頼漢で獨り者の信次郎の所有であるとわかつたので、警官達が時を移さず信次郎の逮捕に向ふと、彼は早くも風を喰つて逃げた跡でしたから、愈よ犯人は信次郎にちがひないといふことになり、諸方へ手別けして捜査したのですが、彼の行方はとんと不明でありました。

すると、お豊殺害の日から十二日を経た一昨日の朝、行方を晦まして居た信次郎が、飄然として歸つて來たのであります。彼は四十前後の人相の悪い男です。巡査は直ちに彼を引張つて來ましたが、彼は驚いて何事も知らぬと辯解しました。然し、手拭を見せると、たしかに自分のもの

だが、いつ落したか知らないと申しましたので、巡査が事情を告げると、彼は兇行の行はれた日の夕方、千葉の舊主人の病氣を見舞に行つたが、案外重かつたので家人に留められるまゝに滞在した旨を語りました。そこで、昨日、警察の手によつて、彼の滞在した先を取検べると、果して彼の言葉通りで、兇行の夜には彼がこの村に居なかつたことがわかりました。

さあ、そこで事件は迷宮にはひつてしまつたのです。死骸は焼かれてしまつたし、留吉の家の何の證據があるでなし、何ともはや手のつけやうがないので、たうとう警視廳から小田刑事が出張されたのですが、小田さんも事情をきいて、とても自分の手では解決がむづかしいと思はれたので、俊夫君に依頼しようと思はれたところへ、私たち二人が行き逢つたといふ譯なのです。

俊夫君は、巡査の語るあひだ黙つて聞いて居りましたが、やがて、

「白痴の留吉はどうしましたか？」とたづねました。

「お豊さんの従妹に當る人が、留吉の家へ来て世話をして居ます」と、巡査は答へました。

「あなたがたは留吉を訊問しましたか？」と、更に俊夫君はたづねました。

巡査は驚いたやうな顔をして俊夫君を見つめながら、

「人間の言葉がわからぬのに、訊問が出来ますものか」と答へました。

俊夫君はにやりと笑ひました。さうして、

「だからいけませんよ。留吉を訊問しないで、どうしてこの事件が解決つくものですか」と、

事もなげに言ひました。

小田さん始め私たちは呆氣にとられて、俊夫君の顔を見つめました。

消えた證據

暫くして小田さんは、

「それでは君は白痴を訊問するのか？」

とたづねました。

俊夫君は意地悪さうな笑ひ方をしました。

「さうでないですよ。白痴の家で行はれた犯罪なら、白痴が知つて居る筈だといふだけです。それよりも先づ絞殺に用ひられた手拭を見せて貰ひませう」

白痴山田留吉の母お豊の絞殺された手拭はB署に保管されてありましたので、小田刑事と駐在所巡査とは、俊夫君と私とを案内して半里程隔つたB署に連れて行つてくれました。私は不要になつた二人分の釣道具を擔いで歩きながら、俊夫君がこの事件をどんな風に探偵するであらうかと色々考へました。手拭の持主たる信次郎は有力なる嫌疑者として逮捕されたけれども、殺害の行はれた時には村に居なかつたのですから、彼は犯人ではありません。して見ると、誰か彼の手拭を拾つてお豊を殺し、彼に疑ひのかゝるやうに計畫したのか、或は信次郎の手拭をお豊が持

つて居て、たゞ犯人がそれを使用したのだつたに過ぎないかも知れません。いづれにしても信次郎が犯人でないとなつて見ると、誰に疑ひをかけてよいかわからぬので、警察の人がはたと當惑したのは無理ありません。この上はその手拭を検査して何かの手がかりを得るより外はないが、果して俊夫君がみごとに手がかりを發見することが出来るだらうか？ と私はひそかに胸を躍らせながら、B署の門をくぐりました。すると、その時、一人の男が、署の中から急ぎ足で出て來ました。田舎者らしくない風采をした彼は、俯向き勝に私たちのそばを通り過ぎやうとしました

が、その時私たち一行の中の巡査は、

「市さん、御苦勞だねえ」と聲をかけました。男は顔を上ましたが、何となく落つかぬ様子をして何やら口の中で返事をしながら逃る様にして去りました。

「あれが、お豊さんの殺されたのを最初に發見した市さんです」と巡査は小田刑事に向つて告げました。小田さんははたぐうなづいたのみでしたが、俊夫君は立ちどまつて男の姿の見えなくなるまで見送つて居りました。

やがて私たちはB署の應接室で署長に面會しました。小田さんは署長に俊夫君を紹介し、兇器として使用された手拭を貸してもらひたいと申出ました。署長は、よく肥つた、赧顔の氣の短か

さうな人でしたが、快く承諾して、ベルを押し一人の巡査を呼んで言ひました。

「君、訊問室の僕の机の右の抽斗に、例の手拭が入れてあるから持つて來てくれたまへ」

巡査はうなづいて出て行きましたが、暫らくすると歸つて來て、

「署長、抽斗には手拭がありません」と告げました。

「なにツ？」と署長は驚いて出て行きましたが、それから五分たゞぬうちに署内は大騒ぎになりました。

唯一の物的證據であつた手拭が紛失したのであるから、警察としては大失策といはねばなりません。署長の話によると、信次郎が犯人でないとかわかつたので、更に先刻、兇行の最初の發見者たる市さん呼び寄せて訊問し、市さんに説明を求めると、手拭を出して色々たづねたのであるから、今から十五分前までは手拭がたしかにあつた筈だとの事でした。署長は非常に狼狽して市さんが盗んだかも知れぬと言つて、市さんの後を追はしめて、市さん呼び戻し、身體検査をさへ行ひましたが、遂に手拭は發見されませんでした。

「署長さんはたしかに手拭を右の抽斗に御入れになりましたよ」市さんは身體検査が済んでから申しました。

市さんをかへしてからなほ署長は念のために、机の抽斗やその他のところを捜しましたが、手拭はたうとう見つかりませんでした。して見ると、警察署の内部の人が盗んだのか、或は外から

盗賊かはひつて盗んで行つたのかも知れません。然し、果して手拭が盗まれたとすると盗人は何の目的でそんなことをしたのでせうか。警察の人を困らせるための單なるいたづらでせうか。或はもつと重大な理由があるのでせうか。いづれにしても署長は、手拭を失つて非常に恐縮し落膽しました。俊夫君はその姿を見て同情したと見え、

「署長さん、手拭のなくなつたことを心配してはいけませんよ。手拭が盗まれたので却つて事件の手がかりが出来ましたよ」と申しました。

署長はびつくりして俊夫君を見つめ、「ど、どうしてですか？」とたづねました。

「手拭を盗む者は犯人より外にないぢやありませんか。だから、犯人は、高飛びしないでこの附近のどこかに居るといふことがわかります」

「でも、その犯人が誰だかわからぬぢやないですか？」

「さうですよ。だからこれから犯人が誰だかを探偵しようといふのです。信次郎はまだ拘留してあるでせう？ 一寸逢はせてくれませんか？」

犯人嫌疑者の信次郎は、無頼漢と評判されて居るだけに、あまり人相のよい男ではありませんでした。俊夫君は信次郎が連れられて来るなり、じつと彼の顔を見つめて居りましたが、暫らく

して徐にたづねかけました。

「信次郎さん、お前さんはこれまで度々お豊さんの家へ行つたことがあるかね？」

「畑の耕作に頼まれて、時々出入りしました」

「あの手拭はお豊さんの家へ忘れて来たのではないかね？」

「いゝえ、ちがひます。もう長いこと伺ひませんし、たしか先月の御祭のとき迄はあの手拭を持つて居たと覚えてゐます」

「ふむさうしてお祭からこちらへは、お豊さんの家へは行かなかつたのだね？」  
信次郎はうなづきました。

「お祭の時には、村の人たちと集つて酒でも飲んだかね？」

「えゝ、すつかり酔つてしまひましたよ」

「その時は村中の人が集つて居たかね？」

「いゝえ、祭の組は五つに別れて居るのです。私たちの組は二十軒ばかりです」

「すると二十人ばかりの人が集まつたのだね？ 集まつた人は誰々だからわかつて居るかね？」

「わかつて居ります」

「お豊さんのうちには、その組へはひつて居るかね？」

「はひつて居りません」

「何といふ人の家が祭の宿だつたね」

「市さんのところでした」

俊夫君は暫らく腕を組んで考へました。

「市さんはお豊さんのうちへは折々訪ねて行く様子だつたかね？」

「さあ、それはよく存じません」

「もうよろしい。よく聞かせてくれました」

信次郎が去ると、俊夫君は署長に向つて言ひました。

「署長さん、もう信次郎は放免してもよいではありませんか？」

「無論今日はかへすつもりです。で、犯人の見込はつきましたか？」と署長はこの小さい探偵の姿を好奇心をもつて見詰め乍ら言ひました。

「まだわかりませんよ。先づ、御祭の時に信次郎と一しよに集つて酒をのんだ連中を調べねばなりません」

「然し、何の證據もないのに、二十人から調べたところが、何にもならぬぢやありませんか？」と署長は反問しました。

俊夫君はにこりと笑ひました。私たちは俊夫君が何を言ひ出すかと、固唾をのんで待ちかまへました。すると俊夫君はいつもの通りの快活な口調で語りかけました。

「云ふまでもなく、今度の事件では何一つ物的證據といふものはありません。たつた一つの證據は先刻盗まれてしまひました。だからかうした事件には顯微鏡も試験管も何の役に立ちません。若し手拭が盗まれずに居たら、僕は手拭の塵埃を集めて檢べるつもりでしたが、今は却つてその面倒もなくなりました。どうせ手拭を檢べたところが恐らく何の手がよりもありますまい。若し手拭に手がよりがありさうならば、何を差措いても、捜し出さねばなりません、その必要がないから僕は打ちやつて置くのです。然し手拭の盗まれたといふことは手拭そのものよりも、遙かに尊い手がよりを興へてくれました。前に御話したやうに、それによつて犯人がまだこの附近に居るといふことがわかります。兇行後二週間も過ぎて居るのに、まだ逃げなかつたといふことは、犯人が決して自分に疑ひはかゝらぬものと安心して居た證據です。つまり、眞犯人は信次郎が犯人とされるにちがひないと思つて居たのです。ところが犯人は信次郎でない判り、再び手拭が別の意味での證據物件となつたので、犯人はまんまとそれを盗んで行きました。それ故犯人は又もや安心して、何處へも高飛びはしなれないと思ひます。犯人が高飛びしなければつかまるにきまつて居ります。科學探偵といふ仕事は、物的證據を科學的に檢べるばかりが能ではありません。犯人を科學的方法でつかまへるのも科學探偵中の重要な部分です。だから僕は、今回の事件で、犯人の科學的逮捕を試みようと思ふのです」

私たちは、皆俊夫君のいふことをよく理解することが出来ませんでした。



「科學的逮捕とはどんなことをするものかね？」と小田刑事はたづねました。  
 「手拭を盗んだのは、この署内の人が又は信次郎と御祭の時に一しよに酒を飲んだ連中のうちにあるにちがひありませんから、それ等の人を集めて、科學的に犯人を選び出すのです」

「どうやつて選び出すのかね？」

「俊夫君は狡猾さうな笑ひ方をして、大聲で云ひました。」

「白痴留吉の智慧を利用するのですよ……」

科學的逮捕

私たちは、あまりの意外に、黙つて俊夫君の顔を見つめるだけでした。

「だつて俊夫君、留吉は物を言ふことさへ出来ぬぢやないか？ 年齢は十五ださうなが、その智慧は三ツ兒にも劣つて居るさうだよ」と漸く小田さんが口をききました。

「けれどPの叔父さん、白痴でも人間の子ですよ、犬や猫とはちがひます。とに角、これから、留吉に逢はうと思ひます。案内して下さい」と俊夫君は申しました。

再び、小田さんと、駐在所の巡査に案内されて、私たちは留吉の村に引き返しました。俊夫君は途中の魚屋で三寸ほどの鮒を一疋買ひ、それに新聞紙を幾重にも巻き、外から少しもにほひのせぬ迄包んで、ポケットに入れました。

留吉の家についた時は秋の日は暮れかゝつて居りました。四十ばかりの女の人が私たちを出迎へましたが、それは死んだお豊さんの従妹に當るお安さんといふ人でした。留吉はその時、どこかへ遊びに行つて留守だったので、俊夫君は、先づ兇行のあつた室を始め家中をざつと検査しました。と、その時、留吉がひよつこり歸つて來ました。白痴に特有な蒼白い無表情な顔でしたが、年の割には幾分老けて見えました。彼は私たちの姿を見るなり、怪訝さうな眼付でぼんやり立つて居ましたが、やがて何思つたか、疊の上へあがつて來ました。これを見た俊夫君は、ポケットの包を取り出し、それを右手につかんで、だん／＼彼の方へ近よつて行きました。

すると、俊夫君と留吉との距離が凡そ二間ほどになつた時、留吉は急に鼻を蠢かしかけたが、いきなり猛烈な勢で俊夫君に躍りかゝつたかと思ふと、アツといふ間に新聞包を奪つて逃げて行きました。俊夫君は黙つて笑ふだけでした。

「Pの叔父さん、これで留吉の訊問はすみしましたよ」と俊夫君は申しました。

「え？ けれど留吉は逃げてしまつたぢやないか？」と小田さんは呆氣にとられて言ひました。

「逃して行つてもかまひません。今の訊問で留吉の智慧は充分わかりましたから、この上は彼の智慧を借りて犯人を捜し出すばかりです」

「どうして捜し出すのかね？」

「それでは、こゝで、その手順を申しませう」かう言つて俊夫君は駐在所巡査の方を向いて言つた。

「あつての晩、この家で、東京の俳優にお芝居をさせようと思ひます。さうしてこの間のお祭に信次郎と一しよに、市さんの家で酒をのんだ二十人ほどの村の人に、見物に来て貰はうとおもひます。で、どうか御苦勞ですが、皆さんに十時頃にこの家へ集まつて貰ふやう言ひ傳へて下さいませんか。それから」と、お安さん呼びよせ、

「留吉にはあつての夜まで、一疋も魚をたべさせないやうにして下さい。きつとですよ」

俊夫君は更に、小田さんに向ひ、

「どうも色々御苦勞様でした。これから東京へ歸りがてら、明後日の夜の手順を相談致しませう」

俊夫君が道々話したところによると、芝居といつても、普通劇場で行はれて居るやうなものではなく、二人の役者に、お豊さん殺しを演じさせるといふのでした。即ち、一人をお豊さんに扮装させ、今一人を曲者に扮装させて、なるべく、お豊さんの殺された時の光景に近い状態を實演させようといふのでした。俊夫君の説によると、人間の死ぬ刹那には、人間の靈魂は第一に愛するものゝところへ行くから、白痴はきつと母親の殺されたときに眼をさましたにちがひなく、従つ

て恐らく犯人の顔は見たにちがひない。けれど残念なことに彼はそれを口に出すことが出来ないのである。そこで今、彼の前で當夜の光景を再演したならば、きつと犯人を思ひ出し、二十人のうちの誰かに飛びかゝつて行くにちがひない。さうすれば、その飛びつかれた男が犯人であるといふのでした。

小田さんも私も、これをきいて平素の俊夫君に似合はぬことを言ふなと思ひました。何となれば、俊夫君はこれまで靈魂の存在を信じて居ないからでありまして、科學的には分で實證し得ないものは決して信じないといふのが俊夫君の口癖です。だから俊夫君がかやうなことを言ふには、何かその理由があるにちがひありません。で、小田さんは俊夫君の言ふ儘に二人の適當な俳優を雇つてくれました。

翌日、二人の俳優が私たちの實驗室を訪ねて來ました。俊夫君は、留吉の家の繪圖を書いて、芝居の行はれる場所を説明し、扮装その他實演事項について委しい注意を與へました。

愈よ當日が來ました。私たちは小田刑事と二人の俳優と共に夕方から、留吉の村に自動車で駆けつけました。俊夫君は小さな手鞆の中へ、紙で嚴重に包んだものを入れて携へました。

最初駐在所をたづね、それから巡査と共に留吉の家に行きました。それは八時頃でした。お安さんは快く出迎へてくれました。留吉は二日間魚を食なかつたゝめか、元氣がなく、奥の間

に寝ころんで居りました。追々村の人が集まつて来ました。彌次馬も来たやうですけれど、巡査の爲に追かへされてしまひました。十時頃、豫定の人數はみんな揃ひました。みんな、面白い狂言でも見せて貰へることと思つて居るやうでした。ことにかの、お豊さんの死體を最初に發見した市さんは一杯機嫌でやつて来て、東京通のこととて、色々東京の芝居の話などをみんなに聞かせて居りました。

俊夫君は、村の人を、土間と座敷との中間に位する室に、半圓形に一列にならべ坐らせました。それから、座敷即ち兇行の演ぜられた室に、寢床を敷いてもらひました。人々は、いづれも意外な面持を致しました。寝ころんで居た白痴留吉は、澤山の人の集まつたのに多少興奮したのか、その邊を歩き廻つて居りました。

十時半になつたとき、俊夫君は村の人に向つて言ひました。

「皆さん、よく集まつて下さいました。今夜集つて頂いたのは外ではありません。皆さんにお豊さん殺しの犯人を逮捕する手傳ひをして頂きたいと思つたからです。丁度今はお豊さんが殺された時刻ですから、これからお豊さん殺しの芝居をやつて、留吉に見せようと思ふのです。さうすれば、お豊さんの一念が留吉にこもつて居るのですから、留吉はきつと犯人を見つけ出すだらうと思ひます。よもや皆さんの中に犯人があらうとは思はれませんが、兎に角一度ためして見ますから、どうかお静かに御覽を願ひます—」

あたりは水を打つたやうに、しいんと静まり返りました。やがて留吉はお安さんと共に、俊夫君の指圖によつて、座敷の手前の右隅に坐りました。それから、俊夫君はお豊さんに扮装した俳優を蒲團の中へ寝かせました。薄暗い電燈の光に照された寢姿は、お豊さんが生き返つたのではないかと村人に思はせたと見え、村人はいづれも固唾を呑んで見つめました。俊夫君と私とは村人の列の後ろに陣取り、小田さんと巡査とは土間に下り立つて警戒しました。障子その他の建具は無論取りはずしてあります。

間もなく柱時計が寂しい音をたて、十一時を報じました。と、その時、納戸の方から、黒い布で覆面した一人の曲者が、一本の古手拭を手にさげて、みしりく歩いて來ました。彼は鬨のところで暫らく立ちどまつて考へて居ましたが、やがて膝を折つて、お豊の枕元の方へ近寄りました。さすがの留吉もぢつと、その方を見つめて居りました。村人は、一生懸命に、いはゞ我を忘れてこの眞に迫つた演劇を眺め入りました。

枕元まで近寄つた曲者は、蒲團へ手をかけたかと思ふと、ぱつとそれをはねのけました。と、その時、お豊さんは「アレー」と一聲、逃げ出さうとしましたが、曲者はとびかゝつて手拭で手早く頸を絞めましたので、お豊さんは、蒲團の外へ半身をのり出し、どたりとたふれました。

その時です、白痴留吉は何思つたかくりと村人の方を見つめたが、次の瞬間ぱつと立ち上つたかと思ふと、丁度俊夫君の前に坐つて居た市さんの頸筋めがけてとびかゝつたので、市さん

はアツといつて仰向けにたふれましたが、留吉は死物狂で、何物をか捜さうとするかのやうに、その身體に乗つたり降りたりしてあばれました。  
 「ア、いけないく。留吉、堪忍してくれ、お前のお母さんを殺したのは俺だッ！」と、市さんは苦しさに叫びました。

皆さん、お豊さんを殺したのは市さんでした。市さんはその場から警察へ連れられて行きましたが、村の人はあまりのことにびつくりして碌に口をきく人さへありませんでした。市さんの白状する處によると、金に困つてかねてからお豊さんをねらひ、祭の時に信次郎の手拭を拾つたので、お豊さんを殺して金を奪ひ、手拭をそのままにして置いて信次郎に疑のかゝるやうにたくなだとの事でした。その夜、歸京の途上で、俊夫君は小田さんに向ひ次のやうに語りました。  
 「兇行を發見したのが市さん、信次郎と一しよに酒をのんだのが市さん、それから警察で手拭を盗んだのが間違なく市さん。で、僕は犯人が市さんだらうと見込をつけ一芝居やつたのです。市さんが一生懸命に芝居を見て居るうしろで、僕はお豊さんが頸を絞められる時に、靴の中の鮎の包をとり出してひよいと市さんの肩のそばへ差出したのです。留吉は二三日魚に飢ゑて居たので、すぐにかぎつけてそれを取りに來たのですが、僕が再び靴の中へ入れたから、市さんが持つて居ることだと思つて、留吉は大に捜しました。然し市さん自身は、留吉が犯人を思ひ出したと思

ひ、たうと白状したのです。科學探偵とは、顯微鏡や試験管を使ふことばかりを意味するのでありません。物事を科學的に巧みに應用して探偵することも、科學探偵なのです。」

# 紫 外 線

## 水 銀 石 英 燈

讀者諸君は、塚原俊夫君の取り扱つた「紅色ダイヤ」事件といふのを記憶して居て下さるだらうと思ひます。その事件を紹介する際、私は俊夫君に金持ちの叔父さんのあることを話して置きました。最近俊夫君はこの「赤坂の叔父さん」に實驗室の一部を建て増してもらひ、其處へ水銀石英燈といふものを買つてもらつて据附けたのであります。

どうして、俊夫君が水銀石英燈を買つてもらつたかと言ひますと、先日俊夫君は、ある外國の犯罪學に關する雜誌を讀んで、近頃外國では犯罪の探偵に水銀石英燈が盛んに使用されるといふことを知つたからであります。そこで、研究好きな俊夫君は、赤坂の叔父さんに頼んだところ、早速叔父さんは快諾して實驗室を建て増し、器械を買ひ入れて備へつけて下さつたのであります。かねて俊夫君はレントゲン線の装置がほしいのでしたけれど、あまり大袈裟になる故我慢し

て居ましたが、水銀石英燈は簡單なものですから、たうとう叔父さんにねだつた譯です。

さてこゝで皆さんに水銀石英燈がどんなものかといふことを御話して置かうと思ひます。水銀石英燈といふのは、一口にいへば紫外線と稱する一種の光線を發生する器械なのであります。そこで私は更にさかのぼつて、紫外線が何物であるかといふことを述べる必要があります。

皆さんは日光が通常七色の光線から成つて居ることを御存じであらうと思ひます。即ち、赤色、橙色、黄色、綠色、青色、藍色、紫色がこれでありまして、日光光線が分光器で分析しますと所謂スペクトルとなつて、これ等の美しい色にわかれます。然し、日光光線には、此七色の光線の外に、なほ眼に見えぬ二種の光線が含まれて居るのであります。通常赤外線、紫外線と呼ばれて居るのであります。赤外線はスペクトルの赤色の外部に位するといふ意味であり、紫外線とは紫色の外部に位するといふ意味であります。

光線は申すまでもなく、光波と稱する一種の波であります。スペクトルの赤色の方から紫色に向つて漸次その波長が小さくなり、反對に屈折力は大きくなるのであります。さうして赤色の側の光線は温熱的作用を有し、紫色の側の光線は化學的作用を有するのであります。それ故赤外線は最も温熱的作用に富み、紫外線は最も化學的作用に富んで居るのであります。

日光が人間の健康を増進するのはこの紫外線の化學的作用によるものでありますから、フィン

ゼンといふ人は、紫外線を発生せしめて、色々の病氣を治さうと企て、所謂フインゼン燈なるものを發明したのであります。ところがこのフインゼン燈なるものは装置が少し大袈裟でありますから、後にクローマイエルといふ人は、もつと簡単に紫外線を発生する装置を考へたのであります。それが即ち水銀石英燈なるものであります。

水銀石英燈といふのはその原理を一口に申しますと、真空の石英製の管内に水銀の蒸気を充たし、それに直流の電氣を通じて發光せしめるのであります。さうすると水銀は紫外線を發生し、石英はよく紫外線を通過せしめますから、頗る簡単に装置することが出来るのであります。通常石英燈に要する直流電氣は、七十ボルトから二百ボルト位のものであります。實際に装置するに當つては、石英燈が熱し過ぎないやうに水を以て冷却する必要などがありますが、全體は極めて簡単なものであります。

さて、水銀石英燈は通常病氣を治療する目的で使用されて居るのであります。近頃は犯罪の科學的搜查にも使用されるに至つたのであります。さうして犯罪の科學的搜查には、紫外線の化學的作用でなしに、主として物理的作用が應用されるのであります。

紫外線がどういふ物理的作用を有するかと申しますと、紫外線は多くの物質に當りますと一種の燐光様の光を發生せしめるのであります。この燐光様の光は紫外線の當つて居る間光ると、

紫外線を當てることを止めてからもなほ暫くの間、つて居るのがあるのであります。さうしてこの後者即ち一旦紫外線を當てると紫外線を當ててゐることを止めてからでもなほ暫くの間、光つて居る物質の方がはるかに多いのであります。

紫外線に當つて光るものはどんなものかといひますと、多くの自然の産物がそれでありました。さうして、その自然の産物を人工的に模倣したものは光らないのであります。例へば、人間の齒は、紫外線に當つて光りますけれど、他の物質で作つた義齒は光りません。又、象牙や骨などは光りますけれども、象牙に似せて作つたものは光りません。又、天然に産するダイヤモンドは光りますけれども、ガラスで似せて作つたのは光りません。それ故紫外線に當て、見ればダイヤモンドの眞偽はすぐに鑑別することが出来るのであります。

なほ又多くのアニリン色素は、紫外線に當ると極めて美しい光を發します。それ故染料物の鑑定等にも紫外線は應用されるのであります。なほ又同じ原理によつて、書畫の眞偽の鑑定をすることも出来るのであります。この他穀物の粉末なども、紫外線に當るとやはり光り始めるのであります。

俊夫君は、叔父さんから水銀石英燈を買つて貰つた當座、毎日、實驗室にこもつて色々のものを持つて來ては紫外線を當て、電流の強さを色々に加減して深い研究を行ひ、一々それを手帳

に書きとどめて居りました。人間の髪の毛とか動物の毛とか、或は血液とか尿とか、或は各種の繪の具とか、手紙に用ふる封蠟とか或は衣服の繊維など手當り次第に研究し、而もある場合には立派に鑑別が出来るので、俊夫君は有頂天になつて喜び、それこそ寢食を忘れて實驗室にとちこもり、十数日の後には、もう紫外線通となつてしまひました。

「兄さん、何か一つ大事件があつてほしいものだねえ。こんどはこの紫外線を使つて探偵して見たいから」とある日——それは四月のことでした——俊夫君は私に向つて言ひました。

「さうだねえ。大事件といへば此頃銀座の××寶石商を襲つた賊は、いまだに逮捕されないぢやないか。どうだね、あの事件など、紫外線では解決出来ぬかね」

と私は冗談半分に笑ひながら申しました。

銀座の××寶石商は、東京でも屈指の大店で、時價八十萬圓の頸飾が、一夜盗賊のために盗み去られたのであります。警察では非常な活動をして居るのですけれど、二週間餘を過ぎた今日盗賊は勿論のこと、頸飾が何處にあるかといふこともさつぱりわかりません。犯行の現場にも何の手がかりも發見されず、金庫はアセチレン吹管で破壊されて居りましたが、たゞ賊が外部から侵入したことだけは確かださうであります。

俊夫君も私の言葉をきいてにつこり笑ひましたが、また忽ち眞面目顔になりました。

「僕は此頃中、紫外線の研究に一生懸命になつて居て、犯罪事件の研究はそつちのけになつて

居たよ。なるほど兄さんのいふ通り、あの事件は面白さうだね。一つ叔父さんにその後の経過を聞いて見るかな。兄さん、ちよつと電話をかけてくれないか」

私が立上らうとすると、丁度その時實驗室の扉を叩く音がしました。開けて見ると來訪者は驚いたことに「Pの叔父さん」即ち警視廳の小田刑事でありました。

「やあ、丁度今、あなたの御尊をして居ましたよ」と私が言ひました。

「さうかね」と小田さんはにつこり笑つて中へはひり、やがて俊夫君と對座しました。

「Pの叔父さん、銀座の寶石事件はどうなつたですか？」と俊夫君はたづねました。

小田さんは顔を曇らせました。

「まださつぱり、見當がつかない。どうも、今迄取り調べたところによると、其處らにうろついて居る盗賊とはちがふらしいのだよ。ことによると、東京市中に堂々たる邸宅をかまへて居る人間であるかも知れない。だから今は、その方針で搜して居るのだが、中々はかどらないよ。——それはまあ、それとして實は昨夜妙な事件が起きたので、それについて俊夫君の智慧を借りに來たのだよ」

かういつて小田さんは俊夫君の顔を見つめました。すると俊夫君の眼は急に輝き出しました。

「それは何ですか？」と俊夫君はたづねました。

「實はねえ。昨夜須田町の電車停留場で、一人の男が電車に轢かれて死んだのだ。男は二十五

六で洋服を着て居たが、ポケットの中には、墓口と手巾とが発見されたばかりで、その外には手帳も何もなく、さつぱりその身許がわからないのだ。洋服にも手巾にも姓名が書いてないので、取りあへず警視廳へ死體を運んだのだが、今日になつても身許はわからない。ところがその墓口の中には十二圓五十三錢の金と、外に黒い色をした紙が一枚はひつて居たのだ。その紙には、白い繪具で、ある文句が書かれてあるのだが、その意味がどうしてもわからないのだ。警察のものが、頭を挫つて考へてもわからぬので、俊夫君に読んで貰はうと思つて來たのだ」  
かういつて小田さんはポケットから、一枚の黒い紙を取り出しました。それは三寸四方位の大きさの紙でした。

### 八十萬圓の頸飾

小田さんは、黒い紙と同時に、なほ一枚の寫眞を取り出しました。  
「これが須田町で、ゆうべ轢かれた男の死顔だ」と申しました。俊夫君は暫らくその寫眞をながめてから、黒い紙を取り上げました。それは黒く染めた日本紙で、その上に毛筆で、白い繪具をもつて、次の文字が書かれてありました。

やかしぬもつれ  
きためほんとり  
すけなをびゑね  
つまけらますむ  
ちまとへよぼに  
ばりでのぶおす  
るくはてさたこ

俊夫君は一生懸命に見つめて居ましたが、さすがに、わかりかねたと見えて額に皺をよせました。

「どうだね？ 俊夫君。倒まに讀んでも、斜に讀んでも一字置きに讀んでも、さつぱり、意味をなぬぢやないか」  
俊夫君はそれには返事をしないで、熱心に研究して居ましたが、やがて、立ち上つて、「二寸待つて下さい」

と言ひ乍ら、紫外線装置のある室にはひつて行きました。次の瞬間、紫外線を使用する特殊の音



が聞えて來ました。

凡そ七分ばかり過ぎて、俊夫君は戻つて來ましたが、その顔は愉快げな色に輝いて居ました。

「Pの叔父さん、讀めましたよ」

「え、わかつた？ 何といふ意味？」

「かういふ文句です」といつて俊夫君は、手帳の中に書いた鉛筆の文字を示しました。

本郷區湯島新花町二十六番地の一  
二階、北窓の下

小田さんは、あまりのことに目をぱちくりさせました。

「一たい、どうして、あの文字が、かういふ風に讀めるね？」と息をはずませてたづねました。

俊夫君はにこりと笑ひ、「こちらへ來て下さい」といつて、小田さんを紫外線装置のある室に導きました。私もつづいてはひりました。いふ迄もなく、この室は暗室作りで、俊夫君が電燈を消すと、まつ暗になりました。それから俊夫君はスキッチをねぢりましたが、それと同時に水銀石英燈は美しい紫色の光を出しました。俊夫君は先刻の黒い紙片をその下に置いて照しました

が、不思議にも白い文字とは無關係に、前記の「本郷云々」の文字が螢光を發してあらはれました。

「これは、この黒い紙にアニリン色素で書いたものです。だから普通の光線では見えません。然し、アニリン色素は紫外線に當るとこのとほり螢光を發するものです」と俊夫君はいひました。

「なーんだ。すると、この白い文字は人目を迷はせるつもりで書いたのか？」と小田さんは太息をついて申しました。

「さうですよ。だから倒まに讀んでも斜に讀んでも意味をなさぬのです」

私たちは暗室を出て再び應接室に戻りました。

「一たい、この本郷云々といふ所書は何でせう？」と私は小田さんにたづねました。

「さうだねえ、死んだ男の住所かも知れないねえ」と、小田さんは頭を傾げて答へました。すると俊夫君は、

「兎に角、此處を今からたづねて見ようぢやありませんか」と申しました。

私たちは、直ちに支度をして自動車を雇ひ、湯島新花町をさして走らせました。

二十六番地の一は、ある閑所のつき當りの二階造りの家でしたが、驚いたことに表の格子に、

「かし家」の札が貼られてありました。隣りの家できいて見ると、この家は、夜になると時々人の歩くやうなものが音が聞えるので、化物屋敷だと言つて、久しく借手がないといふことでした。然し、家主が一軒置いて隣にありましたので小田さんは許可を得て来て、私たちは、空家の中にはひりまりました。表の錠が下してなく家の中はずるぶん荒されて居りました。

俊夫君はつか／＼と二階へ上りました。俊夫君は化物などを信じないから少しも怖くはないのです。二階は六疊と三疊の二間からなり、三疊の方に、北に面した窓が一つありました。「北窓」とあるのはそれに違ひありません。

然しその北窓の下には、疊があるばかりで何の變つたこともありませんでした。俊夫君はひざまづいてあたりをながめまはしましたが、もとより何物をも發見することが出来ませんでした。

「兄さん、疊を上げて下さい」と、暫らくしてから俊夫君が申しましたので、私は疊を上げました。

と、その時私はアツといつて、もう少しで疊を手からすべらすところでした。といふのは、その疊の下の板に出て居る凹みの中に、きら／＼光る蛇のやうに、ダイヤモンドの頸飾がとぐろをまいて横はつて居たからであります。

私たちは思はず顔を見合はせました。

俊夫君は、その頸飾を取り上げて、小田さんに渡し、

「どうです、これに心當りはありませんか」と、たづねました。

小田さんは暫く、それをいぢつて居りましたが、やがて、

「どうもこれは銀座の××寶石商から盗み出された、例の八十萬圓の頸飾らしい」と、答へました。

「どうですか、それではこれからすぐ、銀座へ行きませう」

かういつて俊夫君は、さつさと降りかけたので、私たちも續いてその家を出ました。

私たちは、待たせてあつた自動車に乗つて銀座をさして走らせました。とほり過ぎる兩側の家の庭に、ところ／＼遅櫻が美しく咲いて、うら／＼かな午後の陽が靜かに照りわたつて居りました。

程なく私たちは銀座の××寶石商に到着しました。でつぶり肥つたあから顔の主人は、小田さんの顔を見るなり私たちを奥の入室に請じ入れました。

小田さんは、ポケットから、頸飾を取り出して、主人の前に差出しました。

「ヤッ」と感嘆の聲を發して主人はそれを手に取つて見ましたが、暫らくながめて居る間に、顔に失望の色があらはれました。

「これは私の家で盗まれた頸飾の模造品で御座います」と、力なげに答へました。

「え？模造品！では贋物ですか？」小田さんは眼をまるくしてたづねました。  
 「さうで御座います。實はこの模造品も、私の家で作らせたので御座います。一たいどうして御手に入りましたか？」

そこで小田さんは、これを發見した順序を簡單に話しました。さうして最後に、この模造品が誰の所有であるかをたづねました。

寶石商の話すところによると、先日盗まれた頸飾といふのは實は麻布の△△侯爵夫人の所有であつたが、故あつて寶石商が買ひ受け、夫人の求めによつてその模造品を作つて、本ものの代りに納めたといふことであります。實はこのことは侯爵夫人のために警察の人にも秘密にして居たのですが、かうして、模造品が警察の人の手に渡れば、秘密にするのは却つて搜索をさまたげるかも知れぬから、何もかも申し上げるのですと、主人は附け加へて言ひました。

私たち三人はそれから寶石商の家を辭して、その頸飾をもつて更に自動車を麻布の△△侯爵邸に走らせました。侯爵邸は見たところ小ぢんまりとした家で、可なりに廣い庭に取りかこまれて居りました。

警視廳から來たと執事に申し出たので、侯爵夫人が直接に逢つてくれました。夫人は極めて質素な着物を着て、快く語りました。挨拶がすむと小田さんは、頸飾を出して、

「これは御宅さまのものでは御座いせんか」とたづねました。

「まあ！」と夫人は軽い叫び聲をあげました。「どうしてこれが……これは、一昨日盗まれたので御座います。一たいどこに御座いましたか？」

「實は妙なところで見つけたので御座いますが、取り調べの結果、御宅さまのであるとわかりましたので、御伺ひした譯で御座います。一たいどうして盗まれなされたので御座いますか？」夫人はさつと顔を紅らめて言ひました。

「その頸飾は、御承知かも知れませんが模造品なので御座います。ところが、私の家に雇つてあつた書生は、それを本ものとも思ひましたものか、一昨日盗んで逃げたので御座います。本物はもはや申すまでもありませんが、××寶石商で此頃盗まれたのがそれで御座います」

「その書生さんはいくつ位の男でしたか？」  
 「二十五だとか言つて居りました」

小田さんは、それをきくなり、ポケットから、死んだ男の寫眞を取り出して夫人に見せました。

「その書生さんはこの男ではないでせうか？」  
 夫人は寫眞を見るなり、アツといひました。

「まあ、これです。これが書生の村田です。一たいどうして村田が死にましたか？」  
 と、夫人は呼吸をせはしくたづねました。

白晝の殺人

小田刑事は、侯爵夫人に向つて、書生の村田は須田町の停留場で電車に轢かれて死んだ顛末と模造頸飾の発見された次第とを物語り、最後に、

「で、村田君はいつ頃こちらへ雇はれて來ましたか」と訊ねました。

「今月の十日に參つたばかりで御座います」

これを書いた小田刑事は俊夫君を顧みて言ひました。

「すると、銀座の××寶石商へ盗賊がはひつた五日あとだ」

今迄、侯爵夫人と小田刑事との會話を黙つてきいて居た俊夫君は、この時侯爵夫人に向つて、

「その村田といふ書生は誰の紹介で御雇ひになりましたか」とたづねました。

「彌町富士見町の木村先生の紹介です」

「木村先生と仰しやると、あの有名な醫學博士の木村病院長ですか」

「さうです。木村先生にはうちの者が病氣のとき、いつも御用介になります」

俊夫君はこの時何思つたかにつこりと笑ひました。その笑ひは、俊夫君が何か手がかりを得た

ときにもらす笑ひでした。

その時表通りの方から、號外配りの鈴の音がきこえて來ました。俊夫君は一寸聞き耳をたてま

したが、更に言葉を續けました。

「木村博士へは、もう書生の逃げたことを御話になりましたか」

「いゝえ、まだ御話しません」

すると、俊夫君は小田刑事に向つて言ひました。

「では、これから木村病院へ行きませう」

この時、執事が一枚の號外を手にして、あわただしくはひつて來ました。

「奥さま、大變です。木村先生が殺されなかつたさうです」

「えッ」といつて、侯爵夫人はとび上りました。さうして執事の差出した號外を、急いで讀んでから無言のまま小田さんに渡しました。

木村病院長白晝殺害さる  
彌町富士見町×丁目木村病院々々長醫學博士木村貞一氏(四三)は本日午後二時頃、同病院  
應接室で、何ものかのために、心臓部を刺されて即死した。同氏の死體は看護婦の一  
人によつて発見されたが、犯人は誰ともわからず、急報により警視廳より白井刑事を  
はじめ、警察醫、寫眞班等かけつけて搜索に従事し、一方市内には非常線を張って犯人  
嚴探中である。